
タイセツナモノ

白黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイセツナモノ

【Nコード】

N79870

【作者名】

白黒

【あらすじ】

ごく普通に暮らしていた女の子が『NARUTO』の世界の『春野サクラ』に転生して。

原作沿いです。オリキャラ、独自解釈及びオリジナル要素満載です。

ご都合主義なので、それでもよろしければ読んでくださいm(´`)
—)m。

ご意見、ご感想心よりお待ちしております。

処女作なので、「この表現どうなの？」とか「この書き方はちょっと……」というご意見やアドバイスも大歓迎です！！

前の作品名：『ナルトの世界で頑張る話』

はじめに

これから読む方へ。

この作品では、NARUTOの世界に存在する忍術の他に、魔術や神術といった他の世界の概念が関わってきます。

それがこの作品の『根っこ』……つまりこの作品を作った『理由』につながってきます。

でも『根っこ』なので、話のメインはNARUTOの世界です。

チートやそうといった設定を盛り込んだことにも作者なりの理由があります。

その辺りの事は、全ての話が終わった一番最後に『後書き』として書かせて頂こうと思っております。

あ、でも本編の所々にもちよくちよく書いていくつもりです。
。()！

もう一つ。この小説は第2部まで続く『長編小説』になる可能性が高いです。

それらを踏まえたうえで読んで頂けたら幸いです。()！

初心者のくせにそんなことやっていいのか！！

でも作者は反省も後悔も………思いつきりしてます！……！。()。

。(オイ)

すんません！！(T|T)！

でも頑張って完結まで書くので、「しゃーねーな。読んでやるよ」「
つてな感じで時間つぶし程度にでも読んで頂けたら幸いですm|

—) m

長くお付き合い頂けたら、作者は泣いて喜びます(ノ T)。

プロローグ

△ 耳がジンジンと痛くなりそうな冷たい風の吹く小さな駅のホー

り、人影もまばらなそこに、大きなスーツケースをゴロゴロ引つ張り、土産物の紙袋を3つも下げて歩く一人の若者がいた。

しつかり者な印象を与える少し太い眉以外はごく普通の顔。男のような短い黒髪のショートカット。膝まである長い茶色のシンプルなコートに黒いズボン。

ふと視界に入ると男かと思ってしまいそうだが、身に付けている綺麗なマフラーと手袋が彼女が女であることを物語っていた。

彼女は今年二十歳になったばかりの短大生だ。今日から冬休みで今は里帰りしている途中。

「うわ！ 寒……！」

ヨイシヨ……と若者らしからぬかけ声と共に重そうに荷物を降ろし肩をほぐす。

ふと視界に手袋とマフラーが入る。お揃いの淡いピンク色をしたそれらは、数年前に彼女の祖父が誕生日プレゼントに贈ってくれた物

だ。

祖父は優しく、時に厳しかった。彼女は小さい頃よくいじめに遭ったが、その都度暖かい言葉で勇気づけてくれた。

勉強やスポーツでそれぞれ優れたものを持つ兄弟の中で、コンプレックスを持っていた彼女を認めてくれた最初の人物でもあり、彼女にとっても大きな存在だった。

だが、そんな祖父は去年の12月末の頃突然倒れて病院に運ばれた。

彼は今までいくつもの癌を発症し、その度に手術を受けていた。しかし悲観的になるどころか逆にそれを担当医に自慢げに話すような人物だった。

今回は癌ではなく軽い脳震とうで、回復の兆しを見せ、じきによくなると言われていた。

だが容態が急変し、正月の三が日に他界した。

(あれからもう一年か……。)

マフラーと手袋を見ながらにっこり微笑む。

(おじいちゃん、テストとかバイトとかいっぱいあったけど、私頑張ったよ!!)

働いておばあちゃんやお父さんやお母さんに恩返しするから、ちゃんと見ててよねー！)

空を見上げて「ヨシッ！」と気合いを入れる。彼女のこういつとこるは祖父譲りなのかもしれない。

ふと幼い笑い声が聞こえてそちらを見る。

兄妹だろうか、小さい子ども二人がホームの片隅につもった雪で雪合戦している。

その光景を微笑ましく思いながら見ていると、向こうから電車が走って来た。

やっと来たか……と地面に置いた紙袋を持つとした。

その時だった。

じゃれあっていた少女が足を滑らせたのだろうか。

その体がホームから投げ出された。

とっさに体が動く。

少女に手を伸ばしてつかみ必死に引き寄せる。

だが駆け寄った時の態勢が悪かったのか彼女も態勢を崩した。

反射的に少女をホームへ投げ出すと、積もっていた雪がクッションとなって少女を受け止める。

(良かったあゝ………………。……………ん?)

視界が眩しい光で遮られ、耳を塞ぎなくなるようなかん高い音が鳴り響く。

走馬燈というのだろうか。途端に電車の早さがゆっくりになった。

(あ……………親より先に逝っちゃダメってよく言うけど……………助けたもん。間違っていないよね?)
いや、むしろ格好良かったよね自分? オーケー! ガッツだ!
! おじいちゃんに会える!!……………ハズ!!…!と思う!きつと多分!!…!そうと願って!!…!
あ……………でもこれ絶対スプラッタ……………)

体中に強い衝撃が走り、そのためか逆に痛みを感じることなく彼女はそのまま意識を手放した。

漂流

どこまでも続く闇。その中で輝きを放つ幾つもの光

いつからここにいたのだろう。

その圧巻とも壮大とも言える光景に言葉すら出て来ない。
同時に自分がちっぽけなことを感じて圧倒され、思考することすら
忘れてしまう。

どのくらいの間呆けていたのだろうか。ようやく我に帰った。

(よし、まずは落ち着こうじゃマイカ！！ 私はクールだ！
ピークール！！)

思考のセリフがおかしくなっている。
かなり混乱しているようだ。

深呼吸をしようとするが自分の体の異変に気付く。

体の感覚が今までと少し違う。

自分の肉体ではない……………いや、肉体が無くなって軽いがからっぽになっていると言ったほうがしっくりくるかもしれない。

苦しくはないが、理解不能な状況に焦りが出てくる。

更にパニックになりそうになったが、ふと一番最後の記憶がボンヤリと蘇る。

（そうか……………確かあの時死んじゃったんだからか……………？

なら、つまり今私は幽霊つと。なるほど！ 幽霊ってこんな感じに
なんのか！！ つーかそういうことにしておこう！

なら、ここは三途の川か？ やけにSFなとこだけど……………天の
川のなシチュエーションになってんのか？？

……………うん。それならロマンティックだ！！ オークー！！
むしろウェルカムだ！！！

なら、これを渡るしかないな。）

再度周りを見渡したすが、相変わらず気が遠くなるような眺めが続いているだけだ。

(ヤケにデカい川だな……………自分が来た側の岸も見えないなんてこのSFめ！
いや、まてよ。人生が終わった後のステージなんだから当たり前か……………。
そうか……………つまり私への挑戦状だな！？　いいだろう！！
受けて立あーーっ！！！)

桃子。“道”に迷った時はの……………まずは自分を見つめ直すんじゃない。そして、自分の“道”を見つけて、それが例え他の人から周り道に見えようと、自分を信じて突き進め。じーちゃんはいつも桃子の味方じゃよ

ありがとう、おじいちゃん。

頭の中に祖父のセリフがよぎる。

(よっしやああー！！！！　こっちだ！！　自分を信じて突き進めー！！！！！！)

“道”の意味を取り違えていることは本人も頭では分かっているが、

今は気にしない。

彼女は上も下も右も左も分らないただ同じ宇宙の広がるだけの空間を、なけなしの根性とプラス思考でひたすら進み続けた。

どのくらいの時が経っただろうか。

宇宙空間に“変化”が現れた。

周りの闇を呑み込んでしまいそうなほど黒い『闇』。
いや、実際に呑み込んでいるのかもしれない。

『穴』とも『塊』とも分からない『闇』はどこまでも黒く、その存在感はこの壮大な宇宙空間より大きくて
なのに自分の影のように静かだった。

(怪しい……………怪しすぎる!!)

彼女は進みながら自分の進路上にある“それ”をじっと見た。

“鈍い”と自他共に認める彼女が怪しいと感じた、ということとはつまりそれはかなり危険な物である可能性が高い……………というより、そう断言するべきだ。

だが彼女の頭には『進む』以外の選択肢は無い。

彼女は怯むことなく、むしろ勇んで闇の中へと突き進んで行った。

(うお!? なんか入って……………!?)

闇に呑み込まれた瞬間、何か溶け込んできたのを感じた。
いや、自分が闇に溶け出しているのかもしれない。

(内臓つぼくなかったけど、もしかして何かの栄養になんのかな?
……………いや、例えそうだとしてもボクは頑張った!! う
ん!! 悔いはな——い!!——!)

最後の最後までアホみたいなプラス思考を發揮しながら、彼女の意識は闇に呑まれた。

転生

ふと目を覚ますと木の天井が目に入った。

「あう〜？ あぶばぶあああ〜？ (あるえ？？ここどこだあ
〜？)」

何かがおかしい事に気づいて首をひねり考える。

(ん〜〜……………。何かおかしいんだろう？？ うーん……………。)

「あいいー！！ あばあぶばああ (まいつかー！！ 気
にしたら負けだ)」

小さいことは気にしない 小さくなくても気にしない そ
れが〜〜〜

「あらあら、おっきしたの？ フフ。笑顔でしゅね〜 楽し
い夢を見たのかな？」

桃子が今作ったデタラメな歌を歌っていると美人な女性がフンワリ
とした笑顔を浮かべながら桃子を優しく抱き上げた。

(うお!? 美しい!! 何て美しいんだ!!! 絵画の中
から出て来たのか!?? 眩しい!! 眩しすぎるっ!!
..... じゃない! 人いたのか!! もしかしてさっきの聞か
れた!!!???)
恥ずかしい!! 恥ずかし過ぎる!!!)

本人は頭を抱え悶える仕草をしているつもりなのだが、手を小さく
動かしているようにしか見えない。

「あい、うあう (あは、おはよーございま〜す) 「

(は!!! そうか! 今は口調も(ついでに頭も)おかしかっ
たんだ!!
フハハハ! ならオーケーだ!! 私黒歴史が更に黒くなる
ことはな〜い!!!)

主人公は理解不能な状況下でパニックになりそうになるとハイテン
ションになり、少々イタイ奴になる傾向がある。
今の彼女の頭はもはやカオス状態だ。

その後ミルクの時間だったのか授乳する羽目になり、桃子は心の中
で悲鳴を上げることになったのだが割愛する。

眠気に襲われ、桃子の目の前が暗くなっただが次の瞬間“白”が広がった。

(うにゃ？　今度はなんぞや？?)

しばらくポケットとしていたが、ここには誰もいない。

1人になった今なら先のことを落ち着いてゆっくり考え……………

「イヤッフウウウウー！！　俺の天下だぜヒヤツホー……！！」

……………るなんてことはなくむしろ悪化した。一人称も『私』から『俺』に変わっている。
もはや末期だ。

ふと視線を感じて後ろを振り向く。

スラリとした長身、白いローブのような服の上からでも分かる引き締まった体。

腰まで伸ばした髪は光の加減か何かでいろんな色に見える。

目や鼻、口が絶妙なポジションで顔を形作っており肌はやや色白。

……………要するに超美形な青年が立っていた。

先ほどの桃子を見たのだろう。

明らかにひいているが、今の桃子にそんなことを気にする脳細胞は一つとしてなかった。

「HEY!! 彼女!!! 俺と熱い時間を過ごそうぜ!!」

「誰が『彼女』だ誰が!! どう見ても男だろうが!! そして断固断る!!!」

「フツ……………照れるなよセニョリータ。そんなキミも可愛いぜ!! 僕の前では素直になっていいんだよ??? さあキミの全てをさらけ出すんだ!!!」

愛らしい笑顔を浮かべ、抱っこをせがむように小さな両腕を広げているが、変態発言が炸裂しているせいで台無しになっている。桃子は白い空間で青年が白い服を着ているため体のラインがよく見え、さらに彼の顔の美しさもあってテンションがさらにオーバーヒートしていた。

青年はしばらくそれを無言で眺めていたが徐に服に手をかける。
桃子はコテンと頭をかしげて、それを不思議そうに見た。

「おい。これでも女に見えるか石頭？？」

バツとローブを脱いで上半身だけ裸になると桃子の前に片膝をつく。
よほど頭に来たのが目がかなり据わっている。

「……………おい。……………おい！！」

急に動かなくなった桃子にイライラと声をかけるが動き出す気配は
無い。

だがいくらムカついたとはいえ相手は赤ん坊。殴るなんてことは出
来ない。

青年はスツと人差し指を立てると軽く下に降ろした。

途端に耳をつんざくような轟音が鳴り響いたが青年には特に効果は
ないらしく、不機嫌な顔に変化は見られない。

……………が、目の前の赤ん坊の“石化”も解けることはなかった。

怪訝そうに眉を寄せつつ赤ん坊の頬に触れ……………引つ張った。

「いひゃいひゃい……」

「漸く気づいたかこの石頭が。」

「ひゃやひひえひよ〜〜〜!! (離してよ〜〜〜!!)」

「お前は『誰』だ? どこから来た?」

「はひゃひえ〜〜〜!! (離せ〜〜〜!!)」

「いいから答える。」

「ひよひゆひえ〜〜〜! (よくな〜〜〜!)」

チツと舌打ちすると漸く桃子の頬を解放する。

赤くなった両側の頬を手のひらで包み、ムツとした表情で青年を睨んだ。

「ほっぺたもげるとこだったじゃんか!!...!!」

「フン。自業自得だ。」

「俺の……………俺の夢を返せえええ……………!!!!!!」

目の前の綺麗過ぎる顔に我慢出来なくなったのか、ただ白だけの空気に向かって腹の底から叫んだ。

「いいかげんにしろ。話が進まん。」

「若いのにそんなチカチカしてたらモテないぞ少年。漢ならもっとドッシリ構えろ!!!!!!」

「日本語がおかしい。」

「さあ!! 少年よ!!!!!! 大志を抱け!!!!!! あの白い空
間に向かってキミの熱い思いを叫ぶんだ!! そうすればきっと
キミの熱い思いが夕日に……………いひゃいひゃいひゃい!!!!!!」

しばらくお待ち下さい。

「すみませんでした。」

数分後。小さな赤ん坊の土下座といふかなりレアな光景がそこにあつた。

「……………分かれればいい。話を進めるぞ。俺の質問に正直に答えろ。それ以外の発言は許さん。」

また何か言いたそうにする桃子を視線だけで黙らせる。

「まず一つ。お前は“誰”だ？」

「桜木桃子です。ハイ。」

「年齢、家族構成は？」

「20歳。えつと、祖父母、父母、兄一人に弟二人。おじいちゃんは去年他界したけど。」

「……………苦手な物は？」

ずっとそらしていた目をチラリと戻し、また逸らす。

「男かな……。」

それを聞いた青年の目が怪しく光ったが、男の上半身を直視出来ず目を逸らしていた桃子がそれに気づくことはなかった。

「さて、石頭。お前はこれからどうしたい？」

「……………そうだなあ。まずはその呼び方を……………。いや、ナンでもナイデス。」

青年が一步踏み出すなり誤魔化す桃子。
既に主人公の面影なんてものは無い。

「お前の言葉通りなら、前世だったお前は存在していたという記録はない。で、『管理者』の中でも優秀な俺は、たとえ同じ『管理者』やら『神』やらが何かの生きた証拠を消したとしても、必ず残る情報
の痕跡を見る事は朝飯前なわけだ。……………どういう意味だか解るか？」

「ええと。つまり……………『私が嘘ついてるぜ』って無駄美貌クンは言いたいんだよね？」

「石頭にしては物分かりがいいな。………と言ってやりたいところだが一言多かったな。そんなに引つ張られたいのか??？」

「いひゃふひはひふ〜〜!!! (ごめんなさい〜〜!!!)」

満足するまでひとしきり頬の感触を楽しむ。

「さて、いい加減話を進めるぞ。お前にはもう一つ問題がある。」

更に赤くなった頬に手を当て、桃子が唸っていたが青年は華麗にスルーした。

「お前にはチャクラと魔力がある。“あるだけ”ならまだ良かったのだが、その量も質俺から見ても規格外だ。さらにもう一つ何か強い力を持っている。」

「あ！　もしかしてここにキミと居んのもそれが原因??？」

「そつだ。俺がお前を精神だけここに呼び出した。」

「なるほど。喋れるのもそのせい？」

「そんなとこだ。」

ふむふむと頷き頭を整理する桃子。

「んじゃ……ドンと来いやあー！！」と叫ぶなり再び両腕を開いた。

「……………抱いて欲しいのか？」

桃子が何か言う前に腕に抱く。しつこいが青年は上半身裸。この行為は桃子の許容範囲を楽に越えてしまった。

(コイツ……………またフリーズしてやがる……………。 “苦手”にも程があるだろ……………。本当に兄弟と住んでたのか???)

少し頭痛を覚えながらも桃子を覚醒させる。

「おい！ コラあ！ 今の話の流れでなんであなんの!!」

「おかしいでしょ!?!」

「…………お前がせがんだんたる。」

「ちつがーうー！　そんな危ない存は消すのが普通でしょ！！
????？」

こんなところへ呼び出すような不可思議なことが出来る青年が普通の人間であるはずがない。

そんな人物が自分に赤いレットルを貼ったのだ。

ならば、彼は自分を消すためにここへ呼んだと考えるべきだろう。

桃子とともう一度生まれ変わるなら、そんな危険な力よりも、安全な場所で畑仕事でもしながらのんびり暮らしたい。

どうせ一度失った命だ。ならば、それを潔く受け止めてやる！

と思ってとった行動だったが、青年の口から出た言葉は予想の遙か上をいくものだった。

「……………何故そんな事をする必要がある？」

「は？」

「こんな面白そうなことを何故わざわざ手放す必要がある？　お前のような石頭でない限りそんなことをする奴は居ない。

だから先ほどから聞いているだろう？　“お前はどうしたいのか

”と。」

その目は新しい玩具を見つけた子供そのもの。
ゾワリと鳥肌がたつ。

(まさか……………解剖か!? 解剖なのか!? いや、でも) どうしたい? 「って聞いて来てるし!
あ……………いや、でももしかして体がもつとデカくなってからがいいとか!? そうか!? そうなのか!!!!!!!!???)

「じゃ……………じゃあ……………何事もなく!! 平和に!! 健康に!!! 暮らしたいでしゅ!!!! 切実に!!」 健

まさかのモルモット・エンドの危機に、恐怖の余り自分が噛んだ事にさえ気づくことなく必死に訴える。
今度は青年のほろが呆気に取られる番だった。
まじまじと桃子を見、無表情だった彼の顔から初めて笑みがこぼれる。

「ククク……………そうか。なら、まずはお前の力を調べなくては何も始まらないな……………」

「ああ……………。ええと。そ…そうデスネ??」

誰もが見とれてしまいそうなその笑みも、今の桃子の目には悪魔の微笑みにしか映らない。

「だが、お前の力に阻害されて俺にはお前を分析出来ない。」

「そ……そうなんだ？」

「だからお前自身が調べろ。」

「どっせって??？」

キョトンと首を捻る桃子に呆れたようにため息を吐く。

「……………集中して自分の中を探れ。そのくらい頭働かせる石頭。」

「あのさ……………キミの名前、聞いてないんだけど……………。」

「……………ヴェリオルだ。」

「そっか!」というと背を向ける。

集中するのかと思えば見ていると次の瞬間大きく息を吸った。

「ベルベルのばかやるおおおおー！！！！！」

叫んでスッキリしたのが満面の笑みを浮かべている彼女の頬がまたリンゴのように赤くなったのは言うまでもない。

「おい！　まだか石頭。」

「いや、そんなこと言われても！！　今まで日本人だったんだよ！？　純国産の無農薬有機栽培の短大生に何求めてんの！！？」

しばらくしてやっと力を調べる段階に入ったものの、今だに上手く行かない。

「……………」

「！！　分かった！　分かったから！　やります！　やらせて頂きます！！」

改めて目を閉じ、今度は自分の中をイメージしてそこへ意識を集中する。

（お！ 何かある……………気がする！！！！）

ええと……………確か引っ張り出して腹で回すように……………???)

「……………何だ？ その目は？」

何か聞こえた気がしたが、暖かい何かが広がると同時に凄まじい圧力を感じ、抗えない眠気に襲われそのまま意識を手放した。

一週間後。

一度に大量の情報が流れ込んだため、一種の『防御反応』として精神が肉体に戻り、情報処理のため一週間の時間を費やした。その間“自我”が戻ることはなかったが、体は普通に赤ちゃんとして過ごしていたようだ。

「それで？ どうだったんだ？」

「えっとね……。えーっとね〜。」

再び白い空間に呼び出され、ヴェリオルにどう説明したものかと首をひねり考える。

「……………つまり最強チートです」

「……………」

「！… いや！ だつてさ！ しょうがないじゃん！…？？
全部説明すんのめんどくさいんだもん！…！」

「ハア……………ならいい。どうせ分かることだしな。」

「あ！ あのさ…！」

「何だ？」

「神術と魔術が使えるみたいだからさ！！ 何ていうか……………その……………専門の先生に教えてもらえたらなあ……………。なんて思ってるわけでした……………」

「ほう？　なら、俺が教える。」

「謹んで遠慮させて頂きます。先生を紹介して下さいれば後は自分で

……………」
「何故だ。」
「……………」
いや、だって先生は優しい人がいい。

」

まさか断るとは思っていなかったのか不機嫌そうに眉を寄せる。
だがしばらくすると黒い笑みを浮かべた。

「そうか……………」
お前がそう言うなら仕方ないな。ならばこの本の精
霊と契約するがいい。」

そう言って紫と白の二冊の本を差し出す。

「あ…あのう……………」

「何だ？」

「何でそんな“ものすごい笑顔”なのかなあ……………」
なんて……………。いいや、すんません。何でもありません。」

大人しく本を受け取る。

紫の本は魔術書、白い本は神術の本。

どちらも中に精霊が入っており、契約すれば彼らが教えてくれるらしい。

契約は精霊に名前を付けるだけ。

紫の本からは大人な雰囲気グラマーな女性の精霊が、白い本からは気難しそうな男性が出てきた。

出て来た女性が「きゃああ〜!!! かわいい〜〜じゃなああい

」と桃子を見るなり抱きついて来るといふハプニング(?)があつたが割愛する。

女性は『ラテイシア』、男性は『クロード』と名前を付けた。

……ありきたりな名前だが2人は気に入ったようだ。

「あれ？ そついえばベルベ……」

「ヴェリオルだ。」

「え？ 何で？ 『ベルベル』可愛いのに……。んじゃあ、

『ベリオル』は長いから『ベル』でいい？」

「お前……ワザとやってないか？」

「？ 何が？」

「もついい。好きにしろ。」

「んじゃあ『ベル』で。あのさ！　ベル。さっきの話だと、つまり私って、小説でよくある転生をしたってことだよな??」

「それがどうした?」

「私が転生したのってベルが作ったNARUTOの世界だって言うてたよね?」

先ほどベルから聞いた話を頭の中で整理していく。

「ああ。」

「結局私ってNARUTOの中の誰になったの?　あ！　それともオリキャラ??」

「……………お前……………今それを聞くのか?　自分のことは分かったんじゃないのか?」

「いや、どうも自分の能力だけでいっばいだったようでした……………エヘ???」

「……中身は石頭のままというわけか……。」

「くづー！　何も言い返せない……！！！！！」

「……お前はNARUTOの『春野サクラ』になった。」

「……………」

転生（後書き）

読んで頂きありがとうございます！！

誤字、脱字がありましたら本当にすみません！

ていうか誤ってばかりですみません！！（<―>）

これからも不器用なりに頑張っていきますので、読んで頂けたら嬉しいですー！！（　　）

主人公について

《プロフィール》

名前：春野サクラ

忍者登録番号（予定）：012601

誕生日：3月28日（生後2ヶ月、おひつじ座）

血液型：O型

性格：負けず嫌い、自由奔放

好きな物：梅干し、納豆、豆腐、野菜など

備考：前世での彼氏居ない歴〃年齢

《能力》

潜在チャクラ量：（属性：闇黒）

魔力：（属性：闇黒）

源創力：

頭脳：IQ測定不能（ツリーダイグラム以上の演算能力及び記憶力）

忍術：忍術・幻術・呪印術・封印術・秘伝の術・血継限界使用可能
（術による反動なし）

魔術：全ての世界に存在する魔術が使用可能

能力：

真眼（世界の未来・現在・過去、相手の情報・感情等を見ることが可能。）

情報操作能力

無効化（常時発動）
不老不死
体自在操作能力

《解説》

チャクラ属性は5つ全てを持っている。
属性を自由に合わせることが出来るため、全ての術が使用可能。
魔力属性についても存在する全ての属性（火、土、水、氷、雷、光、闇、重力、創造、破壊、空間 e t c）を持ち、組み合わせは自由。

この二つの力は共に黒い色をしており、桃子が悪役っぽいと感じて属性を『闇黒』と名付けた。

源創力は『気や霊力、妖力、魔力、チャクラ、神力を創り出す源となる力』。

神術を発動出来る神力や霊力などもこれから練ることが出来る。

攻撃や防御をする際、力がわずかに混ざるだけでも威力が飛躍的に上がる。治癒に言えば自然に治った時と同じ効果が得られ、自分の治癒力も上がる。

ただし、少しでも自分から外へ力を使えば変化や変身をしていても戻ってしまう上、なぜか羽根まで生える。

真眼は世界間に流れている『情報』を見ることが出来、さらに書き換える事が出来る。それが『情報操作能力』。

真眼は発動すると十字架に3対の羽根が生えたような模様が瞳に浮かび上がり、青色になる。

他の瞳力と同時に発動させることが可能で、発動させる瞳力の数と組み合わせで色が変化する。

無効化は源創力を持っているため自然とついた能力であり、常時発動している。

幻術、車輪眼、白眼、魔眼、術はおろか、物理的な攻撃、呪印術等全ての攻撃が効かない体になっている。

管理者のヴェリオルの力が阻害されたのもこの力が原因。

不老不死も源創力が原因。体が分子レベルでバラバラになっても死なない。毒も効かない。

『身体自在操作能力』は、文字通り自分の体を自由に作りかえることが出来る能力。

自分の体を遺伝子レベルで作るかえ、『設定』を行えばその通りの人格になることが出来る。年齢、性別、容姿も自由自在。

人間のみならず動物、昆虫、植物にもなれる。

最強の者（前書き）

ヴェリオル君の1コマです。

前よりはだいぶましな小説になった…と
思いたい……。

誤字脱字ありましたらすみません（T|T）

ご意見、ご感想お待ちしておりますm（| |）m

H 2 3 ・ 1 0 ・ 2 6 : 「最強の者」の文の順番を修正。

H 2 3 ・ 1 1 ・ 2 7 : 所々手入れ

H 2 3 ・ 1 2 ・ 1 : 要らない説明をバツサリ削除

最強の者

何人かが忙しなく通り過ぎる中。一際異彩を放つ青年が一人、無表情に座っていた。

周りの者は遠巻きにチラチラ見たり何人かが小声で会話したりするだけで誰一人として彼に近づこうとする者は居ない。

不意に彼の目の前の空間が歪み、中から少し幼い顔立ちの青年が欠伸をしながら出て来た。

毛先が緑色をした燃えるような赤い短髪。白い布地に金色のラインの入ったローブを着た青年は目の前の青年を見るとエメラルドグリーンの瞳を見開く。

「楽しそうだね？　何か良いことでもあった？？」

「………………。まあ、少しな。」

たった一言。

話しかけられた側は一瞬そいつを見たが、すぐ興味を無くしたのかぶっきらぼうにそう答え、以前と全く変わり映えのしない“仕事”の書類へ視線を戻す。

「へえ〜。驚いたな。あの『白い闇』なんて呼ばれてるヴェリオルがこんなに素直だなんて……………」。

てかここで大人しくそれ見てる時点で珍しいんだけど……………。どこかで頭打った？ てか何か食べた？？

いや、むしろ一回死んで生き返った？？？

それとも背中じゃツク隠してた？？？

「うるさい。黙れルオル。」

目の前の青年…………… ヴェリオルがイライラとした空気を纏い始めたが、そんな事には全く構わず目の前に座り指を振る。

同時に二人の周りに三重の結界が張られた。

「で？ 結局何があったんだ？ とつと吐いちゃいなよ。ちなみに、僕の勘は女だって言ってるよ？」

コイツはエスパーか……………。まだ会ってすぐだというのに、相変わらず鋭い勘に思わず顔をしかめる。

ジロリと睨むが、目の前の顔は明らかに楽しんでいることを隠そうともせずに笑っている。

“何でもお見通し”と言わんばかりのその笑顔に殺意が湧いてきた。

「……………教えん。」

「ええ〜？ 何でさあ〜？」

どこかスねたように言う青年……………ルオルを無視してまた書類に視線を戻す。

「……………ヴェルが作った平行世界で何かあったんだろ？」

ピクリと眉が動いた。

「やっぱね。ホント、分かりやすいなお前。」

ギロリと睨む視線に怯むどころか軽く笑ってやる。

「しかもヴェルが飽きてないってことは……………『それ』は君には堕
ちなかったみたいだね？」

「何もしなくても女は全部堕ちてたのにな？」

“信じられない”という表情を浮かべ目の前の造りの良い顔を観察していたが、何を思ったのかハッと目を見開いた。

「もしかして女じゃなくて男!?? 君が“そっち系”だったなんて……………」

「分かってるくせに気持ち悪いこと言うな。殺すぞ。」……………いや、だって君に堕ちない女なんて前代未聞だし?? もし君が“そっち系”だったら僕は君の友達から降りなきゃいけないし???

「……………」

「あははは! 冗談だよ冗談!! そんな睨むなって。」

「気が散る。どっか行け。失せる。」

「ええ〜! ひどいなあ〜! 僕まだ一つも教えてもらってないよ?? 親友なのに〜。」

子犬のような目で上目使いに甘えるように催促してくる。分かっ
てやっているところが憎らしい。

……………目の前の人物にはもちろん効果はないが、これの犠牲になっ
た女性は数知れない。

「“アレ”は俺のだ。お前に教える必要はない。教える義理もない。」

ヴェリオルの言葉にルオルは唾然とした。

「君が誰かを庇うなんて……。よっぽど気に入ったんだね？
もしかして惚れちゃった？」

「バカいえ。だれがあんなチビ石頭……。」

「へ〜……。ヴェルってロリコンだったんだ??」

ニヤニヤと笑う顔を苦々しく睨んだが、相手はどこ吹く風で話を切り替えてきた。

「ところでさ、俺のほうでも最近、妙なことがあったんだよね。」

「……………妙？」

「それが俺が調べてもはっきりしなくてさ……………聞きたい？」

ルオルは戦闘力はヴェリオルに一步及ばないものの、情報収集においてはその実力は上だ。

その彼が「分からない」という。
今までこんなことは一度もなかった。
異常事態と言ってもいい。

「聞きたいよね?？」

「……………」

結局こちらが根負けしてあったこと全てを教えることにした。
口で言うのは面倒なので、直接過去の映像を送ってやる。

「アハハハハハハハハハハ！！！！　ヴェルが女につっ間違えてっつっ
！！！！　ククククッ！！！！」

「五月蠅い！！！！　死ね！！」

「ぷっ！　クククク！！　そんな怒ったらっつダメだよっ！
つか顔真っ赤になってるよ！　『ベルベル』　ププー
――！！」

笑い転げているところに閃光を飛ばすがアツサリかわされる。

「ハイハイ！　もうそんな怒ったら『チカチカ』しちゃうよ？？」

「意味が分からんセリフを真似するな！！」

「ええ？　ヴェル、分かってなかったの？　多分、『チカチカ』って、ヴェルの髪の色が変わるからだよ。」

「……………」

「ま！　ちゃんと教えてもらったことだし……………次は僕の番だね！」

「……………大したことなくたら殺す。」

不機嫌なのか殺気が垂れ流しになっている。

「まあまあ……………。でも、あの子と同じくらい興味深い話だと思っ
「っよ」

「いいから話せ。」

「もう！　自分だって渋ったくせに……！」といいつつも真面目な表情になった。

「実はさ、『ZE・sppQ』が消去されたんだ。それは知ってるよね？」

「ああ。」

『ZE・sppQ』とは彼ら管理者が一つ一つの世界に付けたコードネーム。

“消去”とは『ZE・sppQ』という世界が“消された”ことを意味する。

「あの世界は特にこれといって目立つものはなかったから、他の奴らは気にもしてなかったけど……。どう見ても人為的な物なんだよね。」

「管理者か神がやったんじゃないのか？」

「そうかと思つて調べてもみたんだけど……。俺の情報網にも引つかからないんだよね。ね？　面白そうでしょ。」

「……………変な話だが……。それが本当なら、そいつはただ者ではないな……………」

「君ほどじゃないと思つけどね??」

バラバラにされた二つの星は

一つは不規則な起動を描き出し

一つは決められた起動の上を動かされる

2つの対極をなす星は互いを知らない

ほんの小さな“変化”はやがて大きな“変化”となる

「ね！ 俺も会ってもいい！？ てかすごく気が合いそうなんだよね！ 『アレ』！ 桃子だっけ？あ！ 今はサクラだっけ？」

「来るな。余計づるさくなる。」

「そんな独り占めしないでよ！！ ね？ 『ベルベル』ちゃん

」

「……………死ね」

「ちよっつ！ 今の本気だったたる！？ オイ！！！」

「……………。」

「うわっつ！ マジよせて！！ 結界が！！ わかった！ 呼び名はちゃんと『ベルちゃん』にするから！！！！！」

「……………逃げ」

「ちよっっ！」

「それ字が違っっっ！！！」

最強の者（後書き）

ここだけの話。

ヴェル君は最初純粹で甘えん坊なかわいい男の子キャラでした。

いつの間にかこんな鬼畜野郎に……………！

友達も腹黒鬼畜っぽいですね（T|T）

この二人は敵にまわしたくないな……………（汗）

白（前書き）

応援メッセージを頂いた皆様、アドバイスをしてくださった皆様本当にありがとうございますm（　　）m。

色々失敗してしまったりかなり時間が経ってしまいましたが前よりは腕が上がった……………と……………信じたい……………。

まだ駄文かもしれませんが、時間つぶし程度にでも読んで頂けたら幸いです。

ではどうぞ。

白

「やいあいあううやああ!!! (降ろせええええ!!!)」

青みがかった銀色の星空には絶えず流れ星のような光線が走り、様々な幾何学的な模様が一つ一つ異なる色の淡い光を放ちながら中に浮かんでいる。

そんな不可思議な空間で響く幼い子ども声。

本人は必死に何かを訴えているだろうが赤ん坊なのでダダをこねているようにしか見えない。

必死に手足を動かす赤ん坊をあやすように膝の上に乗せている超絶美形な男………ヴェリオルはそんなことなど全く意に介さず、涼しい顔でスプーンに乗せたピンク色のお粥を赤ん坊の口に持っていく。

「分身は補給が必要と言ったではないか。つべこべ言わず食べ。」

「あおうあいあいんえ!! (だからその辺は自分でやるって!!)」

「何と言ってるのか分からないな……。」

「ういあああー!! (嘘つけええええー!!)」

「いらぬなら捨てるぞ」という言葉に赤ん坊……サクラは慌ててスプーンを口に含む。
彼女の前世は農家の娘。食べ物を粗末になど出来ない。

「ああ……。可愛いわああ」

そんな二人を見守る精霊……ラティシアはどこから取り出したのだろう。

この空間には無かったハズのオシャレな白い丸テーブルと椅子を出して優雅にティータイムをしている。

「……………」

もう一人の精霊……クロードは侍のように刀を立てて座禅を組んでいる。

サクラの修行の時以外ほとんどしゃべることのない彼はやはり会話に入ることなく無表情、無言を貫いている。

彼はもともと洋風な格好をしていたのだが、サクラが「クロードって何だかお侍さんみたいだね。」と言ったのがきっかけで自分で服と刀を用意し身に付けるようになった。

今ではサクラの修行の合間に侍のいる世界の奥義やらなにやらの修

行をしているところを見るとかなり気に入っているらしい。

サクラは今1才にも満たない幼児であり、ここに居るのは彼女の『影分身』である。

《影分身の術》は彼女の出身地……NARUTOの世界の術で、実体のある“自分”を作り、さらに分身体の経験値を手に入れることが出来る優れたものだ。

普通なら影分身を出していられる時間は限られているのだが、彼女の影分身は外からエネルギーを吸収する……つまり何か食べさせたり回復させたりすることで存在し続けることが可能なのだ。

なので定期的に分身を入れ替えて修行し、本体は彼女の生まれた世界で赤ちゃんライフを送っている。

これは彼女の希望でもあり、彼女の肉体と精神の繋がりを深くするためでもある。

彼女の体はただの人間の肉体。まだ精神との繋がりが薄いため母体や世界に何の影響もなく生まれることが出来たのだ。ヴェリオルが彼女の精神だけを簡単に呼び寄せられたのもそのためである。

彼女は今神術と魔術の修行はしているが忍術の修行はしていない。体を動かすことはままならないので体術にももちろん手を付けていない。

「その辺りは今からアッチで習うし、いいよ。つーかこの2つで十

分。「というのが彼女の意見だ。

「あうういやムグムグ……………」

また何か言いかけて口を開けたところにすかさずスプーンを押し込む……………という動作を繰り返すうちにサクラは色々諦めがついたのが大人しくなった。

（まあ、そろそろ飽きるよね??）

修行を始めてからひと月。彼はよほど暇なのか毎日ご飯の時間にやってくる。来てはご飯を食べさせている。

だがさすがにそろそろ飽きる頃だろう。もうしばらくの辛抱……………そう自分に言い聞かせるサクラだったが、独り立ち出来るまで同じ場面が繰り返されることになるうとはこの時知る由もなかった。

黒(前書き)

続けてどうぞ。

黒

自分が一体どこにいるのか、自分が体のどこを動かしているのかさえ解らなくなりそうな全く光のない空間。

そこに一人の男とも女とも判断のつかない者が一人静かに佇んでいた。鮮やかなピンク色の髪も体も赤く染まっているのだが今はそれも暗闇に溶けて見えない。

深い闇はその者の足元に広がる生暖かい血の海、そしてその中に浮かぶ何千もの肉片らしき“物”やまだ人の原型を留めている“物”全てを覆い隠していた。

「2千でひと月か……。まあ『私』だもんね。そんならいはかかるか……。」

次は平行して忍術の開発。それとアイテムかな……。魔力と源創力を混ぜたらどうなるのかも調べないと……。」

ブツブツと呟く者の正体は春野サクラ……の影分身。

今は『身体操作能力』で適当に大人になっている。

ヴェリオル達と修行を始めた日に原作のNARUTOの世界の術や体術を全てコピーした後、この空間に入り自分の影分身だけでそれらを自分の物にするため修行を積んだ。

そして2千体の影分身で最後の一人になるまでバトルロワイヤルをしたのだが、1ヶ月もかかった。

時間軸は現世と同じにしてあるため現世でもひと月が経過している。

「データは取れたし、後は本体で対応を考えればいいか。」

サクラは辺りを見渡し、スツと目を細めた。

「それにしても、源創力を少し練り込むだけで分身の死体が残るとはね〜。この調子じゃ、もう少し練り込めば半不死身になりそうだな〜。完全に不死身ってのは無理だけど………やっぱ“書き換え”しておいて正解だったわ。」

ヴェリオルはサクラが見せた“目”のことは覚えていない。

いや、“知らない”と言うほうが妥当だ。

何故ならサクラが情報を書き換えたからだ。彼女の能力『情報操作』

それは情報をいじった跡を残すことなく書き換えた情報が『事実』となる。

そのため、神や管理者のような絶対的な存在もそれに気づくことなく『事実』として受け入れてしまう。

だがそれほどの影響力を持つ力は同時に危険な物でもある。

今回彼女が書き換えた部分は『定着』が少なく、また書き換えても他に支障を来さない物であったため何か犠牲になることはなかったが、下手をすれば一つの世界が消えかねない。さらにバランスが崩れれば連鎖反応が起きて複数の世界まで巻き込んでしまう可能性だってある。

『情報』とはそれだけ複雑に絡み合い、全ての世界において……
いや、神や管理者にとっても最も重要と言っているいい物なのだ。

サクラは手の平を前に出すと、目の前の光景を消すかのようにスツと宙を滑らせた。
すると青い炎が広がる。

そのまま血の海を燃やす炎をしばらく眺めていたが、フツと微笑むと、燃え上がる炎に向かって歩き出しそのまま炎の中へと消えていった。

まるでそれに応えるかのように青い炎は勢いを増し、空間の中の全てを飲み込んだ。

十十十十十

夜。両親が寝静まった家でサクラはカツと目を開いた。

普通影分身は“経験値”と“精神的疲労”のみが術者に返ってくる。

が、サクラの影分身は分身の受けた“痛み”まで自分が体験したも
のとして返ってくる。

……つまり……

「……………」

…………… 2千回の“死”を味わうことになる。

彼女は精神と肉体を一体化させるため現世で本体で過ごしている。
彼女の“力”は精神に宿っているため、精神に影響され肉体がそれ
相応の“器”に“作り替えられる”。
DNAから作り替えてられるという状況になるのだが、自分の意志
は関与しないため全身が引き裂かれるような痛みに襲われる。

四六時中付きまとうその痛みを両親をはじめ誰にも悟られないよう
彼女はキチンと対策しているためそれを知るのは本人だけだ。
補足だが影分身は本体ではないので痛みに見舞われることはない。

痛みを耐えて2カ月。だが、そんな彼女でも今回はかなりキツそう
だ。

シーツを握りしめ体中から冷や汗を流し、意識を保とうと歯を食い
しばっている。

しばらくそうしていたがようやく収まったのがグツタリと力を抜いた。

(うはっ。キッツ！ ドンマイ自分。人生これからこれから！)

我慢出来そうにない事があると心の中で自分を軽い口調で励ますのは彼女の前世からの癖だ。

(うーん……。つまり源創力を混ぜればもう『一人の人間』になっちゃうと。……………じゃあ“アレ”は2人でいつか？

空間は時間軸を2段階上にしようかな。

アイテムは……………まずはあるのを作ってみるかな。

次は1対5の組を何個か作って修行するか。後は……………)

膨大な量のデータを元に素早く分析、検討、そして予定を立てていく。

その間わずか1秒。

(……………終わったな。…寝たいな。)

この2カ月間痛みのでいで全く寝れていない。それより前は自我が目覚めていなかったため、生まれてこの方寝て

ない気分だ。

目を閉じ力を抜くと体は自然と規則正しい呼吸を始める。

（ああ……早く思いつきり寝れるようになりたいなあ。寝れるようになっただら今まで寝れなかった分限界まで寝てやるっ！！）

端からみればスヤスヤ眠っているようにしか見えないが本人は冴えた頭でいつも通り心の中で時間つぶしをしながら朝を待った。

黒（後書き）

少し説明不足な所もあるかな……と思ったのですが、書きすぎたらクドくなるので後は読者の皆様の想像力にお任せしたほうが楽しんでいただけるかと思い、こんな感じにしてみました。

説明はこれからちよくちよく入れていくつもりです。

侵入者【其の巻】（前書き）

とある一夜の話です。

駄文かと思いますが読んで下さったら嬉しいです。

ではではどうぞ。

間違いがあったらすみません（ノ T）。
遠慮なくメッセ下さい m（|（ m。

ストーリーについては……………作者の妄想ですので……………（汗）

侵入者【其の壱】

夜。少し欠けた月が照らし出す森の中を、風のように素早く移動する一つの影があった。

木々の間を縫うように進んでいたが、目的の場所に着いたのかスタツと木の枝に飛び乗るとゆっくりと立ち上がる。

木の枝が全く揺れないその身のこなしから、かなりの手足れの忍であることが伺える。

そしてしばらく目を閉じ辺りの気配を探る。

「……………さて、と…。ダルいけどもう一度確認しとくか……………」

こちらの動きが察知されていないと判断したのか、めんどくさそうにそうつぶやく様は緊張感がまるでないが、安全と判断した今でも適度に体の力を抜いており隙がない。

そして懐から数枚の紙を取り出しパラパラと捲り、月明かりでそれに目を通す。

紙には火影邸の見取り図と暗部の見張りの位置、巡回路が彼だけに分かるように模式的に書かれている。

どうやら今回は潜入系の任務らしい。単独で行動しているのも頷ける。

『木の葉隠れの里』は忍界の中でも最強と言える軍事力を誇り、他

の里に比べて治安も安定している。

一方で木の葉に対して異を唱え里を捨てる『抜け忍』も多数存在するため、里の機密情報も漏れてしまっている部分が多々あるのが現状だ。

だがそれを考慮しても、ここまでの情報を集めるにはそれなりの経験と実力が要求される。

それをこの人物は3日という短期間で一人でこなしたのだから驚きだ。

暗部が巡回しているとはいえ余程のことがない限り彼の妨げにはならないだろう。

「そろそろか。んじゃ、行くとしますかね……………」

彼の姿が闇へ消えた後。

彼が立っていた木の枝に何の前触れもなく一人の男が現れた。

黒く長い衣を羽織ってフードを被り、有るべき穴が一つも空いていないのっぺりとした黒い面を付け、ご丁寧に黒い手袋までしている。

見る者によっては悪寒さえ感じさせる全身黒づくめのその男は、まるで始めからそこに居たかのように木に背中を預け腰掛けている。

……が、何故か小さな茶色の袋のような物を、壊れものでも扱つかのよう両手で大事そうに抱えているせいか、“不気味”な男が“不可解”なそれとなっている。

「まさかアイツが出てくるとはなあ〜。

ま〜、アレが盗られても木の葉なら大丈夫やろうけど……。そろそろ『挨拶』程度はしときたいしなあ〜。」

のんびりとした口調からは全くやる気が感じられない。

先ほどの忍とは対照的に辺りを全く警戒していないのか、両手が塞がっているとはいえ「攻撃して下さい」と言わんばかりにスキだらけだ。

「ってなワケで〜。運が悪かったと思って邪魔されてもらうで？」

男の声がどこか楽しそうに響いたがその姿は既にどこにも無かった。

十
十
十
十
十

火影邸。とある一室の天井裏で動物を模した面とくすんだ灰色の暗

部の装束を身に付けた一人の忍が息を潜めていた。

刹那。

忍の隣に一つの影が現れた。

同時に一瞬ビクリと身を強ばらせると、すぐに糸が切れたようにゲラリと体を傾ける。

影はそれを受け止め、そつと忍の体を仰向けに寝かせるとその仮面と装束を取り素早く着替えた。

“死体”となった忍の喉にはクナイが深々と突き刺さっている。この部屋にはあと二人控えていたのだが、既に“物”と化していた。

スツと部屋に降りた影はその部屋にある棚に近づく。棚には大小様々な巻物や何かの記録らしき紙の束、表紙が所々剥がれた古い書物が整然と並べられている。

その中の一つの巻物を手に取った。

その巻物は通常の巻物と同じサイズだが、中身は重要な物なのだろう。

結界式の呪印が施された布が巻いてあり簡単には見ることが出来ないようになっている。

「…これだな。」

棚には偽物フェイクも混ざっていたがアツサリと本物を探し当てた。

長居は無用。素早くその場を後にしようと《瞬身の術》の印を結ぶ。

……はずだった。

「！！！！！」(……………体が……………動かない！？)

体の自由が効かない。

まるで《金縛りの術》にでもかかったかのようだ。動きを封じる罫はある。が……………これは人為的な物だ。

「まさか見つかったまうとはな……………。感知系じゃないが気配を感じるのはそれなりに自信があったんだがな……………。術にはめられるまで気づかねーとは……………。情けねー。」

背後にいるであろう敵に対して自嘲の笑みを浮かべながら話しかける。

だがその人物は予想に反して自分の“目の前”に現れた。

「よお！！ 初めましてやなあ〜！！ とりあえずこんばんは

〜！ってか？

いやあ〜こんなトコでダルイの兄ちゃんに会えるとはなあ〜！
それはそうとバラすの早くね??

せっかくこういう時のために暗部の格好したんやから、捕まっても
とりあえずは何かそれっぽいこと言っつて隙を付いて逃げるのがフツ
ーちゃう???

「もったいないやろー！」と現れた途端茶色の袋を抱えたまま、動
けない自分の肩をポンポンたたいてマシンガントークを繰り出す全
身黒づくめの男。

いきなりすることに驚きながらも冷静さを保ち、新たな対応策を練っ
ている彼……………ダルイはさすが雲隠れ屈指の忍と言える。

「そりゃあ…あんなタイミングで捕まったら俺の行動を見てたって
ことくらい分かるだろ、フツー。
しかもこんなアツサリ捕まっちゃったんだ。アンタのが強いっての
ははっきりにしてんだろ。」

「え〜。わいがダルイの兄ちゃんなんかとやり合ったら秒殺され
るで??? その辺の三人みたいに〜。」

「……………で? いつから見てたんだ?」

男が“よくしゃべる”と踏んで適度に間を置きながら“会話”する
ダルイ。

この術は通常の《金縛りの術》ではない。……………それに、木の葉にある《影縛りの術》とも違う。

《金縛りの術》なら体の筋肉が引きつった感覚がある。

《影縛りの術》は光が一切ないこの暗い部屋では物理的に発動出来ない術だったはず。

正体不明の術にハマってしまった今、少しでも時間を稼いで目の前の男の気を逸らし、この術から逃れるチャンスを見つけるより他に手立てはない。

それに少し引つかかることもある。

ここは火影邸。他にも忍がいるし、何より火影がいる。

この男が現れてから1分も経っていないが、そろそろ駆けつけて来てもいい頃だ。だが、一向に来る気配はなく外は静まり返っている。

この男の他にここに誰かが潜んでいるのか……………それともただ呼んでいないだけか……………後者ならば自分を逃がさない自信があるのか、はたまた他に理由があるのか……………。

「いつからって言われるとなあ……………。ん……………兄ちゃんが今日森の中通ってる時から??」

首を傾げて軽く答える男を見て、ダルイの中に一つの確信が生まれた。

「やっぱな。色々と気にはなるが……………それよりお前……………」

木の葉の忍じゃねーだろ？　違つか？」

ダルイの言葉に対し「オー！！　スゲーなダルイの兄ちゃん！！」
と賞賛の声を上げ、袋を抱えたままパチパチと小さく拍手した。

「お前も“コレ”狙いつてわけか??」

チラリと手に持った巻物に視線を落とすダルイ。

「いんや。ただのとーりすがり。」

「……………木の葉に雇われたのか？」

「いんや。木の葉に入ったのは今日が始めてや。」

「……………つまり俺は『とーりすがり』の奴の『気まぐれ』で捕まっ
た上に自殺も出来ない状況になった……………ってことか？」

「そゆこと」

ハア〜……………と深いため息を吐く。

任務の際に捕まった場合、情報を搾り取られるのを防ぐためそのよ
うな状況に陥る前に自殺するのは忍にとって当たり前。

だが今『しゃべる』以外の行動は全て制限されてしまうことが分か
った。

先ほど舌を噛み切ろうとしたが出来なかったのだ。

「兄ちゃん、若いのにそない“この世の終わり”みたくデカいため
息ついたら幸せが逃げるで??」

……………誰のせいだ…。

そう言い返したい気持ちも湧いたが、そんなことより自分の失態が
情けなくてその気も失せる。

チツと舌打ちして歯を食いしばる。

(すみません……………ボス……………)。

任務を言い渡した時の雷影の自分を信じて疑わない目が脳裏に浮か
ぶ。

マシな打開策も全く見つからないまま何も出来ない歯がゆさと悔し
さが募る一方で時間だけが過ぎていく。

そしてとうとう『その時』が来た。

「こんな夜更けにわしの家で何をしておる？」

扉が開かれ部屋に差し込む明るい光を背に、キセルをふかしながら『火』の文字が施された傘をかぶった老人が立っていた。

手には武器こそ握られていないが、その出で立ちには『強者』の醸し出す空気を纏い、鋭い光を放つ眼光は暗闇の中に佇む二人を捕らえて離さなかった。

侵入者【其の貳】

火影邸のとある一室。

天井から幾つかの風鈴が吊り下げられ、大人が両腕でやっと抱えられそうな程大きな巻物が整然と並べられた棚を背にして、一人の人物が大きな椅子に深く腰掛けていた。

『影』と書かれた机を前にしてキセルを吹かすこの人物こそが、『木の葉隠れの里』の長……………“歴代最強”と唄われる三代目火影、『猿飛ヒルゼン』である。

その顔に刻まれた深いシワはゆらゆらと揺れる光に影を落とし、彼が幾つもの修羅場をくぐり抜けてきたことを物語っている。口ウソクに照らし出されるその表情は何か困難な問題と直面しているのだろうか。固く、険しい。

しばらく目の前の書類を厳しい目で見つめていたが、キセルから口を離すとゆっくりと白い煙りを吐き出した。

「また雲との戦争になるやもしれん……………。はて……………どうしたものが……………」

その昔、『木の葉隠れの里』と『雲隠れの里』は血で血を洗うような激しい闘いを繰り広げていた。

双方は多くの犠牲を強いられ、一度は条約を結んでそれに終止符が打たれようとしたこともあったがクーデターにより失敗。さらにそ

の時流れた情報により、両者の間に亀裂が走った。

その頃の世界は戦乱の世。あちこちに争いの火種がくすぶっていたため、その情報の真偽を確かめられなかったことが拍車をかけ、両者の関係は悪化の一途をたどり、こじれにこじれて今に至る。

現在は互いに睨み合いのいわゆる『冷戦状態』。

だが少しでも“きっかけ”が生じれば、再び戦争となってしまうことが誰の目からも明らかである程、事態は緊迫した状況にあった。

理由もはっきりしている。

雲隠れは昔から里の戦力強化のために力を貪欲に求め、他里からも忍術や秘薬等を集めてきたのだが、最近になってその動きが活発になってきたのだ。

彼の手元にある書類は暗部からの報告書。そこにもここ3ヶ月間に十数件、他里から行方不明者や巻物が紛失する事件が相次いでおり、どれも雲隠れの手の者の仕業である可能性が高いことが記されていた。

(……………?)

物思いに耽っていたが、ふと何かを感じたのか顔を上げた。

目を細めて辺りの気配を探る。

そして“異常”に気づいた。

(静か過ぎる……………。)

虫の鳴き声も外の物音も全く聞こえない。まるで水を打ったかのような静けさに包まれていた。

外界から己のみ切り離されたような錯覚に陥る。

が、ゆっくりと立ち上がると自然な身のこなしで窓へ近付き、外を眺める。

空には透き通るような闇に、月が“ 2つ ” 並んでいた。

(ほう…………… 結界か…………… ? む…………… ! !)

錆びた鉄のような独特の濃い香りが鼻を掠めると同時に、静電気が走ったかのように辺りの空気がビリッと震えた。

匂いからして3人分…………… それもかなりの量の血が流れている。

考えられる理由は2つ。一つは大きな傷を負って大量の血が流れたため。もう一つは殺されてから時間がたっているため。

匂いの元が書物室であることから恐らく後者だろう。

何故なら書物室にはS級の禁術を封印した巻物がある。犯人も十中八九それが狙い。

ならば書物を汚すような真似はしないだろうし、何よりここは火影邸。

敵の懐に入るも同然であり隠密行動が大前提。

派手な動きはしまい。

血の匂いの他に、部屋にはこの里の者ではない匂いがうつある。

……が、動く気配は無い。

(どづいづいつもりが知らんが……そちらが“そのつもり”ならちやぶどぶい……。逃がしはせんー!!)

+++++

「……………で、今に至る……………」

「……………」

書物室から場所を移し、今は執務室で先の二人と対峙していた。殺気を込めた“気”で威圧しているにもかかわらず、一人の男がそんなセリフで重い沈黙を破る。

一人は木の葉の暗部の格好をしているがこの里の者ではない。手には禁術の封印された巻物が握られていることから、それがこの人物の今回の目的だったのだろう。

チャクラの質も量も目を見張るものがあり、醸し出す“気”からしてもなかなかの実力者と見ていい。あの部屋を見張っていた暗部のレベルではとうてい対処出来まい。

血の匂いからしてもこの人物が暗部を手に掛けたとみて間違いないだろう。

しかし、目の前に立つ黒服の男はそれ以上に危険な人物であると長年の勘は警鐘を鳴らしていた。

その立ち姿や“気”は一般人のそれとかわりない。

……が、肌という肌を黒い布で覆い隠し、漆を塗ったような光沢のある黒い面……というより“板”と言ったほうがいいような物を付けている。

邪魔にしかならないような代物をわざわざ身に付けている、ということはその能力あつてのことだろう。

それにこの男からはチャクラを全く感じない。

だが問題はそこではない。何より問題なのは、この男の目的が未だに掴めないでいることだ。

彼らを見つけた時から敵意どころか緊張感さえ全く感じられない。隣の忍の仲間、という可能性は否定出来ないが、もう一人の男はむしろこの黒服の男に敵意を向けている。芝居ということも考えられるがどうもしっくりこない。

(しかもあの袋の中身……………。)

「ちよっつ！ 今の場面はああ言わなあかんやろ！！?? お
決まりつてもんやろ！！??」

目の前では隣からの白い視線に気づいたのか、なにやら必死に弁解している。

…………… やはり仲間なのか？ ともかくにも……………

「さて、まずはその巻物をこちらへ渡してもらおう。」

そう切り出すと黒服の男はチラリと隣に目をやり、手袋をしたままの手でパチンと指を鳴らした。
すると隣の男の体が動き、巻物を差し出す。

(?! ツチイ！)

(ほう……やはり……な……)

ヒルゼンはスツと目を細め、黒服の男を睨んだ。

「やはりキサマか……。わしを“おびき寄せた”理由は何だ？」

あの不自然な血の匂いは結界と同じく人為的なものであることは明らか。つまり、自分をあの場所へ誘い出す為のもの。

この部屋へ来る間も、抵抗する素振りを見せるどころか素直に付いて来たことで感づいてはいたが、これではつきりした。

どうやらこの男には、何か特殊な能力があるらしい。

「さっすが火影さんやな……!! ずつと何も言わんから、氣づいてないんかあ思ってたわ……!! まあ、引つ張るのもなんやし、とりあえずサツサと本題に入らせてもらうで？ …………… 三代目火影、あんたと取引がしたい。」

そう言つてまた指を鳴らして暗部の格好をしていた忍に面とフードを取らせると、「あ！ こちら雲のダルの兄ちゃんね……！」と紹介しながら、自分も素顔を晒す。

暗部の格好をしていた忍は小麦色の肌に白い短髪で齡十六、七とい
ったところか。顔立ちもまだ『少年』と言ったほうがいいような幼
さが残っているが、その目は“忍”に相応しい強い意志が宿ってお
り、隣に立つ男を睨んでいる。

一方、睨まれている本人はというと、黒い短髪に黒目という以外こ
れと言って特徴は無いが、どこか楽しそうな空気を醸し出している。
いや、実際楽しんでいるのだろう。顔がニヤケている。

「……………取引だと……………？」

男の持つ袋に目をやり、探るような視線を送る。

「ああ、なんか勘違いされてるみたいやから一応言っとくけど、“
コレ”は始めからわいのやから取引とは関係ないで？
それはそうとサツサと話進めんか？ 　いつまでも腹の探り合いじ
ゃキリがないやろ？？」

「……………いいだろう。話せ。」

「最近、この寒い季節のせいで『森』がひどく“乾燥”して、いつ
『火事』になってもおかしくないやん？
わいもそれは困んねん。」

そこでや。わいがちよいと手エ貸すから、変わりに火影さんに一肌脱いで欲しいんよ。もちろん終わった後で。ど？ 悪い話やないやろ？」

話している時、視線が机の上の書類にいったことで男の考えていることが分かった。

「随分な話じゃのう……だが……」

「気持ちは分からんでもないけど、そう悠長なことも言つとられへんやろ？ “一肌”も大したことやない。……強制する気もないしな。」

「……………」

言葉を遮って言うなり、男が前へ一歩踏み出す。殺気を膨れ上がらせるも、男が再度指を鳴らすと体が意に反して動き出し、男の差し出す茶色の袋を受け取った。

「あんたがそれを持つてる限り俺はあんたを裏切ったりはせん。……いや、『出来ん』って言ったほうがエエんかな？」

「……………」

「……………で、どーする？　乗るか？　それとも……………乗らんか？」

男は嘘は言っていない。

何故木の葉の忍でもない者がそんなことをするのかは疑問だが……………
…今までの歴史、今回雲がよこした忍のレベルの高さ、そして今の
木の葉の状況……………。

男の言う通り……………全てを考慮して導き出される『答え』は悲惨なものだ。

男の提案は単純なものだが、この男が“木の葉の人間ではない”からこそ、かなりの効果が期待出来る。

……………男の実力にかかってはいるが、この男ならば若しくは

「…………………………わかった。今回はかりは乗るとしよう……………。」

ヒルゼンは絞り出すように呟くと筆を取った。

侵入者【其の参】

剣山のように不規則に地面から伸びる岩山。

その複雑な地形に合わせるように建物が並んでいる。

中でも空を突き抜けるようにそびえ立つひとときわ大きな岩山には、ソフトクリームを逆さまにしたような巨大な建物が食い込むように建てられている。

月明かりに照らし出されるその光景は荘厳な存在感を醸し出していた。

その最も大きな建物の一階に位置する一室。

部屋には『筋』と『肉』の文字が額縁で飾られており、サンドバツクが吊り下げられドデカいダンベルが数個転がっている。

一見筋トレ用の部屋に見えるがきちんと机と横長の椅子があり、威厳溢れる筋肉隆々の男がドツカリと座っていた。

「それで、ダルイからの連絡は？」

「はい。連絡では順調にいつているとのこと、今夜決行に移ると早ければ明後日には帰って来ると思われます。」

男の問い掛けに近くに控えていた忍がスラスラと要点を告げる。

「フン！ 当然だ！ オレが直々に選抜したんだからな。」

「雷影様。別件ですが、草隠れにやった『勁班』は返り討ちに遭い任務失敗。じきに帰って来ると思われますがどのように？ 他の者を向かわせますか？」

満足げに言う男……………雷影に対して報告を続ける。

「ハア……………またアイツらか……………。草隠れはもういい。大した物でもないしな……………。それより他のを急がせろ。」

「……………承知。三人はどのように？」

「休ませておけ。」

「はい。」

顔に似合わず疲れたように溜め息をつく雷影。
どうやらその三人にはよほど頭を痛めているらしい。

「失礼ですが雷影様。一言よろしいでしょうか？」

「……なんだ？」

「今回草隠れに送るのは何もわざわざ彼らを選ばなくても良かったのでは？　むしろ……」

「おまえの言いたいことも分かる。だがアイツの身内には恩がある。」

“きかん坊”と言われる彼が利害を無視してまで彼らを使ったところを見ると、何か深い思い入れがあるようだ。

部屋の空気が少し重くなった時………
何の前触れもなく二人の人物が姿を現した。

十十十十十

「」「！……！……？」「」「」

「どもー！」

雷影さんこんばんはー！

宅急便です

サインください」

何の前触れもなく現れた二人に対して瞬時に臨戦態勢をとる雷影と側近。

一瞬で景色が変わったことに驚くダルイ。

そして三人のリアクションに気づいていながらも場違いなセリフを言う黒い面の男。

「誰だキサマらは!? どこから入って来た!？」

「雷影様! 左はダルイです!」

「!!! 何だと!？」

「せーかい さっすがカライさん」

側近………カライは感知の能力を持っている。素早い判断力を見せたカライを称賛しながら黒い面の男は指を鳴らす。するとダルイが面を外した。

「すみません………ボス。」

「……………!?!」

雷影は誤るダルイをじっと見た。

「ダルイ。動けないのか？」

「はい……………。気を抜きました。チャクラも思うように練れませぬ……………。
コイツの思い通りにしか体が動かない術のようです……………。注意して下さい。」

「カライ。どうだ？」

「チャクラが全く感じられません。ダルイのチャクラも乱れは感じられません。…毒でも幻術でもない。」

「キサマ……………何者だ!?!」

殺気を膨れ上がらせながら雷影は男を射抜くように睨む。

「よくぞ聞いてくれた!!　ワイはしがない旅人『エックス通行人X』!」
「ただいま臨時宅急便中」

「ふざけるな!!」

我慢出来なくなってきたのか雷影の体を雷遁のチャクラが覆い、凄まじい音を放ちながら光り出す。

「雷影様……………」

「わかつとる!!」

いくら雲の里がしたたかで合理主義とはいえ、ダルイを失ってしまったのはイタい。

本人は「気を抜いた」と言ったが、仮にそうだとしても、あのダルイがそうそのうのことで捕まるような忍ではないことは雷影自身よく理解している。

それを目の前の男は、大して疲れた様子もなくやってのけているのだ。

自分たちもいつ捕まってしまうか知れない。

幸いなことに今相手からは敵意は感じられない。

様子を見て隙をつくのがベスト……………いや、それしか方法がないのだ。

「それで？ 何が目的なんだ？」

「いや、せやから言つたやん。『サイン下さい』って。」

「サインだと！？ 何にだ！！」

「コレ」

雷影の怒りにも動じることなくマイペースにのんびりとした動作で懐から書を取り出すが、次の瞬間纏う空気が一変した。

「コレにサインすればこのままダルイには手を出さずにダルイを解放してやる。しなかったら……分かるよな？」

「……………分かった。それを渡せ。」

「その前に一つアドバイスをしておいてやる。……………この空間は既にオレの物だ。」

カライ、それはチャクラの無駄使いだ。止めておけ。」

「！！！？？」

男を捕らえるため仲間に信号を送ろうとヤツキになっていたカライに告げる。

そしてゆっくりと雷影に近づいた。

ダルイとの距離が開いていく。

刹那。雷影の姿が消えた。

カライが鎖を放つ。

男の体に鎖が巻き付き動きを封じた瞬間、雷影の太い腕が凄まじい速さで男に迫る。

(終わったな……………)

雷影を敵に回して無事な奴なんて居るはずがない。

ましてや今の雷影は『マックス状態』。

ダルイは男の死を確信した。……………が

「何か勘違いしてないか……………？」

男の落ち着き払った静かな声が部屋に響いた。

男の体に巻き付いたはずの鎖は粉々に砕け床に散らばっており、男は微塵も体を揺らすことなく自分の2倍はありそうな雷影の拳を片手で受け止めていた。

「なに！？」

(ボスのアレを受け止めただと……………！！???)

「……………とつととサインしろ。俺は気が長いほうじゃない。面倒事はサッサと片付けたい。」

それとも……………今日限りで雲隠れの里を地図上から消されたいか?」

男の体から膨大な量のチャクラが漏れ出す。

「「！！！！????」」

「そ……………んな…。あり得ない…。こんな…。」

雷影はそのチャクラの重さで体の自由が効かなくなり、そんなチャクラの中で感知系のカライが立っていられるはずはなく、ヘタリと床に尻餅をつく。

「……まだ5分の1しか出してないのにもうソレとはな……………」

「チャクラを緩めた後もカライは立てないでいた。」

「書いてもらおう。」

「……………」

雷影は黙って男が差し出した書を受け取ると、書の内容に顔をしかめながらも素直にサインした。

「これでいいだろう。ダルイの術を解け!!」

「まいど おおきに」

雷影から書を受け取るとチャクラを完全に消し、また元のキャラに戻る男。

言われた通り同時にダルイの体も自由にしたのだがもう誰も襲おうとはしなかった。

「待て！」

用は済んだとばかりに踵を返す男を雷影が呼び止めた。

「あ?? 何?」

「何故わざわざダルイを人質にした!? さっきのように初めから脅せばいいものを……」

「そのほうが早いしメンドくないと思っただよ。」

「ならなぜ……」

「雷影のイーは強いって噂だからちょっと確かめたかっただけだ。」

“何故わざと攻撃されるような真似をしたのか……” そう聞こうとした雷影、イーの言葉を遮るように答えると、次の瞬間いまだ腰を抜かしているカライの目の前に現れた。「ヒィ!!」という細かい悲鳴はきつと聞き間違いではないだろう。

「コレ食っとけ。じきに良くなる。」

短く言うとカライの口に茶色の玉を押し込んだ。
カライの口にほろ苦い甘い味が広がる。

(……………チョコレート???)

カライはその名の通り辛いものが好きで甘いものは苦手なのだが、
今は体がそれを求めているのかすんなり受け入れていた。

「アンタは……………木の葉に行くのか？」

「ん？　当たり前やん。取りに行かなあかんもん。」

「ちげーよ！　つーかオマエ分かっててやってるだろ！？」

「…なにが??？」

いったいどちらの“顔”が本物なのか……………先ほどのが嘘だったか
のように本当に分かっていない空気を出す男。

「……………木の葉の仲間になんのかって聞いてんだ！　　ったくいち
いち言わせんなよだるいな。」

「ああ、そゆこと？　なるわけないやろ？　メンドクサイ。
ワイはどの下にも就かんし、“敵”にも“味方”にもならへん。」

その言葉を最後に男の姿は溶けるように消えた。

残された二人は男が消えた場所を見つめ、しばらくの間、なんとも
言えない空気に包まれていた。

侵入者【其の四】

場面は再度火影室。

ヒルゼンは暗部に死体の処理を命じた後、キセルを吹かしながら事後処理について思案していた。

結果がどうあれ、否が応でも里と里の間が動くことは避けられまい。火影に助言する立場である『ご意見番』にはその原因について説明が必要になつてくるだろう。

場合によつては木の葉の『闇』の存在である“あの人物”が動く可能性もある。

悩みの種は尽きないのだが……………。

(さて、吉と出るか凶と出るか……………。)

思案している途中思考がズレる。

任せたいものやはり不安があるようだ。

いくら切迫していたとはいえ、名前も身元もはっきりしない怪しい男に木の葉の命運に関わる大事を任せてしまったのだ。気にするなというほうが無理である。

一抹の不安を抱えながらも、自分の腕の中で短くなったロウソクの明かりに照らし出されている“ソレ”を見る。

男が預けていった茶色い小さな袋。

その布の中から小さな顔を覗かせ、スヤスヤと気持ちよさそうに眠

っている“中身”。

年は2、3才といったところか。

ちよつと広めのオデコが特徴的な桃色の髪の小さな女の子。

キュツと握られた小さな両手が愛らしい。

見ているとその姿が最近『木の葉の春一番』と里で噂された同じ年頃の少女と重なり、思わず頬が緩んでしまう。

その小さな手に指で優しく触れるとキュツと掴まれた。

（あいつの子か……………？ 確かに見かけから言えばいてもおかしくはないが……………。）

仮にそうだとしても、自分の子どもをこのような危険な場面に連れてくるだろうか？

いや、守りきる自信があったとしてもそんな親はいないだろう。

本人は自分を「旅人」だと言っていたが……………。

家が無く預けるところがなかった……………ということだろうか。それなら納得出来る。

自分に預けたのも子どもを無闇に傷つけないと知ってのことか……………。

いつ帰るかも聞きそびれた。

書を渡した途端、「ほな行こか」とダルイというらしい青年の肩に手を置いた瞬間消えるとは……………。

男の能力については皆目見当もつかないが、雲隠れまではかなり距

離がある。

(3日は戻って来ないと見ておいたほうがいいか……。おっと。いかんいかん。)

膝の上の温もりもあってかどうも気が散る。

今だ自分の指をしっかりと握る小さな手を見て少し苦笑する。

と、その時スツと空気から溶け出るようにあの男が現れた。

十十十十十

「たっだいま」

先ほどと同じようにのんびりと軽く言う。近くに暗部やらがいたらどうするつもりだったのだろうか。

「……………相変わらずだな。お前は……………」

「え!?! 何!?! 急に!?!」

「こちらの話だ。気にしなくていい。……………で、どうだった?」

「なんやゴツツう気になんな……………」。「と言いつつも差し出された書を受け取り、目を通す。

「ほう……………。間違いないが……………まさかあの雷影が人質がいたとはいえこの短時間にコレにサインするとはのう……………」。
「一体どんな手を使った?」

「うーん。色々あったけど誠意を込めて“オネガイ”したら素直に書いてくれたで?」

その声は相変わらず楽しそうだ。面の下の顔もニヒルに笑っているのだろう。

「……………ハア……………。オマエの場合ロクなことをしていそうにないのう……………」。

「ちょー!?! じーちゃんの中でわいはどんなキャラになってんねん!?!?」

「さて、本題に入ろうか……。」「え？　　ちよ！　　無視？？」
「そちらの“要求”とやらを聞こう。」

「クツ！！　　完全にスルーしやがったな……。……！！」と捨て台詞を吐きつつも面を外し改めて火影を見る。
こういう所はしっかりしたいらしい。

「わいとその子が木の葉にしばらくの期間滞在、及び出入りするこ
とを許可してもらいたい。」

「なんじゃ。そんなことか。構わん。好きにせい。」

「……………工???’?’」

予想外の展開だったのだろう。男はテキパキと滞在許可証を書き始めた火影をポカンと口を開けてしばし見つめていたが、ハツと意識を取り戻す。

「いやいや。ちょい待て。いくらなんでも即答すぎやろ!？」

「なんじゃ。いらんのか？」

「あ！ いや！ 欲しい！ 欲しいけどさ……！ いいのかそんなんで！？ もう少し質問するとか尋問するとか……！」

「なんじゃ？ やって欲しかったのか？ それは気づかんで悪かったのう……。今イビキを……」

「イエ、遠慮シマス。」

「……そうか？」

(なんだ、このやり取りは……！！ ここはシリアス展開になるはずだったのに……！！ 三代目ってそんなキャラだったのか……！？ つーかこんなアツサリ不審者を受け入れるなんて…… 大丈夫なのかよ木の葉……！！……？？？)

男が木の葉の将来に不安を感じ初めていると火影が口を開いた。

「して、名は？」

「雷影さんここでは『通行人X』って言ったからそれで……」「ダメじゃ」「……チツ。面白そうだったのに……。」

本当に残念そうに言ったが、途端に男の纏う空気がガラリと変わっ

た。

今までのチャラチャラした所が微塵も感じられない。

「その前に、一つ話がある。それを聞いた上で俺たちを受け入れるか決める。」

パンツと両手を合わせると、部屋の空気が変化した。

どうやらまた“隔離”されたらしい。

「ほう……………。それが“オマエ”か？」

「どちらも“俺”だ。……………単刀直入に言う。
オレの目的は……………とある人物の“抹殺”。そのために木の葉に止まる許可が欲しい。」

「……………ほう？」

火影の目が鋭くなる。

「……………オレもその子どももこの世の人間ではない。
オレたちは自らを『渡り人』と呼んでいる。『渡り人』は永遠に—

つの役目を負う。

それが“『迷い人』の抹殺”。

『渡り人』は『迷い人』を消すために生まれる。

……その子どもは渡り人ではないがな。」

「………にわかには信じ難い話じゃのう。つまり、この里に『迷い人』がいる………というのか？」

聞けば『迷い人』とは、“覚醒”すればそれまでの人格に関係なく骨の髄まで闇に染まり、世界に破滅をもたらす存在だという。

何故そんな存在があるのか、どういう人物が迷い人となるのかは語らなかつたが、

迷い人は覚醒するまでは一般人と変わりなく過ごしており、本人も自分がそのような存在だと知らずに生きるらしい。

そしてそれを“処理”して破滅を防ぐ存在が、目の前に立つ『渡り人』。

彼らは『迷い人』を殺すために生まれ、世界中を渡り歩いている存在なのだという。

「………そんな話を信じる……と？」

「その必要はない。これは人間には関係のない話だ。」

藪から棒で、普通なら信じる方がどうかしていると感じてしまうような話ではあるが、あいにく“実は嘘だった”と、男が先の軽いノリで暴露する、ということは無さそうだ。

「…………断ったところでおぬしにはさして問題にはなりそうにないのう…………。」

「…………。」

まさに八方塞がり。

その『迷い人』たる人物は木の葉の里の人間だ。

つまり男に許可を出してしまえば里の者を殺す許可を出したも同然だが、出さなかったら出さなかったで、それは言い換えれば危険人物を野放しにしたことにもなる。

それにこの男ならば許可などなくとも目的を達成出来るという確信が火影にはあった。

「…………許可を出したらおぬしは『迷い人』を殺すのか？」

「殺す。ただし覚醒していない間は人間だ。覚醒しない限り手出しはしない。」

「…………お前以外に『渡り人』はいるのか？」

「……………みたいだな。」

「……………木の葉の『迷い人』とやらは？」

「1人だ。」

「それは誰か……………聞いても無駄か。」

「……………よく分かったな。」

「伊達に長生きしとらんでの。」

淡々と答える男は雰囲気こそ変わったがその立ち姿は相変わらず一般人のソレだ。

だが、雷影と対峙して無傷で帰ったのだ。それも短時間に。既に雷影より強さは上なのかもしれない。

今の会話からもその『迷い人』を消すのは彼にとって造作もないことだと見ていいだろう。

ならばなぜ、わざわざ許可を求めるような回りくどい……………いや、むしろ不利になる可能性が高い行動をとっているのか？
男が幼い子どもを連れていることと関係あるのだろうか？

目を閉じ少し思考を巡らせると口からゆっくりと白い煙を吐く。

「なぜわざわざわしの前に現れた？」

それを聞くと男はスッと目を細めた。

「あんたと会って話がしたかった……。それだけだ。」

火影を見るその目に一瞬懐かしむような光が灯るがすぐに消える。

「ま！　って言っても別に今すぐじゃなくてええし。色々落ち着いてからゆっくり考えてーな。」

またもやガラリと元のキャラに戻る男に少々呆気にとられるが、次の瞬間左耳にチクリとした痛みを感じた。

触れてみるとどうやらピアスのようだ。

「それがあればわいといつでも連絡出来るから」

パチンと指を鳴らすと膝の上にはいた子供が男の腕の中に移り、いつ

の間にか部屋も元の空間に戻っていた。

「んじゃ！　少しは体休めなあかでー！　今度なんか持ってきたるわ〜！」

ヒラヒラと陽気に手を振る。

「！　待て！　まだ話は終わっとらんぞ〜！」

【用がある時は俺の顔を思い浮かべるか、頭の中で“夜光”と呼びかける。俺のことより、今はやるべきことに集中するべきだ。】

頭の中に直接声が響いた時には既に二人の姿は消えていた。

侵入者【其の五】

次の日の朝。

『7日後の12の月27日をもって雷及び火の国両国の同盟を結ぶ意をここに示す。』

と綴られた文が雲隠れの里から届いた。

文には雲隠れの里が木の葉が提案した同盟条約に全て同意すること、当日木の葉に使者を送る意等も記されていた。

(……………素直過ぎる……………)。

それが火影が文に抱いた印象だった。

火影の脳裏に昨日の男のニヤケ顔が浮かぶ。

(……………物は試しか……………。確か……………)。

【……………“夜光”じゃったか??】

半信半疑。火影は頭に浮かんだその特徴の無いニヤケ顔に向かって心の中で話しかけてみた。

……実際にやってみるとかなり滑稽に思える。

【……………あ??? 呼んだ???】

……………頭の中で男の声が響いた。

【ほう……………。本当じゃったか。】

【信じずにやったんかい!】

【……………少しな。似た術はあるにしろ実際にやるとなるこのう……………。】

どうやらこのピアスが媒体となり、作った本人……………つまり夜光を思い浮かべるだけで彼と脳内で会話出来るらしい。

この様子だと、おそらく距離や位置も関係ないのだろう。

【まあそんなことより聞きたいことがある。】

【あ???】

【お前は昨晚、具体的に雷影に何をした？】

【何って……。昨日も言っただやん。……ちょっと遊んで脅し……
……じゃなくて“オネガイ”したって。】

【……やはりそうか。あの雷影を脅すとは……。よく生きて帰れた
な？】

【逃げ足だけは早いもんで。で？　話はそれだけ??】

【いや。まだだ。“返事”だが、昨日考えて決めた。】

【早くね??　　後でええ言っただやん。】

【そう先延ばしにしたところで何の利害もないじゃろう。ならば早
いほうがいい。】

【ふうん。……で??】

【お前達を受け入れることにした。】

【……へえ？】

【ただし一つ条件がある。】

【……………？】

火影は雷影へ了承の意を示す文をしたためていた手を止め、キセルをふかす。

【夜光。わしの影の配下になれ。】

【……………へえ？ “守ってみせる”ってか？？】

しばしの沈黙の後、こちらの意図を遠まわしに言い当てた。

【おぬし……………妙なところで察しがよいのう。】

“守る”というのはもちろん男に殺される可能性のある里の人間の
ことだ。

火影は男の『監視』の意味も込め、雇い入れてしまうことで“枷”
とし、男に狙われる人物を守ろうと考えたのだ。

そしてこの男をマークしておく事で、『迷人』が誰であるかも検討がつく可能性が高くなる。

そうなれば、他にも存在するという『渡り人』からも守ることが出来る。

だが、それは同時に里にとっていつ爆発するかわからない“時限爆弾”を抱えることを選択した……………という事でもある。

【……………いいのか？ そんなことして。】

【構わん。木の葉の里の者は皆、わしの『家族』じゃ。わしは『家族』を信じておる。……………いざという時はわし自らが手を下す。】

揺るがぬ思い。

里の者達への深い愛情と信じる心。

強く優しいその眼差しはどこまでも暖かくまさに里の“父”と呼ぶに相応しい。

だが、その言葉の後相手の声が響くことなく、不自然な沈黙が降り

た。

【……………？ どうした？】

【いやな、オレを雇うなら、暗部が犠牲になって、なんやかんやでもう手が付けられんようになった場合だけにして欲しいなって思うてな。

あと単独行動。それとこのことは三代目火影だけの秘密ってことで出来るか？？】

こちらから声をかければ、そんな答えが返ってきた。

【……………フン。始めからそのつもりじゃわい。】

当たり前のことをわざわざ聞いて話をはぐらかしている……………。夜光の“嘘”に気づきながらも彼がそれに触れることはなかった。

【そうか？ ならオーケーや。ほな改めて……………これからよろしく頼むで？ じーちゃん】

【……………まったく……………ジジイと呼ばれる程老いてはおらんわ。暗部名も既に考えておいた。暗部として動く時は「コク」と名乗れ。】

夜光が全身黒の衣装に身を包み、距離など物ともせず場所を時を“刻む”ことなく瞬間的に移動出来ることから、『黒』と『刻』をかけて『コク』。

【りよーかい。】

火影は満足そうな微笑を浮かべて立ち上がると、忍を呼んで出来た文を渡し雲へ届けるよう命じた。

12月27日。長年対立してきた雲隠れの里との同盟条約が結ばれるとあって、木の葉隠れの里はお祭り騒ぎとなった。

だが同盟が結ばれたその日、両者に亀裂が入ることとなった。

その亀裂があるとある1人の忍の命と引き換えに修復され、今日まで雲との関係が保たれていると知るのはごく一部の者だけである。

侵入者【其の五】（後書き）

雷と木の葉が同盟を結ぼうとしたのは2代目の時。

クーデターがあつて結ばず、ヒナタが3才の時に同盟が結ばれたと原作にありました。

原作を読み漁った結果、この間雲との関係は思わしくないものと考え、この話を作りました。

カライさんはここだけのオリキャラですので詳しい説明は省かせて頂きました。

ここまで読んで頂き本当にありがとうございますm()m

次はサクラの一場面。

その次から原作入る予定です。

H23・11・8：侵入者2と5を修正

H23・11・19：侵入者1、2を修正。ダルイの年齢を少し若くしました。『ローブ』を『衣』にしました。禁術を封印した巻物にもリンクを付けました。

木の葉の春一番

「サクラ〜！朝よ〜！そろそろ起きなさい！」

「はあ〜い。」

母の呼ぶ声にムクリと起き上がるサクラ。

部屋の窓から差し込む暖かい朝の光に照らされ、肩より少し下まで伸びた鮮やかなピンク色の髪がキラキラと光る。

トントンとベッドから床へ降りると下へ降りた。

「ママ、おはよー！！！」

「おはようー！ほら、ちゃんと顔洗って着替えて来なさい。ご飯出てるからね。」

テーブルには目玉焼き2つにウインナー、お味噌汁、ブロッコリーにミニトマト、ヒジキに納豆、ご飯、さらに焼いたシシヤモが2匹並んでいて美味しそうに湯気を立てている。

サクラの好きな大粒の梅干もちゃんとあった。

サクラは顔を洗い、両親の買った紅色の可愛らしいTシャツに長ズボンを履くとトテトと小さな足取りで食卓へ駆けて行った。

この世界の人間は誰しもチャクラという物を持っている。
その量は人それぞれだが、ある一定の量を越すと肉体の身体能力が
格段に上がる。

この世界に存在する人間のうちのわずか1/7610000000
00がそれに該当するのだが、忍となれる者はその更に1/10に
も満たない。

だからこそこの世界での忍の存在は大きく、ほとんどの国が忍を雇
ったり里と契約を交わすなどして自国の軍勢力としているのだ。

彼らは肉体の成長も早い。チャクラが多いのも理由の一つだが彼ら
の血には長い争いの記憶が積み重なっている。それが長い年月を経
て進化を遂げ、今では戦争で子どもが活躍したという話が語り継が
れるまでになったのだ。

まあいくら成長が早いとはいえ、来月3才を迎える幼い子どもが大
人一人前の朝食を食べるなどということはない

「ママ！ご飯おかわり！！」

……………ハズなのだが朝食を半分以上ペロリと平らげ、笑顔で
空のお茶碗を差し出す。

母親もいつものことなのかニッコリ微笑んでご飯を山盛りにする。

残ったおかずも平らげるとお味噌汁もおかわりし、デザートにグレ
ープフルーツ丸々とヨーグルトを食べて牛乳をゴクゴク飲んで

やっとサクラの朝食が終わる。

そして母と一緒に食器を洗い、掃除・洗濯の手伝い。サクラの手際が良かったため終わるのもあっという間だ。

「ねえ！他にお手伝いある？」

「もうないわ。サクラはエラいわね。お母さん助かったわ。」

「エへへへ だってお掃除好きだもん！！ねえ！今日もお外遊びに行ってもいい？」

この年頃の忍の子どもなら外の公園で親のいない間一人で遊ぶのは珍しくはないのだが、母はそれを聞くと少し顔を引きつらせた。

「いいけど……。道に迷ったりしない？ちゃんと5時までには帰って来るって約束出来る？」

「うん！！」

「知らない人にはついて行っちゃダメよ！！？？いい？？遠くまで行っちゃダメだからね？？」

「うんー!!」

返事は元気なのだが頭には入っていないことは分かっていた。しかし待ちきれないとばかりにキラキラ輝く目を見ると「ダメ」とは言えなくなってしまう。

「はい。じゃあこれ。お弁当。気をつけてちゃんと帰ってくるのよ? ケガしちゃダメだからね?」

「わあーい!! ママのお弁当だあ~~~~!!」

注意などそっちのけでクルクルと飛び跳ねる。

「もう。しょうがない子ね。ホラ! ちゃんとカバンに入れて! あんまり走ったら中が崩れちゃうからね?」

いつものように弁当と水筒を入れたカバンをたすき掛けにし、しっかり持たせる。

「ママ! ありがとう! 行って来ます!!」

「行つてらっしゃい！気をつけるのよー！」

花びらが舞うように髪をフワリとなびかせて走り出す小さな背中に声をかける。

一度立ち止まって振り向き大きく手を降って元気に返事をする、風のように掛けて行つた。

「もう……。本当、しょうがない子ね……………」

少しため息をつき、困つたように笑つその瞳はどこまでも暖かい。

十十十十十

春野サクラは生まれた時から大人しい子だった。何かあれば軽く声を出して呼ぶ程度。

一度も泣いたことがない。

少し心配した時期もあったが、その愛らしい笑顔とすくすく育っていく元気な姿に不安は消えていった。

本当に手のかからない子どもで、父親共に少し寂しささえ感じるほどだった。

だが、ある日家族で外へ出掛けたのを境に、自分から「散歩に行きたい」と言うようになった。

初めは父や母を引っ張って行っていたが、それでは物足りなくなってきたのか、半年前に「一人で行きたい」と言い出した。

確かにもう一人で遊びに行っても大丈夫だろう。それにこの子ならそう危ないことはしないだろう。そう思い行かせたが、それが間違이었다と気付くのはその日の夕方だった。

「ただいまー！ー！」と元気よく帰って来たサクラが擦り傷やら切り傷やらを付けて帰って来たのだ。

「ちょっと！サクラ！どうしたのよその傷！」

一つ一つの傷は小さい物ばかりだが、数が多い。一体何をしたのか……。

「サクラ！どうしたんだ！誰かにやられたのか！どこのどいつだ！パパが……あなたは黙ってて。」「…ツグホオ！！！」

母の肘鉄を食らって惨めにも一発で鎮められる父。
春野家ではいつもの光景だ。

初めはサクラも心配してたまに慰めたりもしていたが、それをする
と、

？サクラに泣きながら抱きついて頬擦りしてまた母の制裁を受ける

？サクラに泣きながら抱きついて頬擦りして一緒に風呂に入ろうとして嫌がられ、メソメソし出して母の制裁を受ける

のどちらかにしかならないため、最近ではサクラも父をスルーするようになった。

「サクラ、今日は何して遊んだの？ママに話してくれる？」

「うん！ーあのね！あのね！ー」

……………部屋の隅でキノコを生やしている父を放って話を進める妻と娘。

勢い良く話出した内容はまだ2才だからか、途中何を言っているのかわからないが、とにかく里の中を走り回って『冒険』して来たようだ。

「そう……………じゃあ、一杯遊んだのね。」

「うん！それでね！それでね！これ！お菓子屋さんで作ったの！ー」

「まあ……………」

小さな手のひらには可愛くラッピングされたハート型のクッキーがあった。

「こっちがママに！こちらはパパにだよ！」

「おお！これパパにか！？」

「うん！」

「くぅぅ〜！！サクラーーー！サクラは将来いい嫁さんになれるぞ
おーーーーー！！！」

「え……えへへ……。」

「あなた……。いい加減それ止めないともう一発いくわよ？」

「それ……言う前に……言って……グッ……。」

歓喜のあまりグチャグチャな顔でサクラに抱きついた父は母により
撃退された。

(ハア……………それにしても……………こんなことされちゃあ、怒るに怒れないじゃない……………。)

娘の両手のひらより一回り大きいサイズのクッキーを困ったような顔で眺める母。

「ありがとう。じゃあ、晩ご飯の後に食べようかしらね。」

迷ったものの、つつい娘の頭を撫でてしまう。

(ホント……………私も甘いわね……………。)

サクラの嬉しそうな笑顔を見ながらそんなことを考えた母が、次の日、サクラに甘いのは自分達だけではなかったと知ることになるのはまた別の話だ。

十十十十十

「ただいま〜!〜!」

「お帰り。今日は何してきたの？」

手に救急箱を持って帰ってきたサクラを迎える。

「あのね！あのね！今日ね！おじいちゃんの机の下に潜ってお絵かきしたのー！」

巻物を出して嬉しそうに広げる。紙の上では三人の人物が幸せそうに笑っていた。

「こっちがママ！でね！こっちがパパ！これがおじいちゃん！！」

クレヨンだがかなり上手く書けている。

「お絵かき」で何故ケガが出来るのかはとても疑問だが、それよりもその絵に意識が向いた。

「ねえ、サクラ。おじいちゃんってこの人……よね？」

「うんー！」

「この人の机の下で……………お絵描き……………したの？」

「うん！…！」

(……………どう見ても火影様じゃない……………！！)

絵の下にはご丁寧に正式な三代目火影の印まである。

「このおじいちゃん、何か言ってた？？」

「またいつでもおいでって言ってくれたよ！！」

(ま……………まあ、火影様なものね……………)

今まで近所の八百屋や甘味屋、映画館や本屋……………とサクラが押しかけた所へお礼を言いに行っていたが、最近では道行く見知らぬ人から笑顔で話しかけられることの方が多くなって来た。もちろん話しかけてくるのはサクラが世話になった人達。

皆サクラには好感を抱いており、中には一人暮らしのお年寄りもいて逆にお礼を言われる始末。

病院で見かけたという噂もあったが、まさか火影様の所まで行くと

は……………。

元気がいいのも、里の人々に愛されるのも嬉しい限りではあるのだが……………。

（火影様の所にお礼に行かないと……………。
本当、このままで大丈夫なのかしらこの子……………。
ちよつと声かけられたらすぐ付いて行つちやいそつ……………。
いつの間にか里の外に……………なんてのも……………有り得るわ……………ね……………）

かと言って今更言うのも……………

母は気を揉みながらも娘の膝や肘にバンソウコウを貼った。

十十十十十

「ねー！サクラ。」

「ん？なあに？」

「なんで下界のサクラとこっちの影分身のサクラの性格が違うの？」

「うーんとね……。あつちは本体でしょ？本体の肉体は子供だから、寝てる時以外はどうしても思考回路が3/4子供になっちゃうみたいなんだよね。」

「で、こっちは影分身でしょ？影分身っていつでも結局は分身だから、コピーでしかない。」

「補給すれば消えないってだけで、肉体は本物じゃないからそういうことがないみたい。」

「……………おい……………」

「へ〜。じゃあ、もしかして分身の方が本体より強かったりするの？？」

「うん。本体の肉体と精神がまだ上手く釣り合っていないから、今はそういう状況なんだよねえ……………」

「へ……。……やっぱりサクラって面白いね?」

「……おい!?!?!?!」

一体いつの間に作ったのか。

サクラの修行空間に組まれた和風の茶会のセットの畳の上に座り、
マツタリしている奴らに向かって声を荒げる。

「やあ、ヴェル。いたんだ?」

「何故貴様がここに……!!?!」

「え?何故ってそりゃあ……。遊びに?ねー!サクラ」

「ねー」

「……………。」

無言でルオルの膝に抱かれていたサクラを引き剥がす。

「首根っこ掴まれるのは前世から生まれて初めてだな……………。あ、

若者の膝に乗るのも初めてだったか。」

「なんだよ。ヴェル。もしかして嫉妬??」

「あらあら……………。ヴェリオルも大変ね。」

何やら独り言を言うサクラ。ヴェリオルをからかうように言つるオ
ル。

のんびりと言いつつもどこか楽しんでいるラティシア。無言でクッ
キーを食して紅茶を飲むクロード。

どうでもいいが、和風な茶会の席のお茶受けとお茶がクッキーと紅
茶というのは如何なものだろうか。

「お前らな……………」

相変わらずマイペースな面々にヴェリオルは溜め息を付いた。

木の葉の春一番（後書き）

チャクラについてはナルトを読んで作者が勝手に解釈しました。

忍の人口について。作者が原作で出てきた数字を元に、この地球に置き換えて計算。

そしてNARUTOの世界は地球より規模が大きいと解釈。

それよりも世界の規模を大きくさせたかった作者が考えた値です。

………とかいいながら、原作のNARUTO以下の規模だったらどうしよう？（-_-;）

あ！因みに！7610000000000000の前半4つの数字『7・6・10』は『ナル・ト』………なんちゃって”（ノ<>）ノ

次は原作に入ります。

アドバイス等ありましたら、送って下さると嬉しいですm（）（）
m

忍者学校卒業試験【其の巻】（前書き）

アカデミーの卒業試験前日です。

H23・10月に1話、3話を大幅に修正を加えました。また、4、5話を割り込み投稿しました。

まだ読んでない方は、よろしければそちらもどうぞ。

忍者学校卒業試験【其の壱】

「明日は忍者学校の卒業試験だぞ！！お前は前回もその前も試験に落ちてる！！外でイタズラしてる場合じゃないだろ！バカヤロー！！！！」

今日も教室中に響く怒声。今日は3の月30日。アカデミー卒業試験の前日だ。

「はいはい。」

怒鳴られた本人は逃げ出さないよう縄で縛られているにもかかわらず、反省の色が全く見られない。

「今日の授業は《変化の術》の復習テストだあ！！全員並べー！！！！先生そっくりに化けること！！！！」

鼻の上の傷跡が特徴的なこのクラスの担任、『うみのイルカ』は、その生徒の態度が頭に来て授業が抜き打ちテストになった。

当然教室中がブーイングの嵐が巻き起こるがそんなことはお構いなし。

「……………次、うずまきナルト！」

抜き打ちテストの発端である問題児の生徒の名前を呼ぶ。

金髪頭に空を映したような青い瞳。いつも額にゴーグルをしている少年、『うずまきナルト』は2年連続で卒業試験に落ちているうえ、全ての教科において『万年ドベ』の称号を持つ“落ちこぼれ”。だが、同時にこの平行世界の元となった『NARUTO』という漫画のれっきとした主人公でもある。

(くそ！面白くねーな！……………よーしィ……………こーなったら…！)

何か思い付いたのかニヤリと笑うと印を結ぶ。

「《変化》！！」

練ったチャクラで周りに風が巻き起こり、その姿が煙りに覆われる。

「うっふっふん」

煙りが晴れたそこに立っていたのはイルカ……………ではなく妖艶な美女。長い金髪のツインテールを揺らし、見事なプロポーションの裸体を惜しげもなく晒してポーズを決めている。

イルカと目が合うとウインクをして投げキッスをプレゼントした。

イルカは見事な鼻血の曲線を描いて倒れた。

「この大バカものー！ー！勝手にくだらん術を作るなー！ー！
！！！」

ほどなくして回復するなりナルトに怒号を浴びせる。

余りの怒りに顔が大変なことになっているものの、鼻にティッシュを詰めているせいで迫力は満点だが怖さは0点だ。

更に叱ろうと息を吸い込もうとした時、不意に一人の生徒が近寄って来て下から顔を覗き込むように見上げると口を開いた。

「イルカ先生ってあんな人が好み??」

「え? いや、好みとかじゃなくてさっきのはだな……………。その……………」

本人はただの興味本位なのだろうが、純粹な目で改めて聞かれてしまつと何故か返答に困ってしまつ。

「ギャハハハ！先生困ってやんのー！ー！」

「ナルトもあんな人がタイプ？？」

「え！？違うってばよサクラちゃん！オレは……………その……………」

鮮やかなピンク色の長い髪を2つに結んだ少女の問いかけにどもる2人。

こうして並んでいると、まるで身内のように見えてくる。

「ナルトのやつ、自分で墓穴掘ってやがる。」

「ギャハハハ！ざまーねーな！！」

「フン……………」

「な……………ナルトくん……………」

上から順に『奈良シカマル』、『犬塚キバ』、『うちはサスケ』、
『日向ヒナタ』のセリフだ。

「ねえ、キバもあんなお姉さんが好き??」

「え!?オレ??オレは……………その……………」

次々と矛先を変え、その度に「どうなの?」と言わんばかりに深い緑色の目がジッと見つめる。

(……………あんなふうにされちゃあな……………。アイツ、アレが素だもんなあ……………。)

どもる三人を呆れたように眺めながら、シカマルは深い溜め息を吐いた。

「ちょっと！桜ラ！その辺にしときなさい！！テストが終わらないでしょ!!!」

見かねて声をかけた少女は桜ラの大的親友、『山中いの』。彼女は桜ラの姉的存在だ。

「はあ〜い。」

「イルカ先生……早くしてもらおう。何故ならテストとはサッサと終わらせたほうが後が楽だからだ。」

「ボリボリボリボリ……。」

12才の子供にしてはやけに堅苦しい物言いをするのは『油女シノ』。
。サクラの作った野菜入りのお菓子を食べ続けているポツチャリ系の少年は『秋道チョウジ』。

ナルトを除くこの8人はアカデミーに入学してからずっと同じクラスだった。
去年、ナルトがクラスに加わり、今では9人は一つの仲良しグループと認識されている。

「あ…ああ、そうだったな……。次、うちはサスケ！」

シノの言葉に我に帰り、やっと抜き打ちテストが再開された。

「きれ〜〜にするまで家に帰さんからな!!」

夕方。里にある歴代火影の顔岩に、昼間、自分がペンキで描いた落書きを雑巾でこするナルトに声をかける。

「いいよ。家に帰ったって誰もいねーんだから…。」

「…？サクラがいるだろ？お前、前に俺に自慢してたじゃないか。」

去年の春。今のクラスでナルトが自己紹介をした時、ラーメンの話ばかりだったため、サクラがそれについて質問をした。

結果、ナルトの食生活がほぼパンとラーメンの生活だということが発覚。

そして「うずまきナルト……君の食生活の管理は今日から私がやる……」。とサクラが黒いオーラを纏いながら言うてからは、ナルトの食事はほとんど毎日サクラが作るようになった。

ナルトはそれからというもの、イタズラはほとんどしなくなっていったのだが……。

「今日は……………用事が……………あるんだってさ……………」

そう言うとナルトはまた淡々と作業を続けたが、イルカにはその小さな体が余計小さく見えた。

「……………ナルト……………」

「今度はなにイ？」

「……………ま……………なんだ……………その……………。それ全部きれいにしたら今晚ラーメンおごってやる！」

「本当！？よ……………し……………！オレさ！オレさ！頑張っちゃおう！」

＋＋＋＋＋

「ナルト。」

「ん〜？」

隣で味噌ラーメンを旨そうにするナルトを見る。

「昼間あんなイタズラしたのは、サクラが居ないからか？」

「オレそんなガキじゃねーもん！！……た……確かにちっと寂しかったけどサ……。」

「じゃあ、何であんなことしたんだ？火影様達がどついう人たちが知ってるだろ？」

「あつたり前じゃん！」

「じゃ、何で……。」

「このオレはいずれ火影の名を継いで……。んでよ！先代のどの火影をも超えてやるんだ！！」

「でさ！でさ！！里の奴全員にオレの力を認めさせてやるんだ！！！」
火影の顔岩に落書きしたのは、「ドベ」「落ちこぼれ」と呼ばれ、
二回連続で落ちた卒業試験を明日に控えている少年にとっての一種
の“意志表示”でもあった。

「……………ところでさあ……………。先生、お願いあんだけどお……………。」
「おかわりか？」

「ん〜にや、木の葉の額宛てちつとやらして〜〜」
「……………あ〜、これか？ダメダメ！！これは学校を卒業して一人前と
認められた証だからな！お前は明日だ！！！」

「ケチーーーー！！！」
「あつ！ハハハ！だからゴークル外してたなあ！？」
「おかわり！！！」

「あっ！……！」

忍者学校卒業試験【其の壱】（後書き）

次は試験です。

主人公の容姿について。

イメージは『そらのおとしもの』のイカロスを元気にした感じ？です。

分からない人はググってみてください！

性格とか過去だとかはこれから出てくると思います。

忍者学校卒業試験【其の貳】

「……さて、みんなも知つての通り今日はアカデミー最後の日だ。同時に卒業試験の日でもある。」

教室内にイルカの声が響く。今日は卒業試験当日。

試験に落ちた者はもう一年忍者学校で過ごさなくてはならないため、アカデミー生にとってはそれなりにプレッシャーがかかる。

……とは言つても、卒業試験内容は今までに習った基本忍術。皆緊張することなくリラックスした雰囲気に含まれていた。

が、その中でソワソワして妙に落ち着きの無い生徒が2名いた。

2名とは、一人はうずまきナルト。

彼は今までのことがあるので緊張するのも仕方ない。

もう一人は春野サクラだ。

彼女は原作の頭脳明晰な『サクラ』と違い、全ての教科において成績は中の上。忍術もあまり得意な方ではない。

何よりサクラは実技の本番に弱かった。

「で……卒業試験は《分身の術》にする。呼ばれた者は1人ずつ隣の部屋に来るように。」

(……よりによって俺の一番苦手な術じゃねーか！)

イルカの口から出た言葉に途端に真っ青になるナルトを尻目に、シカマルはナルトと同じくらい“危ない”人物に目を向ける。

「おい、ナルトもそうだけだよ……サクラ。お前、大丈夫かよ？」

「……………ん？……………まあ……………なるよーになるさ」

呑気に言っではいるが、『本番』になると必ずと言っていいほど何かやらかすことは長い付き合いでよく分かっている。何より今も緊張しているのがバレバレだ。

「ハア……………。まあ、お前の場合あがりさえしなければ大丈夫だ……………」

「そつね……………。リラックスしなさいよ！」

「落ち着いて、ゆっくりやれば…大丈夫だよ。サクラちゃんなら……………」

「油断禁物だが、何よりサクラの場合は冷静さが大事だ。何故なら

……。」

「もう、心配ないって〜！大丈夫だから！……多分。」

「……それが心配なんだよ（なのよ）」「」「」

練習はしたものの、やはり断言は出来ないサクラに友人達はため息をついた。

10才で肉体の『改造』が終わり、本当の意味でチートとなれたサクラだったが、『テスト』や『面接』で人の前に立つとあがってしまいがちなところは前世から治っていない。
なので、この卒業試験は彼女にとって最大の山場と言っている。

しかもここは忍の学校なので出席番号や席順は決まっていない。テストの順番もランダム。
サクラもナルトも内心かなりヒヤヒヤしていた。

「ナルト……一緒に頑張ろうね……！！！」

「おっつ……オウ！！サクラちゃん！！！」

ガシツと熱く手を握り合う二人。

「……………次、春野サクラ!!」

額宛てをしたサスケと共にイルカが入って来た。とうとう審判の時間が来たようだ。

「おめでとう…サスケ。じゃあ……………逝ってきます……………」

「おい。ウスラトンカチ。」

引きつった笑顔を浮かべ、隣を通り過ぎようとしたサクラに声がかかる。

「お前は何だかんだでやれば出来るだろ。あんなに練習もしてたんだから大丈夫だ。行ってこい。」

「サスケ……………」

意外な人物からのエールに目を見開き驚いたような表情を浮かべていたが、しばしその端正な微笑を見つめ……………顔をしかめた。

「なんか……………ムカツク……………」

「……………てめえ……………人がせつかく励ましてやったのに……………」

「いひゃいひゃいひゃい!」

サクラの頬を引っ張るサスケ。どこかで見たような光景だ。

(アイツら……………また始まったか……………。)

「ハア…。サクラ……………あんたもいい加減覚えなさいよ……………」

「バリバリ…。サクラ痛そう。…」

「おい!お前ら!!その辺にしとけ!」というイルカの声にフンと鼻を鳴らして引っ張っていた頬を放してやる。

「サスケ……………後で覚えてろ!」

(サクラ……………そりゃヤラレ役のセリフだ……………。ったくめんどくせ
ー……………)

スタスタ去っていく背中に捨てゼリフを吐きつつ、「わかったわかつた」とズリズリ引っ張られていくサクラをシカマルはどこか遠い目で見送った。

十十十十十

「よし、じゃあサクラ。分身の術をやってくれ。ゆっくり、落ち着いてな?」

「は……………はい。」

少し赤くなりながらも慎重に印を組む。

「《分身の術》! ! !」

問題なくサクラの横にサクラが4人現れた。

「よく頑張ったな！サクラ！合格だ！！！」

サクラはそれを聞くとホッとして顔を綻ばせた。

その後早く皆に知らせたい一心で、額宛てを受け取るのを忘れたまま教室から出て行こうとしたのはご愛嬌だ。

＋＋＋＋＋

「シツツカマル〜〜〜！！合格したよ〜〜〜〜！！！」

「オイ！止せて！分かったから！！とりあえず離れろってっっ！！」

帰ってきた途端に満面の笑顔で、目の合ったシカマルに思い切り抱きつくサクラ。公衆の面前で抱きつかれた側はたまったものではない。

「次！日向ヒナタ！！」

「ヒナタ！さっきはありがとう！ヒナタも頑張った！」

ヒナタの名前が呼ばれ、シカマルから離れてヒナタにガバツと抱きつくサクラ。

「わわ……！うん。ありがとう。その……頑張ってくるね……。」

艶やかな黒髪の可愛い少女は恥ずかしそうに頬を染めた。

(くううー！ー！可愛い！可愛いぞヒナタああー！ー！)

ヒナタに抱きついたまま悶えるサクラ。

「ハア……サクラ。嬉しいのは分かるがそろそろ離れろ……。試験が終わらないだろ……。」

イルカの言葉に渋々離れる。

「……………」

「おい……。何でまた俺のここに来んだよお前は！！てか無言で抱き付くな！！！」

「だってヒナタが居なくなっただもん。」

「理由になつてねーよ！！？？いのもいんだろが！？」

「え？？私はあゝ……………抱きつかれるなら……………サスケくんがいなあゝゝゝ」

サスケに熱い視線を送るいの。

余談だがヒナタはナルトに惚れている。メンバーの中で性格的にも立場的にもサクラが一番抱きつき易いのは自然とシカマルになるのだ。

「……………というワケだ。諦めて抱かれなさい。」

「それなんか違うだろ……………ハア……………」

チラリと視線を逸らすと、黒いオーラを纏う奴らが嫌でも目に入った。

「シカマルてめえ……………」

「サクラちゃ〜ん！オレのトコが空いてるってばよ？」

「ナルトは鈍感だから気づいてないだけだよ。

それと、いい加減『ちゃん』付けやめい！呼び捨てにしなさい。」

「……………さ……………さ……………サクラ……………ちゃん。」

「……………どの乙女だ……………」

サクラとナルトが会話している間もシカマルを睨む3人。

（……………いい加減離れろ。）

（クソッ！鼻の下伸ばしやがって！！）

（……………。。）

（サスケ、それは俺じゃなくてサクラに言え！！

キバ、いっつもサクラの隣で鼻伸ばしてんのはテメーのほうだが

!!???

それとシノ！無言で虫出すんじゃないやねえよ!?!?どう見ても不可抗力だ
るが!?!?俺は悪くねえ!?!?)

睨む奴らと視線だけで会話するシカマル。

「ムシャムシャ……シカマルも食べる……?」

「チョウジ……お前はいい奴だ……。」

唯一自分の味方であるチョウジの気遣いだけがせめてもの救いだっ
た。

(あー……早く俺の番来ねーかな……。)

伝わってくる感触やら香りやらを思考回路から無理やり削除ながら
シカマルは本日何度目かのため息をついた。

忍者学校卒業試験【其の参】

卒業試験が終わりに近づいた頃。

9人の仲良しグループは教室で少し気まずい空気に包まれていた。

試験を受けに行ったナルトが戻って来ないのだ。

本来なら例え失格になっても教室に戻って待機しなければならないにもかかわらず、ナルトが戻らないまま既に残りの受験者はあと3人となっていた。

「ナルトの奴また落ちたのかぁ!？」

何時までたっても戻って来ないナルトに痺れを切らしたのかキバが叫んだ。

「そうみて間違いない。何故なら、イルカ先生の様子がおかしいからだ。」

「シノ! 分かりにくい言い方で普通過ぎるコト言っんじゃないよ!」

「な……ナルトくん……。大丈夫かな……。」

「あんのバカ……………」

不安げに教室の扉を見つめるヒナタ。

いのは吐き捨てるように言いつつも、その視線はヒナタ同様に扉に向けられている。

「ムシヤムシヤ……………ナルト、どこ行っちゃったんだろ。」

「さあな……………けど、少なくともここには戻って来ねーだろーよ。」

シカマルの的を射た言葉に口を閉ざす一同。

「心配ないって。ナルトなら大丈夫だよ。絶対。」

重い沈黙を明るい声が打ち破った。

「はあ？サクラ、何でそんなこと言えんのよ？」

「だってナルトだもん。」

(理由になってないっての……………。)

だが、笑顔を浮かべるサクラのその強い『信頼』の眼差しの光には
僅かの揺らぎさえない。

「はあ……………サクラ。あんたのその呆れるくらい“超”ポジティブな
ところが羨ましいわ。」

「いの……………」

「言っとくけど、褒めてないわよ?」

キラキラと目を輝かせるサクラに釘を刺す。

「サスケ……………。君には負けない……………」

何故かサスケに矛先を向けるサクラ。

「……………。テメーの思考回路はどうなってやがんだ……………」

(サスケ……………同情はしてやる。助けねーけどな!!)

さっきの仕返しなのか、シカマルはニヤニヤしながら、ただそれを眺めた。

十十十十十

2週間後に合格者説明会があること、その前日までに忍者登録書を提出すること等の緒注意を受け、卒業生たちはアカデミーの前の広間で、保護者達に迎えられていた。

「よくやったな！チヨウジ!!」

「あ！父さん!!」

その巨体ゆえ、集団の中で一番目立っているチヨウジの父、『秋道チヨウザ』が笑顔でサクラ達に近づいて来た。

チヨウジはその姿を見ると嬉しそうに彼の元へ駆け寄る。

「みんなもおめでとう！チヨウジ、今夜は母さんが家でご馳走を作ってくれるからな！！」

「本当！？よし！いっぱい食べるぞー！！」

拳を天に突き上げ叫ぶチヨウジ。チヨウジもチヨウザもかなりの大食いだ。

その秋道家の『ご馳走』とだけあって、チヨウジの母は今日昼から夕食の準備を始めている。

「お〜〜。シカマル。お前も受かったか……………」

なんとも気の抜けた声のしたほうを見ると、シカマルそっくりに頭の上で髪を束ねた男性が立っていた。

「んだよ…親父も来てたのかよ。」

「サクラも受かったのか。よくやったな。」

息子を迎えに来たはずの父…………『奈良シカク』はシカマル…………ではなくその隣に立つサクラの頭を優しく撫でる。

「はい、ありがとうございます！！シカクさん！！」

(……………親父の奴、何しに来たんだよ?)

そうこうしていると、シカクの後ろからいのそっくりの薄い金髪のポニーテールの髪型をした男性が顔を出した。

「ゲツ……………。やっぱり父さんも来てたんだ……………」

「いの……………いくら何でもそれはひどいぞ……………」

思春期な娘の反応に傷つく『山中いのいち』。
その背中には少し哀愁が漂っていた。

シカマルはふと視線をずらすと、人波の中に妙な空気があった。

よく見ると、その中心に、何かを探しているのかキョロキョロと辺りを見回す男性がいる。

その挙動不審な様子は、なんとなく近寄りがたいものがある。
周りが避けているのもそのせいだろう。傍らには女性が立っていて、
そんな男性を白い目で見ている。シカマルはその二人に見覚えがあった。

男性と目があつた。

男性もシカマルに見覚えがあるのか、目が合うなりものすごい勢いでこちらへ歩いて来た。

「シカマルくん！ああ！皆さんもお揃いで……。シカマルくん！ウチの娘を見なかったかい！？」

挨拶もそこそこにガツチリとシカマルの肩を押さえる男性。

「えっっ………と……、今そこに……あ……！」

隣に目を向けると、そこに立っていたハズの彼の“娘”の姿はいつの間にか無くなっていた。

何故かサスケもいない。

（あいつ……！！逃げたな……！！）

「シカマル……あっち。」

いのが顔をしかめつつ、ある一点を指差した。

そこには三代目が仕方なさそうに笑ながら、イルカとサスケは気ま
ずそうな顔をしながら立っていた。

その後ろには…………アレで隠れているつもりなのだろうか。
ピンクの髪が見え隠れしている。

男性もそちらに視線をやり、それが見えたのか《瞬身の術》で消え
た。

「サクラああああー！！！！受かったんだな！！父さんは
…………父さんは嬉しいぞー！！！！！！」

大声が響き渡り、一瞬で全ての者の視線が集まった先では、男性が
少女を思いきり抱きしめていた。

「ア…………アハハハ。父さんも来てくれたんだ…………？」

（ ）（ ）（ ）…………ああ…………隠れたくもなるか…………。アレじゃあ
な…………。（ ）（ ）（ ）

顔をひきつらせながらも父に笑顔を向けるサクラに一同はひどく共感した。

だが、次の瞬間男性の顔が地面にめり込んだ。頭にはデカイタンコブが出来ている。

「ごめんね、サクラ。私が何か言う前に家飛び出しちゃって……。」

男性の背後には女性が握り拳を作って立っていた。

「んーん。大丈夫！二人とも来てくれてありがとう！！」

女性はサクラに優しい笑顔を向けると、三代目とイルカに向き直った。

「火影様、イルカ先生、いつもサクラがお世話になってます。」

「おお……。スマレか。ナズナは相変わらずじゃな。」

サクラの母……。『春野スマレ』にそう言いながら、いまだ地面に頭を突っ込んでいるサクラの父……。『春野ナズナ』を見る。

「はい…………お恥ずかしながら…………。ほら！アナタ！何時まで寝てんの！？ちゃんと挨拶しなさいよ！！！」

首根っこを掴まれ手荒に起こされる。

「ど…どうもお世話になってます」と妻の視線に冷や汗を流しつつ、復活したナズナは二人と挨拶を交わした。

「あーあ…………。ナズナのやつ、完全に尻に敷かれてんなあ…………。」

(よく言っぜ…………。自分だって母ちゃんに頭上がんねーくせによ…………。)

自分のことは棚に上げて言う父をシカマルは胡散臭そうに見た。

「じゃあな。俺は帰るぜ。」

ちらほらと家路につく者が出始めたため、自分もとつとこの場から立ち去ろう…………と、サクラに無理やり引っ張られて来たサスケも踵を返す。

…………が、ガツチリと肩を押さえられた。

振り向くとサクラが笑顔で立っている。

「……どこ行くの……?」

「は??」

「こんな明らかに周りに引かれてる状況で……自分だけ逃げようだなんてそうは問屋が卸さないぜ? 『兄弟』?? 私たち 『運命共同体』 だろ??」

まさか私を一人にするなんて、薄情な真似はしないよな……??」

確かに先の出来事が原因なのか、周りの人々は彼らを避けるかのよう
に一定の距離を保っており、6人は嫌というほど目立っていた。

「は? お前、何ワケわかんねーこと……」

「なにいい!!?? 『運命共同体』 だど!!? まだサクラは嫁になど」

「アンタは黙ってなさい。」 「グホオ!!」

「……………」

懲りずに母に沈められる父を余所に、サクラは男友達のようにサスケの肩に腕をかける。

「お母さん。こっちは私の『兄弟』のサスケっていうの!!! 今日

一緒に卒業祝いしようってさ。」

「おい！俺がいつそんな……」「そのほうが賑やかでいいでしょ？サスケ。自分だけクールにカッコ良く帰って自分だけモテモテゲージ上げようなんて許さないよ???」兄弟』なんだから、一緒に過ごすのは当たり前だろ??私の友になったのがキミの運の尽きだ。私と仲良く一緒に変人レッテル貼られようよ　大丈夫。初めは恥ずかしいけど、プライドという名の殻を破ればキミもこっちの『モテない組』の仲間入り　……それに……悔しいけどそれでキミがモテなくなるなんてことはないから。悔しいけどね。もし、万が一モテなくなったらみんなで慰めてあげるよ。……笑いながら

「……………」

『兄弟』の部分をヤケに強調し、息継ぎをすることなくたたみかけるように一気に言い切るサクラ。途中から言っていることの主旨が解らなくなったが、“逃がさない”と言わんばかりのその視線は有無を言わせない何かがある。

「いいよね？お母さん。」

「ええ……………。もちろん、大歓迎よ？ええつと……………サスケくんはそれでいい？」

「いや…俺は」「逃がさないよ???」

「……………」

(……………この子だったら…。いつの間にこんなに強引になったのかしら……………)

(サクラのやつ……………ウチの母ちゃんより強引になってねーか……………?)

(サクラって……………何でああなるのかしら……………。 “アレ” さえなければ、顔がいいんだからモテるはずなんだけど……………)

いのはサクラがサスケに対する態度が、どうみても『乙女』のそれではないため、嫉妬心やライバル心は湧かないものの、代わりにサクラの将来に不安を感じた。

……………

「はい！サスケくんも沢山食べていいからね？」

「俺は認めん……………！認めんぞー！！」

「サスケ、早く取らないと食べちゃうよ？」

「……………」

真ん中にすき焼きの鍋が置かれたテーブルに追加の肉と野菜を置くスミレ。何やらブツブツと呟くナズナ。
早く取れと催促する割には箸のスピードが速いサクラ。

（何でこんなところにいんだ……………」）

サスケは断り切れなかった過去の自分を呪った。

（……………寝れねえ……………」）

サスケは床に敷かれた布団の上で、隣のベッドの上の山をチラリと見た。

既にベッドの上の人物は寝ているのか規則正しい息づかいが聞こえ

る。

夕食を食べた後、帰ろうとしたらまたもやサクラに止められた。

「泊まってこーよ。乗りかかった船でしょ??ここで帰ったら男が
廃るよ『兄弟』??」 「私たち『運命共同体』でしょ?『兄弟』で
しょ??いつつも女の子にモテモテで男子からも一目置かれてん
のが羨ましくてムカつくから、仕返ししてやるーなんてこれっぽち
も思っていないよ?..... 思ってるけど。つーか減るもんじゃないで
しょ??大丈夫。私の部屋で、布団敷いて寝れば万事オーケー。え
?逆に問題だつて???知るかそんなん。『問題』なんて単語は羊
にでも食わせとけ。」

そんな感じでガツチリと掴まれたまま、脅しなのか愚痴なのかわか
らないセリフを永遠に続けそうな勢いだったため、サスケはもはや
折れるしかなかったのだ。

(一体、コイツは何がしてーんだ.....。)

彼、『うちはサスケ』は『写輪眼』と呼ばれる『血継限界』を持つ
特別な一族の末裔であり、『うちは一族抹殺事件』の生き残りでも
ある。

サクラはそれを知っていてなお、サスケに同情する素振りなどは全
くなく、昔と変わらぬ態度を貫いてきた。

なので、今回のこれも、あの少しも本音を隠していない長つたらしいセリフから考えても、彼女の気遣いではないだろう。

……あの時、盾にされた時点でこれは決まったことだったのかも
しれない。

(……たく。自分だけ気持ちよさそうに寝やがって……。)

眠れないのは、慣れていない他人の家ということもあるが、問題はそこではない。

春野サクラはいつも長袖、長ズボン。胸も他の女子と違って男のよ
うに平らかだ。

だが、今日、風呂から出た後のサクラはパジャマ姿。2つに結ばれ
ていた髪も解かれ、何故か無かったはずの胸もあった。

そんな姿を見れば、イヤでも“女”だと再認識させられる。

何だか妙に落ち着かない。さらにそれが腹立たしくてイライラする

……そんな無限ループにハマっていた。

突然ムクリとサクラが上半身を起こした。

「 ……起きてたのか? 」

サスケの問いかけに答えることなく床に足を乗せる。

月明かりに浮かび上がるその姿はどこか別人のように感じる。

「おい、どっし……………」。

言い終わる前にベッドから立ち上がるとこちらへ近づいて来て……………
……………当たり前のように布団に潜り込んだ。

「おまつっ！…！今すぐ出るこのウスラトンカチ！…！」

小声で言っが、既に寝てるのか体に抱きついてスヤスヤと寝息を立てている。

（まさか……………寝ぼけてたっつてのかわか！???)

引き剥がそうと体を動かすと何やら柔らかい感触が伝わって来る。

いつもは寝ている時間だからか、同時に睡魔も襲ってきた。

「この……ウストラトンカチが……」。

捨て台詞を吐きながらサスケの意識は朦朧となり、程なく眠りに入
った。

「………よめるは早く寝ましようネ??」

静けさに包まれた部屋に楽しそうな声が響いた。

忍者学校卒業試験【其の参】（後書き）

恋愛なのか友情なのか解らなくなってきましたね……”……）読者様の想像におまかせします。作者自身もわかってません（汗）

主人公の過去、主人公について等々は本人、またはナルト達が語ってくれる……と、信じてます（オイ！！）

こんな未熟な作者ですが、今後もお付き合い頂けると幸いです。m
（――）m

サクラの両親の名前について。
もしかしたらアニメとかで使われてるかも……とビクビクしながら、春の植物から取りました。
もしあったら……NARUTOの平行世界だから……という……とで流して下さい（；；）ノ

寄り道【其の壱】（前書き）

……最近寒くなって来ました。

テストは無事、再試になる事もなく終わりました！

しかし作者は風邪をこじらせてしまいました（T|T）
でも更新します。

皆さん、お体には十分に気を付けて、夜はちゃんとあったかくして
寝て下さいm（|）m

では、よい夜。

寄り道【其の壱】

肌寒い澄んだ風が頬をくすぐる。

柔らかい光を受ける静かな道を一人の少年が歩いていた。

やや色白の肌。後ろ髪がツンツンに跳ねた黒髪。グレーの半ズボン。青いTシャツの背中には彼の一族の紋章であるウチワをかたどった模様が描かれている。

その整った造りをした顔は、何か気に入くないことでもあったのだろうか。

かなり不機嫌そうに眉間にシワが寄っている。

彼の背後。少し離れた位置にもう一人の人物が彼と同じ歩調で歩いていた。

グレーの長袖シャツに黒い長ズボン。

ショートカットの後頭部だけ膝まで伸ばしたピンクの髪を2つに結んでいる。

深いダークグリーン瞳の瞳は朝日を受けてキラキラ輝いていた。

我慢出来なくなったのか少年……サスケがピタリと歩みを止めた。

「……おい。サクラ。いつまでついて来るつもりだ。」

「仕方ないじゃん。バイト先こつちなんだから。」

「失せる。後ろからついて来んな。」

「……………サスケがそう言うなら仕方ないよね……………。じゃあ……………
並んで歩くことにするよ。」

言っちゃ否やサスケの隣に並ぶサクラ。

「……………は？何でそうなるんだよテーマは！…！」

「後ろを歩いてないし、周り道もしなくていいから一石二鳥」

「……………。」

「ホラ、何してんだよ『兄弟』。いくぞ?」

ため息をついて仕方なく歩き出す。

「ため息なんかついたらオッサンになっちゃっしょ?」

「誰のせいだと思ってやがる……。っーかオッサンじゃないだろ
うが。そこは！」

「気にしたら負けだよ??ホラ、深呼吸〜　　そうすればキミの
荒んだ心もきつと……………いひゃいひゃふーー!!」

フンツと鼻を鳴らすとサクラの頬を解放してやる。

「……………暴力はんた〜い。」

「自業自得だウストラトンカチ。」

「なにおう!!!毎回人の顔を引っ張る奴が心は荒んでないわけ…
……………ひゃいひゃひゃひゅひゃー!!!」

しばらくお待ち下さい。

5分後。そこには満足そうな顔をしたサスケと悔しげに頬を両手で
包むサクラという図が出来上がっていた。

(クツツ……………!!どいつもこいつも人の顔を何だと思ってんだ!!
!!本当のこと言っただけなのに!!!!!!)

何故自分がそんな目に遭うのか……………彼女が理解出来る日はもうしばらく先になりそうだ。

同じようなやりとりを繰り返しながらも、サスケのアパートに着いたため、2人はそこで別れた。

(ま、昨日のは何だかんだでサスケも楽しんで?たし、終わり良ければ全てよしってことに……………しとくか。一応。
でも……………サスケがどんどんムカつくキャラになってる気がするの
は何でだろう?)

サスケと別れた後、一人で歩きながら、昨日の春野家での卒業祝いに思いを馳せるサクラ。

原作では、うちはサスケは“復讐者”となり、“憎しみ”という闇に身を落とした。

彼女にとって、こちらのサスケは兄弟同然の存在。そんな末路は何としてでも避けたかった。

10才まで精神と肉体の融合のせいで、大した力が無く、『うちは事件』は退けられなかったサクラだが、サスケとは小さい頃からの幼なじみだったため出来ることはやってきた。

『出来る事』とは言っても、彼女がやって来たことは先ほどとさして変わらない事ばかりだが。

そのおかげ？もあってか、今のサスケの目には原作ほど冷たい光はない。

(んじゃ、私も行くとしますかね。)

サクラはスツと横道に逸れると姿を消した。

十十十十十

サクラの姿が次に現れたのは、とあるアパートの物陰だった。

階段を登り、一つの扉の前で立ち止まる。

ドアノブに手を掛け回してみる。

カチャリと軽い音と共に、簡単に開いた。

「また鍵かけ忘れら……。無用心にもほどがあるでしょうが……………」。

扉の向こうでグッスリ眠っている家の主に向かって小声で言う。

「さて、よめこのみんな！例え友達の家ドアが開いてるからって無断で入るなんてことはしちやいけないよ？」

笑顔で呟きながら堂々と不法侵入した。

ベッドの上では金髪の少年……………ナルトが丁度寝返りをうった。

昨日の卒業試験に備えて前日に何かやっていたのだろうか？部屋が荒れ放題だ。

部屋を見回すと、鏡の前に置かれた、少しばかり年期の入った木の葉の額宛てが目についた。

それに笑みを浮かべつつ、テーブルへたどり着くと巻物を広げた。そこには口寄せの術式が、『食』の周りを取り囲むように描かれている。

そつと手を載せチャクラを流すと、異空間で作った朝食が現れた。

紙を取り出して少し考えながら何か書くと、傍らに添えて巻物を回収して部屋を後にした。

「あ、額宛てどこにしようかなあ……。……うん。ラティに聞こつと。」

思い出したように呟く。

サクラは自分に対して、センスというものがまるで無い。

それは本人も自覚しているため、その面において、服以外はラティシアによく頼る。

サクラの今の髪型もラティシアによるものだ。

服も頼ればいいのだが、「服は長袖、長ズボン!!」と要らない意地を貫いている。

両親はサクラが小さい頃からよくケガをしていたため、多少服が女らしく無くても何も言わない。

度の過ぎた親バカな父に至っては、むしろ「変な虫が付かない」と

歓迎しているほどだ。

「……さすがに、卒業したんだからただの長袖長ズボンじゃつまらないよね〜……。どんなのがいいかな〜。和風な感じが出したいなあ〜。家に帰ったら考えよつとー!!」

いずれにせよ、新しい服も色気に欠けていることだろう。

鼻歌混じりにまた横道に逸れると、現れた時と同じように消えた。

十十十十十

「本当、助かるねえ〜。サクラ。ついこないだまでこの辺でヤンチヤしてたのにねえ〜。早いもんだよ。」

「よつ……と。うづ……。コメさん……。恥ずかしいから言わないで下さい……。」

サクラは酒瓶を詰めた籠を下ろして困ったように顔を赤らめた。

サクラはアカデミーに入学してからすぐ両親を説得し、1人暮らしを始め、いくつかバイトを掛け持ちしている。

『動き易い』というのも理由の一つだが、何より『融合』に要るエネルギーをより多く取り入れ、期間を少しでも短縮するためだ。

そのためにはどうしてもかなりの量の食料が必要になってくるため、異空間で自分で栽培したり、このようにバイトで稼いだりしてきたのだ。

「アツハツハツハ！！！」木の葉の小さな台風』も、いつちよまえにお年頃ってか！！！」

「で？意中の男はサスケかい？シカマルかい？……もしかしてナルトかい？？お前さん、世話好きな所もあるからねえ。」

「もう！違いますってば！！！！又カさんもその二つ名出さないで下さいよお！！！」

少し怒ったようにむくれるサクラを見て、酒屋の夫婦はさらに豪快に笑った。

寄り道【其のき】（後書き）

えっと、誤字、脱字等がありましたらすみません（T|T）

ご意見、ご感想お待ちしております。 m（|）m

は…腹痛…（T|T）

寄り道【其の武】（前書き）

寄り道第2弾。

相変わらずの駄文ですが、暇つぶしにでも読んで下さると嬉しいで
す”（ノ<>ノ）

では、どうぞ。

寄り道【其の貳】

「ふあああ〜」。

大きな欠伸と共にベッドの上で一人の少年が目を覚ました。

類にキツネのような三本のヒゲの模様がある少年……………うずまきナルトは、そのまま起き上がることなく、窓から見える青空をぼつと眺めた。

十十十十十

『本当の事を教えてやる。』

卒業試験に落ちても、卒業出来るとっておきの秘密

アカデミーの教師であるミズキに言われて、火影邸からデッカい巻物を盗んだ。

そしてそれに書いてある術を修行して、ちょうどイルカ先生が来たため術を見せて、卒業させてもらおうとした時だった。

現れたミズキの口から聞かされた言葉は、ずっと里の者に毛嫌いされてきたナルトに重くのしかかった。

『ナルト、お前の正体が“化け狐”だと口にしない掟だ。』

『イルカの両親を殺し……………里を壊滅させた“九尾の妖狐”なんだよ!!』

『お前は“憧れ”の火影に封印された!』

『里のみんなにずっと騙されてたんだよ!!』

『イルカも本当はな……………お前が“憎い”んだよ!!』

騙されてた。ずっと。

自分に対して正面から接してくれていると思っていたあのイルカ先生にさえ。

悔しかった。

自分の中に九尾が封印された……………それだけで……………自分が望んだわけでもないのに……………。

怒りが腹の底からフツフツと湧き上がる。

だが、気付くとイルカ先生が自分に覆い被さっていた。

背中に大きな手裏剣が刺さっている。

かばった？どうして……………??

「俺なあ……………両親が死んじゃったからよ……………。」

イルカの口からポツリポツリと語られる過去。

それは、人の気が引きたいがために、いつもイタズラをしていた自分と重なって……………

「そっだよなあ……………ナルトお……………」

寂しかったんだよなあ……………。苦しかったんだよなあ……………。

……………ごめんなあ……………俺がもっとしっかりしてりゃあ……………こんな思いさせずに済んだのによ……………。」

イルカ先生の頬に涙が伝う。

顔に雫が落ちた。

どうすればいいか解らなくなって、走った。

木の影に隠れて様子をうかがう。

そこではミズキを足止めしたイルカが、自分に気付かないよう、ミズキと対峙していた。

『逃げろ』と言われたにもかかわらず、体が動かないでいた。

イルカ先生は庇ってくれた。
自分のために涙を流してくれた。

……でも……まだ信じきれなかった。

だから……確かめたかった。

「クククク……親の仇であるアイツを庇って何になる？」

「お前みたいなバカ野郎に巻物は渡さない……！」

「バカはお前だ。ナルトも俺と同じなんだよ！」

「……同じだと？」

「あの巻物の術の力を……あの化け狐が利用しない訳がないだろ！
アイツはお前が思っているような……」「ああ……！」

ミズキのセリフを怒りを込めた言葉で遮る。

否定はしていないその言葉を聞いて、ナルトは手に持っていた巻物を握りしめた。

(ケツ……………やっぱそうだってばよ!!ホラな……………イルカ先生も……………本心では俺のこと……………認めてねーんだ……………。)

「化け狐ならな。けど、『ナルト』は違う。」

ハッと目を見開く。

「あいつは……………あいつは、この俺が認めた、優秀な生徒だ。」

……………努力家で一途で……………そのくせ不器用で誰からも認めてもらえなくて……………あいつはもう人の心の苦しみを知っている。」

「今はもう化け狐じゃない。」

「あいつは木の葉隠れの里の……………『うずまきナルト』だ。」

溢れ出す涙が地面を濡らした。

だが、その怒りで血走った目は次の瞬間“恐怖”に染まる。

一瞬でナルトが千人になったのだ。

いくら相手があのだナルトでも、その数には圧倒されてしまう。

残像ではなく実体そのものを作り出す高等忍術《多重影分身の術》。それが、あの巻物の始めに書かれていた術であり、ナルトがイルカに見せる為、一人で練習していた術だ。

「どうしたんだってばよ。」

「かかってこいよ！一発で殴り殺すんだろ？ホラ！！」

ナルト達が口々にミズキを挑発するが、されたほうは腰が抜けたのか尻餅をついた。

「「「こないんなら……………こっちからいくぜえ？」」」

5分後。そこには顔の原形が解らなくなるほどボコボコにされたミズキが伸びていた。

「へへ…………ちとやり過ぎちゃった…………。」

「まったく……ナルト、ちょっとこっち来い。」

イルカに呼ばれて不思議そうな顔で近づく。

「目、閉じてる。いいつて言っただけ開けるなよ?」

「え?何?何??」

「いいから。」

仕方なく目を閉じる。

ゴーグルが外された気がした。

「よし!開けていいぞ!」

目を開くと、イルカの優しい笑顔があった。

「卒業……おめでとう。」

額に手を伸ばすと、金属の板に触れた。
ずっと手が届かなかった木の葉の額宛てだった。

「今日は卒業祝いだ！！ラーメンをおごってやる！！」

ナルトは嬉しさのあまり怪我を負ったイルカに抱きついた。

「わ！コラ！いてーよ！！」と言いつつも、イルカはそれを笑って受け止めた。

＋＋＋＋＋

ナルトは空から視線を移して、鏡の前に置かれた額宛てを見ると、嬉しそうに笑った。

ムクリと起き上がり、テーブルの上に作りたての朝食があるのを見つけて目を見開く。

ドキドキしながらメモを手にとった。

〜〜ナルトへ〜〜

腹が減っては戦は出来ぬってね！全部残さず食べること！！

全部食べてデカくなれ！！

どんな時でもナルトはナルトらしく居ろ！

〜〜サクラ〜〜

文面から見ると、もしかしたら彼女は額宛てには気づかなかったのかもしれない。例えあのまま卒業出来ていなかったとしても、彼女はこうやって、以前と変わらず自分を見てくれるだろう。

合格者説明会の時まで秘密にしておいたら、どんな顔をするだろうか？

一週間後が待ち遠しい。

「ヨオ〜〜〜シ！！今日もバリバリやってやるってばよー！！！！」

ナルトがイルカに見つかるより少し前。

ナルトの《お色気の術》にアツサリやられ、鼻血を流して倒れている火影の隣にローブに身を包んだ子どもと大人が現れた。

子どもがしゃがんで、木の枝を取り出して火影をつつく。

大人の方もしゃがんで、フードを取って素顔をさらし、つつかれる火影を半目で眺める。

「起きないわね？」

「……………起きんな。おい。じーちゃん。朝だぞ。」

「夜でしょ。」

「あ……それもそうか。」

「それにしても起きないわね？何かないの？夜光。」

つつかれている本人は、“良いものを見た”と言わんばかりに、幸せそうな表情を浮かべている。

「うーん………三代目火影は実は超ス「違う！
わしはスケベなどではない!!」」

「「……………」」

「……………ア……………」

寄り道【其の武】（後書き）

ナルトが卒業する場面について。

有名な場面なので飛ばそうかとも思いましたが、すごく感動した場面だったので、やっぱり書きました。

何度読んでも飽きない場面です）（

NARUTOを知らずに読んでいらっしやる方、いらっしやいましたら是非読んでみて下さい！！）（

寄り道【其の参】（前書き）

寄り道第3弾です。

まじり。まじり。まじり。

寄り道【其の参】

「コラ！シカマル！いくら卒業した後で、父さんが居ないからってゴロゴロしない！..!」

「はいはい。」

「『はい』は一回！..!」

（つつたく.....朝からめんどくせー.....。）

家の庭に面した廊下に寝っ転がり、空の雲を見上げていた『奈良シカマル』は、朝から響く声を右から左へ聞き流した。

今日は父は任務で朝から居ない。
なので、日課である朝の術の練習も無く、する事も特にないのでのんびりしていたのだ。

仕方なく体を起こすと、将棋の盤と駒を持ってきて一人で挿し始めた。

シカマルは趣味は将棋、昼寝。そして根っからのめんどくさがりという、12歳の子どもにしてはジジ臭いところがある。

「そういえば……アカデミーに入ってから、サクラちゃんすっかり来なくなっただわね？」

よくここでサクラと将棋を打っていたためか、洗濯物籠を持った母、『ヨシノ』が話しかけてきた。

何故だか母はサクラをものすごく気に入っている。

「あんな娘が欲しい」と耳にタコが出来そうなくらい聞かされた回数には足りない程だ。

「そっだな。」

どうしても良さそうに相づちを打つ。

「たまには家に連れて来なさいよ。」

「はあ？何で俺がそんなめんどくせーことしなきゃなんねーんだよ？」

「ハア………アンタも素直じゃないわねえ……。そんな事言っただグズグズしてたら、取られちゃうわよ？里でも色々噂されてるでしょ。」

「

「アイツはそんなじゃねーよ！母ちゃんだって分かんたる！」

「今は”そつでもなくても、女の子ってのは年頃になれば、フとした時に恋しちゃうもんなのよ。」

「……………」

それに返事を返すことなく、パチンツと『桂馬』を進める。

＋＋＋＋＋

「たぁーのぉーもぉー！……！」

奈良家に可愛らしい声が響く。

またアイツか……と、シカマルはめんどくさそうにため息をついた。

トテトテと駆け足の音が聞こえて来る。

曲がり角をチラリと見ると、ヒョッコリとピンク色の髪をした少女が顔を覗かせた。

自分と目が合うと、背後に花畑が広がる幻影が見えそうほどの笑顔になった。

「シカマルう〜!!しょーぎ!!しょー!!」

いつも手ぶらで来ているが、今日はクマのぬいぐるみを大事そうに両手に抱きしめている。

自分が何か言う前にすぐ近くの部屋に入った。

「おーい。サクラ、また来たのか。」

「シカマルのおとーさん、こんにちは〜!!」

「サクラ、俺のことは『シカクのおじちゃん』って呼んでいいんだぞ〜。」

「シカクおじちゃん！〜！」

「うんうん。サクラはいい子だなあ〜。」

「……………」

襖を開けて入って来たサクラの頭を、緩みきった顔で撫でる父に、何とも言えない気持ちになる。

「あのね！あのね！シカクおじちゃん！〜！今からね！サクラね！シカマルとしょーぎするの！〜！しょーぎ、貸してもらってもいい？？」

「おー！もちろんいいぞお〜！〜！」

「わあ〜い！ありがと〜！シカクおじちゃん！〜！」

（……………オヤジのヤツ……………サクラが言えば何でも許しちゃまっんじやねーか……………？）

一抹の不安が頭によぎり、自分から重い将棋盤を持ってやる父を見てため息を付いた。

30分後。

目の前には、膝の上のぬいぐるみを抱きしめてプルプルと震える小動物……………もといサクラがいた。

そのダークグリーンの目からは、今にも涙がこぼれ落ちそうになっている。

「おうおう。女の子相手に容赦ねえなあ。シカマルよあ。」

「たまには手加減しなさいよ。男なんだから。」

よほどヒマなのか、子供の将棋を横から眺める父。

お茶とおやつを乗せたお盆を置き、慰めるようにサクラの頭を撫でる母。

「母ちゃん、男が女に負けるわけにいかねーだろ。つーかオヤジ…
…見てんじゃねーよ。」

サクラが来たら、必ずと言っていいほどの状態になる。

まるで自分が悪者扱いされてる気分になるが、かといって負けてやる気はサラサラ無い。

一週間に一度のペースで来るサクラの腕は、その都度上がっている。初めに比べれば随分と手ごわくなった。少しでも気を抜けばこっちが危ない。

最近では毎日、自分で一人打ちをしてトレーニングをしているほどだ。

だが、さすがに泣かれるのは居心地悪い。……………見たことはないが。

「ったく……………めんどくせーな。お前だって前より腕上がってんだから泣くんじゃ……………」
「……………かい。」
「……………あ……………?」

いつものように、おやつで釣ろうと、伸ばした手が途中で止まる。

「もっかい……………」

涙で濡れていたものの、その目には負けん気の炎が燃えていた。

45分後。

かなり苦戦させられたが、なんとか勝った。

「サクラは成長が早いなあ。シカマル、ボヤボヤしてたら抜かさ
れちまうな?」

「すごいじゃない!あんなにシカマルを追い込むなんて!」

サクラを褒める両親。

だが、本人は捨てられた子犬のような目で、また涙を溜めていた。

「もっ……………かい……………」

ギョツとクマを抱きしめ、プルプルと体を震わせながら、それでも諦め切れないのか、催促する。

負けたのがよほど悔しかったのか、上目遣いになっている。
が、自分もそろそろ休みたい。

「サクラ……一端休憩してからにしようぜ……。」

「ヤ！」

ケンカする時は、人が変わったように、言葉遣いも態度も男顔負けの暴れっぷりを見せるくせに、周りの子供より子供な所があるのは何故なのだろうか。

「ったく……駄々こねんなよ。ガキじゃあるめーし……。」

「シカマル、6才は充分ガキだろ。」

(いや、確かにそうだけど……。もうアカデミーにも入ったんだぜ？このままじゃ虐められちゃうだろ。

まあ……そんな時やそんな時で……。って、そんなこと考える場合じやねー。俺の味方は居ないのかよ!?)

ハア………と深いため息を吐くと、おやつケーキをサクラの視界

に入れる。

「ほれ。ケーキ。好きだろ？相手してやるからよ。これ食ってからしよーぜ。」

ケーキが視界に入った途端、キラキラと目を輝かせて辺りに花を咲かせる。

(扱い易い奴……………。)

そう心の中で呟きながらも、やはりその笑顔には癒やされた。

+++++

(チツ……………なんだコレ……………完全に手が詰まってやがる。めんどくせー……………。)

いくらアイツが鈍感だとはいえ、気にならないと言ったら嘘になる。

最近、たまにこちらが戸惑ってしまっほど、急に大人びてきた。

お菓子しか食べたことはないが、あのナルトの野菜嫌いも治っていることから、料理も美味しいのだろう。

体つきはまだ女らしさに欠けているところがあるし、服も色気が無いが、それが逆に良いとかで隠れファンも多い。

何より、アイツの一番良いところはもっと別の所にある。

将棋に集中しようとするればするほど気が散る。

パチンと駒を進めると、『桂馬』が『香車』に取られてしまった。

「たーのーのモーのー!!」

ズブズブとどつぽにハマりそうになっていると、あの声が響いてきた。

久しぶりだからか、何だか懐かしい。

「ああ！久しぶりねえサクラちゃん！すっかり大きくなっちゃって！」

「あ！お久しぶりです！」

母も久しぶりで嬉しいのか、ここまで声が聞こえる。

しばらく女同士でおしゃべりした後、曲がり角からヒョッコリと顔を出して、あの頃と同じ笑顔を見せた。

「シカマル！！将棋、勝負しよう！」

返事を待たずにサッサと目の前に座る。

「この日のためにずっと腕を磨いてきたんだから！！今日こそは……勝あつー！！！！」

ビシッと挑むように人差し指を突きつける。

「……やっぱりお前、変わってねーわ。」

「……何が??？」

「何でもねーよ。こっちの話だ。」

「……………気になる!!!」

「……………フン……。お前が俺に勝てたら教えてやるよ。」

「……………後で泣いてすがっても知らないんだから。」

「そりゃ、こっちのセリフだ。将棋以外も俺はおめーにゃ負けねーよ。」

「言ったなああ!!!??ならば、腕相撲の勝負も申し込む!!!」

「いくらでも相手してやるよ。」

日がだいぶ傾いた頃、そこには、とことん惨敗して落ち込むサクラと、どこか清々しい表情をしたシカマルがいた。

寄り道【其の参】（後書き）

今回は苦労症なシカマルくんが出てきてくれました。

他のメンバーもちよくちよく出て来て、色々話してくれると思います。

これからもお付き合い頂ければ幸いですm（）（）m

第七班【其の巻】（前書き）

読んで下さっている皆様、本当にありがとうございます！ m (

誤字、脱字、おかしい所がございましたら申し訳ありません！)

やっとうさ班分けです！では、どつぞ！ m (

第七班【其の壱】

「！ナルト！！お前、合格したのかよ？」

「へへーん！！天才忍者であるこのナルト様が！！あんな卒業試験くねえで落ちるワケねーってばよ！！！」

(……………。)

目の前の席に座ったナルトに、シカマルは心の中でツッコミを入れた。

今日は合格者説明会の日だ。

教室の中はこれからの事に胸を膨らませて、卒業生たちは少し浮き足立っている。

(それにしても……………サクラの奴こうなること分かったのか……………?)

先日のサクラの笑顔が頭をよぎる。

(……………ないな。)

「おはよー！あれ？ナルト、合格したんだ？」

「おっつはよー！ーサクラちゃん！！！へへ！！もっつちろん合格したってばよー！ホラー！！」

シカマルが頭に浮かんだ考えをアツサリ否定した時、サクラがちょうど教室に入ってきた。

サクラを見るなり嬉しそうに額宛てを見せるナルトに、サクラは優しく微笑んだ。

「おお！おめでとう！やるじゃん。ナルト！」

「うへへえへへ……そ……そうかなあ……？」

「……おい……ナルト。その緩みまくった顔どーにかしろ。キモイぞ。」

「んだよシカマル！今いいトコなんだから水挿すんじゃないってばよー……」

シカマルに反論したナルトだったが、その意識はすぐにサクラの影から出て来た人物へと向けられた。

「!!!!さ…サスケえ!!おまつ!何でサクラちゃんと一緒に来てんだってばよお!!???」

「うるせー!朝っぱらから叫ぶな!このウストラトンカチ!」

「サスケくん!おはよう　額宛て、腰にしてみたんだけどお、どお?似合っ?」

続けて入って来たいのは目の前にサスケが立っていたのを良いことに思いつきり抱きつく。

「ちょっといの!サスケくんから離れなさいよ!」

「あゝら、誰かと思えば、『花瓶ちゃん』じゃない　相変わらずのズンドーね　ブサイク」

「いのおおお!!」

すぐそばで飛び散る火花。

一番頼りになりそうな人物に視線を送るが、ソイツは自分だけ席に座ってこちらを眺めている。

「何でサスケってあんなにモテるんだろう??？」

「おめーがちとズレてるだけだ。女つてのは、クールなエリートキヤラに弱いんだよ。普通はな。」

「サスケってクールぶってるだけだと思っただけだなあ……。あ、ナルト、はい！お弁当。」

(アイツ……後でぜってーシメてやる……)。

ナルトの隣でのんびりと話をしているソイツに、サスケは心の中で報復を誓った。

やっとのことで解放されたサスケは、“ソイツ”の隣がちょうど空いていたため報復のため怒りを含んだ視線を投げながらそこへ座る。……が、座った途端影がさした。視線をずらすとナルトが目の前の机の上に乗っかって至近距離でジ〜〜ツと睨んでいる。

「……………どけー！」

「お前こそどけ！サクラちゃんの隣に座ってんじゃねーよ！！」

「ちょっとナルト！サスケくんがガン飛ばしてんじやないわよ！！」などと、いのを始め、サスケファンの女子達がナルトを口々に咎める。

「ワンワン！！」

その時、可愛い犬の音が聞こえたと同時に、ナルトの頭の上を踏み台にして、一匹の白い子犬がサクラの胸に飛び込んだ。

「あ！赤丸」

「よお！サクラ！」

飼い主のキバがサクラに向かって手を上げた瞬間、教室の時間が止まった。

ナルトとサスケがキスしていた。

「てめ……………！！ナルト！殺すぞ！！！！」

「ぐおおおオオ！！！！口が腐るウウウウー！！！！」

「オエー！！」と気持ち悪そうに悶える二人。

「……………ナルトおお……………あんたねえええ……………」

「ええ？今の、オレのせいじゃねーだろ！！！！？？」

いのの黒いオーラに冷や汗を流すナルト。

だが、ナルトとサスケの本当の苦難はここからだった。

「ああ……………もしかして……………って思ってたんだけど……………。や
っぱり二人ってそういう仲だったんだね……………。」

どころかしんみりと言うサクラ。

だが、必死に笑いをこらえているため、少し肩が震えている。

「……………つつオイオイ……………。マジかよ。」

「な…………ナルトくん…………。」

「うへえ…………マジかあ??男同士かよ!!??」

「“無い”とは言い切れない…………。何故なら、人には人の価値観があるからだ。」

「え?ち…………違つわよねサスケくん??」

シカマルもサクラの意図が分かったのか、笑いそうになる顔を必死にコントロールしながらそれに乗ると、他のメンバーも綺麗に乗せられた。

「ええ!?!?違つつてばよお!?!!」

「おいコラ!何勝手に話進めて…………!?!?」

「『ケンカするほど仲が良い』…………か。」

「顔合わせる度に連んでたもんね。ねえ、シカマル。木の葉では同性結婚ってアリ?」

「ちよっ……！」

「知らねーけど、“ダメ”っていう話は聞いたことねーな。」

「おい！サクラ！テメエワザと……！」 「大丈夫だよ。サスケ、ナルト。私達友達だもん。例え二人が男同士でも、キスをするくらい思い合ってるなら、応援するよ？」

「結婚式には呼べよな。」

「ご飯いっぱい食べれるなら、僕も行くよ。」

「ええ〜。オレはパスすんぜ！男同士のなんか見たってキモイだけだろ？なあ！赤丸！」

「ワン！」

「え？サスケくんまさか本気で……！？」

「だから人の話を……」 「俺は行く。何故なら、男同士の結婚式は前代未聞だからだ。」 「シノ……！」

「な……ナルトくんが男の人が好きだったなんて……。」

「おい！ヒナタ？だから……！」

「……………プツッ……！」

周りが本気にしかけた時、サクラが限界が来たのか、とうとう吹き出した。笑い出すサクラにシカマルも釣られて笑い出す。

「ククククツツ……………お前ら、ハマりすぎだろっつ……！」

「ぷははは……！サスケもナルトも面白過ぎっつ……！」

「んだよ！やっぱ冗談かよ！」

「なあんだ……………ちょっと脅かさないでよ！勘違いしかけたじゃない……！」

「よ……………良かった……。」

「あはははは！ごめんごめん！二人、仲が良いからつい………ね？」

「よくねえ！！（ないつてばよ！）」

2人の声が綺麗に重なり合う。

「！！！テメエ！真似すんじゃねえ！！！」

今度はセリフも同じだった。

「おい！コラ！席つけえ！！！」

タイミング良くイルカ先生が入って来たため、騒ぎまくっていたクラスメイト達は楽しそうにしゃべりながら席へ戻る。

「テメエーのせーでなんか色々勘違いされる所だったじゃねーか！」

「知るか！そりゃこっちのセリフだ！このウストラトンカチ！！！」

「コリアー！お前から静かにしろお！」

（チッ……………サクラのヤツ……………後でぜってー後悔させてやるからな……………！！）

第七班【其の貳】

「改めて、卒業おめでとう！今日から君達はめでたく一人前の忍者になったわけだが、まだまだ新米の下忍……本当に大変なのはこれからだ！」

やっと落ち着いた教室にイルカの声が響く。

「今後はスリーマンセル（3人1組）の班を作り、各班ごとに1人ずつ、上忍の先生が付く。その先生の指導のもと、任務をこなしていくことになる。」

（コイツとだけは勘弁だな……………。）

（ん……………まずはサクラちゃんと……………後は、サスケ以外なら誰でもいいや…）

（な…………ナルトくと…………ああ…………でもちよつと恥ずかしい…………。やっぱり、サクラちゃんといのちゃんとか……………。）

（サスケくんは絶対譲れないわね……………でも…………サクラ大丈夫かしら……………。）

(いのとヒナタがいいなあ　　ああ……でもいのは『いのしか
ちよう』だもんなあ……。
いや!!でも、原作のサクラとは違うし!!もしかしたら……
!!!!)

(まずはサクラだろ?えーっと……後は、ナルトとサスケ以外なら
誰でもいいよなあ?赤丸?)

(ワンワン!!)

(サクラお菓子まだ持ってるかなあ……。)

(……………。)

(ああ……やっぱりコイツら全員サクラ見てやがる……。)

「なお……班は力のバランスが均等になるよう、既にこっちで決め
てある!!」

9人が9通りの反応を見せる中、イルカの言葉に教室が一気に騒が
しくなった。

「静かに!!これは大切なことだ!!今から各班ごとに名前を呼ぶ

から、自分がどの班かしつかり聞いておくこと!!」

まだ不満げな表情を浮かべる生徒達を尻目に、イルカが班とメンバーを読み上げていく。

……が、その班の数字はバラバラだ。

下忍はまず、『正規部隊』に就く。

『正規部隊』は暗部（暗殺戦術特殊部隊）に比べて隠密性は低く、班も単純に番号で分けられている。

今読み上げられている班の番号は、現在、正規部隊で『空いている』番号だ。

『空いている』とはつまり、今読み上げられている番号は任務中に班員が死亡、若しくは忍を辞めるなどして班員が欠け、正規部隊として活動出来なくなったために『空きが出来た』班の数字であることを意味している。

アカデミーでは忍術や戦術を中心に教えるため、この事は普通の下忍の知るところではない。

「次！七班！うちはサスケ、………うずまきナルト！それと………春野サクラ!!」

（結局一緒か………もはや運命なのか………!!!!）

(チィ……！よりによって……サクラだけじゃなくてナルトもか。)

(まあ、サスケが居るならナルト。

で、こん中で一番二人と上手くやれるっつていやぁ……サクラだけだもんなぁ。予想通りってトコか？

……二人ともレッドゾーンだが……サクラがアレだから、まあ心配無いだろ……。

……たまに様子見しに行くか……。

「イルカ先生！！優秀であるこのオレが！どぉ〜〜してこんなヤツと一緒になんだってばよ！??」

ガタン！と立ち上がってサスケを指差すナルトにため息をつき、腰に手を当てて「いいか？」と言い聞かせるように説明を始める。

「サスケは27名中1番の成績で卒業している！ナルト！お前は『ドベ』！！班の力を均等にすると、しぜ〜んとこうなるんだよ！」

「フン………そういうことだ。』『ドベ』。」

「なにお〜〜!?!?」

「ナルト、サスケはきつと嬉しいんだよ！だってさっきファーストキスし……………いひゃいひゃい！！」

「……………てめえの脳みそは……………！何で！そうなるんだよ！！」

「あああ！！サスケ！テメエ！何触ってんだってばよお！離せえ！それとお！！俺はお前なんかごめんだあ！！」

「バカかてめえは！！サクラの言うこと鵜呑みにすんじゃねえーよ！このサクラバカが！！！」

（……………相変わらずだなサクラは……………。
ま……………どうにかやっていけそうかな……………ナルトの奴も……………。）

ギャーギャー言い合ってはいるがどこか暖かい3人のやり取りを見て、イルカは少し苦笑いをしながらも優しい眼差しでそれを眺めた。

「おい！静かにしろ！次！八班！油女シノ！犬塚キバ！日向ヒナタ！！」

「ええ〜！？シノとかよお！！」

「……………」。

「よ……よろしくね……キバくん、シノくん。」

「ケツ！」と言いながらもキバは鼻を鳴らして大人しくなった。

（お……なかなかおもしれー組み合わせじゃねーか……。つーか……あいつら何やってんだ……。？）

シカマルの視線の先では、またサクラが何か言ったのだろうか。何故か3人が無言でジャンケンをしていた。

「……次！十班！秋道チヨウジ！奈良シカマル！山中いの！」

「ああ……。やっぱりそうなるわよねえ……。……。」

「バリバリバリバリ……。」

「ま……こればかりは諦めるしかないだろ。」

グダグダと机に突っ伏すのに肘をついたまま諭すように言うシカマル。

『奈良家』、『山中家』、『秋道家』はそれぞれ秘伝の忍術を持っており、古くから力を合わせて来た一族だ。

その絆は今も深まっている。

3人が一緒になるのは必然であり、既に決まったも同然のことだった。

「じゃ……みんな、午後から上忍の先生達を紹介するから、それまで解散!」

十十十十

春の柔らかい光を浴びて、9人はいつものように揃って、外で弁当を食べていた。

「うほほ〜!この卵焼き上手いってばよオ!サクラちゃん!」

「そ?そう言ってもらえると作り甲斐があるよ!」

サクラは明るく言いつつ、頭では別のことを考えていた。

本来なら、サクラはヒナタにナルトのお弁当は任せてしまおうと思っ
っていたのだが、
ヒナタの置かれている立場、そして彼女の家柄という名の“壁”が
厚すぎてそれは叶わぬ夢となった。

（まあ、あの頑固親父さんの頑固なトコも、もうすぐでナルトがな
んとかするだろうし。それからでも遅くはないよね。）

「ところで、サクラ。お前、そんだけで足りんのかよ？」

サクラが考え事をしていると、シカマルが弁当をチラリと見て言っ
た。

サクラの弁当は、いのやヒナタより多く、ナルトやサスケより少な
い量だった。

「うん。足りるよ？」

「四六時中なんか食べてたとは思えないわね。」

サクラはアカデミーに入学してからというもの、休憩時間はもちろ
ん、昼食もチヨウジに負けないくらい食べていた。

休憩時間は10分だというのに、リンゴやらグレープフルーツやら

を皮ごと丸かじりして、いつの間にかペロリと食べていたのは記憶に新しい。

10歳になってから、食べなくてもよくなったのだが、いきなり減らすと誤解を招きかねないと考え、サクラは少しずつ量を減らしていったのだ。

「あの頃は成長期だったんだよ！きつと！！！！」

「そんなレベルの量じゃないでしょ……。あんなに食べてたのに、太らないアンタが羨ましいわ。食べた物はどこに行ってるのかしら……………」

「ん……………髪の毛と…骨??？」

コテンと頭を傾げるサクラの胸をサスケが見ていたが、それに気づく者は居なかった。

「ここが、ナルトの家ねエ……………」

サクラ達が昼食を食べている頃、ナルトの家の中には、二つの人影があった。

「そうじゃ。間抜けな奴だが、お前に見張らせるのが一番じゃ。お前は鼻が利く。」

火影の笠をかぶり、キセルを吹かしながら、ヒルゼンは部屋を見回す男を見た。

銀髪の髪を揺らし、顔の半分をマスクで隠して、額宛てで左目も隠している。

少し怪しい格好だが、唯一晒しているその右目はやる気に欠けていた。

「それと、お前の受け持つ班には例のうちは一族のサスケもいる。」

「ハア…………そりゃまた面倒なことになりそうですね……………」

「まあ、そう言うな。班には二人と仲の良い者も加えてある。上手

くちゅっていけるじゃろ。」

「誰です？」

「まあ、それは会ってからの楽しみというやつじゃ。健闘を祈る！
！」

「……………了解。」

火影の言葉に半信半疑になりながらも、返事をする。《瞬身の術》で姿を消した。

「さて、七班がどんな班になるのか……………楽しみじゃわい……………。」

第七班【其の武】（後書き）

班の番号について。

原作では卒業生は27名です。でも、シカマル達は十班です。一班3人ですから、普通に考えると数が合いません。

なので、卒業生27人の所を30人にしようかとも思ったのですが、増えるのが嫌だし、『27』という数字のほうがしっくり来たため、作者が無い頭を振り絞って、勝手に裏付けしました。

第七班【其の参】（前書き）

いつもご愛読頂いている読者の皆様、本当にありがとうございます
! m (((m

H 2 3 . 1 0 月 1 9 日

に、PVが10万を超えました!!

ありがとうございます!! (ノ T ()
感激しています!! (ノ T ()

他の作者様と同様に、何かお祝いに書こうかな……あ……いや、でも
物語の流れが……!
うむむむ (. . .) (. . .)

では、後書きに作者の『今だから言える話』を……!! (いらねー
よ!)

と、とにかく、今回はやっとカカシ先生とご対面です!! (((m)
! (((m

「あああ~~~~もおお~~~~!!」

「うるさい!叫ぶな!ウストラトンカチ!!」

「うっせーってばよあ!!お前だってイライラしてるくせにィ!!」

「ん~~~~じゃあさ、一つ提案があるんだけど.....」

サスケとナルトの声に我に帰ったサクラは、イタズラっぽい笑みを浮かべた。

「何?何???」

「お前の場合、ロクなことじゃねーだろ.....」

ナルトは目を輝かせ、サスケは眉を寄せながらもサクラを見やる。

「あのね.....」

一人の忍が廊下を歩いていった。

自分の担当する下忍達が待っているであろう教室の扉に手を掛ける。

が、少し違和感を感じたのか動きが止まった。

(あゝ……………、なんか企んでんな……………。……………ま、いいか。)

例え何か仕掛けてきても対処出来る自信はあるので、深く考えずにそのまま扉を開いた。

「うつふううゝゝん 遅刻して来るような悪いコにはあゝ
オ・シ・オ・キ しちやうぞ」

開いた途端、煙りの中から裸の金髪美女が出てきた。

だが本物ではないことはバレバレだ。

が、瞬時に縄が飛んできて体に巻き付くなり煙玉で視界が遮られる。

振り解こうと思えば簡単に出来たが敢えてそれはしなかった。

そんなことをする必要も無かったのも一つの理由だが、何より、懐かしい香りがしたからだ。

「討ち取ったりいいー!!」

頭上斜め上から大きな声が響く。

忍としてそれはどうだろうと思うが、昔とあまり変わっていないことを少し嬉しく感じる自分も居た。

縄を素早くほどいてその両手首を掴む。

「よー。久しぶりだな……………サクラ。」

煙りが晴れると、あの吸い込まれそうな深い緑の瞳が、自分を映していた。

十十十十十

「ぬあああゝ！もう少しだったのにいいイイ！てか降ろして下さいー！」

「ダメ！そんなことより……ピピコハンマーって……サクラ……。仮にも忍なんだから、もう少しマシな物を使いなさいよ。」

「エ？エ？？何？何？サクラちゃん、知り合い？」

両手首を掴まれてぶら下げられるサクラとそんな彼女を楽しそうに見る男を交互に見る金髪美女。

その隣でサスケはイライラしながらそのマスクで隠された顔を睨み付ける。

「知り合いだかなんだか知らねーがな……いい加減サクラを降

るせー!!」

「んぐ。却下。どーせこれ考えたの、サクラでしょ。しばらく反省してもらわないとな。」

アツサリとしたセリフでのんびりと言うなり、サクラを肩に担いだ。

「ああー!!」

「……………つたく…また変なの引っ掛けやがって……………」

「ホラ!!何してんだぐ。いくぞー。」

+++++

「ま!……………まずは、自己紹介してもらおうか。」

『天』の文字が掲げられた屋上のテラスに、第七班は集まっていた。

サクラは今だに担当上忍の肩。サスケとナルトはそれを何とも言えない顔で見ている。

「あのさ！あのさ！何言えばいいんだってば？」

「ん〜？そりゃあ……………好きなもの、嫌いなもの、将来の夢とか趣味とか……………ま！そんなのだ。」

ナルトの質問に軽く答える。

「あんな美女が裸で可愛くキメてたのに！！
あのセリフ私が考えたのに！！！何で効かないんだ！！！！！」

一方担がれている本人はというと、自分が恥ずかしい態勢になっている事や自分を置いて話が進んでいる事よりも、自分の考えた作戦が上手くいかなかったことに重い衝撃を受けていた。
どうやらそれなりに自信があっただらしい。

「あんなの効くわけないでしょーが。」

（腐っても上忍ってわけか……………。まあ、始めからあの陽動はアテにはしてなかったがな。）

(何で!??原作同様にイチャパラ読んでんのに!?!?!?!まさか
……………“本は読むけど、好きなのは男”とか……………!?!?)

「つてかさ!!先生が先に言えつてばよ!!どーもみて怪しい格
好しやがつて!!!それと、いい加減サクラちゃん降ろせえ!!
!!!」

「そつだそつだ!!降ろせえ!!!!!」

「ダ~~~~メ!!」

「横暴だあ!!それでも教師なのか!!」という耳元の抗議は華麗
にスルーして、二人に目を向ける。

「オレは『はたけカカシ』つて名前だ。

好き嫌いをお前らに教える気はない!!!将来の夢って言われてもな
あ……………。ま!趣味は色々だ。」

「なんか……………すんげえてきとーだつてばよ……………」

「……………」

「じゃ！次はお前らだ。まずはオレンジの服着たお前から。」

「オレさ！オレさ！！名前は『うずまきナルト』！好きな物はラーメンー！！

もーっと好きな物は、イルカ先生におごってもらった一楽のラーメンとサクラちゃんのご飯！！！！

……………嫌いな物はカップラーメンのお湯を入れてからの3分間。」

第七班の担当上忍……………『はたけカカシ』が眠そうな顔で促すと、自分が一番最初なのが嬉しくてナルトは元気に自己紹介を始める。

「将来の夢はあ……………“火影を越す”！！！！
ンでもって、里の奴ら全員にオレの存在を認めさせてやるんだ！！！！」

なかなか面白い成長をしたものだ。
カカシは一瞬、その眩しい金髪に目を細めた。

「趣味は……………イタズラかな。」

「……………次……………」

なるほど……先が思いやられるな……と思いつつも、一番気掛かりな黒髪の少年に視線を移す。

「……名は『うちはサスケ』。嫌いな物や好きな物を言う気は無い。」

「好きなものはトマトで、嫌いなのは納豆だよね。」

「プププ……やーいやーい!!言われてやーんの!!」

「……お前らは黙ってる!!」

頭が痛そうに額宛てに手をやるサスケ。
だが、少し恥ずかしいのか顔がほんのり赤くなっている。

「（ああ……「ごういう関係なのネ……」……夢は?」

「……夢……というより目的ならある。」

「一族の復興と……ある男を必ず……“超える”ことだ。」

瞳に宿るのは『決意』の紅い炎。

それは、火遁の術を得意とする『うちは一族』の名に相応しく、強い輝きを放っていた。

その時、チラリとサクラを見たのをカカシは見逃さなかった。

(……………あの“悲劇の末裔”が……………ねえ。こりやまた面白い成長をしたもんだ。

……………サクラが関係してそうだが……………三代目が言っていたのはこの事か……………。さて……………。)

横をしばらく見つめる。

視界に映るのは下半身。だがそんなことは全く気にならないのか、少し視線をずらせば「降ろしてくれるの？」と言わんばかりのキラキラとした瞳と目が合う。

「……………ん……………オレも後の二人もサクラのことは知ってるしなあ……………。そのままそこで反省しとくか？」

(……………それもそうだな……………。)

道理は通っているので、サスケは少し納得した。

「カカシ先生！それってば、ふこーへーだぞお！！！」

「アハハ。じょーだんだよ。冗談。」

サクラバカなナルトがビシッと指を突きつけて抗議をすると、カカシは少し笑いながらやっとなとサクラを解放した。

解放されたサクラが嬉しさのあまりナルトに抱きついて、3人がいつものごとくカオスな状況に陥ることになったが割愛する。

「名前は『春野サクラ』。好きな物は沢山あるなあ。嫌いな物は……何だろ??ええっと……趣味も沢山あるかなあ……。」

落ち着きを取り戻して、自己紹介を始めるサクラ。

首を捻って考えてはいるが、実際の内容はカカシとさして変わりない。

「……………夢は？」

カカシは、あのまま本当に自己紹介を飛ばしても良かったかもしれ

ない………と思い始めたが一応先を促した。

「夢か………うーん……。夢は“夢を見つけること”………かも
しれないね??」

楽しそうに笑うサクラのその目は、今まで見せていたどれとも一致
しなかった。

「サクラちゃんならすぐ見つかるってばよ!!!」

「うん!もっつちろん!!一緒に頑張ろうね!ナルト!!!」

「オウ!!!」

ナルトがそれに気付くことなくサクラに笑顔で言葉をかけると、す
ぐに元に戻った。

が、後の二人は違和感を感じて、そんなサクラをじっと見ていた。

「最近ヤケに不機嫌だね？」

既に原形を留めていない肉片がボロボロと光の粒子となつて目の前で消えていくのを気にも留めず、隣に立つ悪友に話しかける。

だが、話し掛けられた方はそれに答えることなく目の前の“物”をじっと睨み続けている。

目の前の自分が刈り取った命に対する嫌悪感。罪悪感。焦燥感のためではない。

“管理者”の……ましてや闇で動く彼らは、命に対して、そんな感情を抱く心など持ち合わせてはいない。

「寂しいの？」

ピクリと眉が動いた。

「最近、5才で神術と魔術が免許皆伝になってから、サクラめつきり来なくなつたもんね〜。しかも、下界では周り男だらけ。何人かは完全にハマっちゃってるのもいるし〜?」

サクラの居る“下界”は彼らの時間軸と同じにしてあるが、管理者と人間の時間の感覚は大きな差がある。彼らにとって一年は人間でいうひと月と同じ感覚だ。

「しかも、こつちからじゃ、もう呼び出せないもんねー。念話も通じないし〜?」

「……変な意地張ってないで、下界に降りちゃえばいいのに〜。簡単でしょ?」

「何故俺がわざわざ下界に降りなきゃならんのだ。馬鹿馬鹿しい。」

「あれ?否定しないんだ??」

戻ろうと踵を返した足がピタリと止まる。

「やっぱりヴェルってロリコ……ぬわ!!!!」

足元から貫くように生えた光の筋を紙一重で避ける。

「オイ！ヴェル！今のは俺でも当たったらタダじゃ済まねーだろ！？」

「ヤケに五月蠅い八工だな。」

「ちよつつつ！……おい！……寄せて！……わかった！……悪かった！……謝るから！……！」

眩い光の嵐が止んだ。
再び踵を返して歩き出す。

「なあ、ヴェル。お前、気になんねーのか??」

生命の危機を感じた直後であるからか、ルオルの口調が昔に戻っている。

「何がだ。」

「お前が作った下界のイレギュラーだよ。5人居るだろ？サクラがチートだからだろうけど、あの3人………なんか匂わないか？『渡り人』だが何だか知らねーけど、俺たちの干渉も受け付けねーだろ？それに、『闇』のほうがデカくなってる。」

「興味ないな。」

「ええ！？気になんねえのかよ！？……あ……いや、まあ、
そうか。今のお前のブームはサク」「何か言ったか……？」……
……いいや。別に何も……？」

「……調べたければ好きにしろ。ただし、アイツには手を出すな。」

「はあ。わかったわかった。もう……本当、ナルトと同じでサクラバ
……ウギヤアアアア……！」

第七班【其の四】

「……………よし！明日から任務やるぞ。」

今考えたところで答えは見つからない。
気持ちを切り替え、カカシは話を進めた。

「ハッ！！どんな任務でありますか！？？」

ナルトはいよいよ本物の“忍者”としての第一歩に敬礼をして意気込んだ。

「まずはこの4人だけで、あることをやる。」

「なに？なに？？」

「サバイバル演習だ。」

少し引つ張ったにしては大した響きではないそれに、サクラは面倒くさそうに、サスケとナルトは怪訝そうに顔を歪める。

「相手は俺だが、ただの演習じゃない。」

「じゃー、どんな演習なんだってばよ!??」

ナルトの言葉に肩を揺らして笑うカカシ。

(フン……………もったいぶりやがって……………。)

「いや……………。ま!ただな……………。俺がこれ言ったらお前ら絶対引くから。」

「ひくう???」

「卒業生27名中、下忍と認められるのはわずか9名。残り18名は再びアカデミーへ戻される……………。この演習は脱落率66%以上の超難関テストだ!!!」

「んな!?!?!?」

カカシの言葉に唾然とするナルト。だが、後の二人の反応は違った。

「フン……なる程な。」

あの卒業試験は下忍になる可能性のある者を選抜するための試験……。

そして、その演習とやらが下忍となるに相応しいか判断する試験……という事か。

どつりで卒業試験の内容が基本忍術なんて……アカデミー生が殆ど合格するような甘い試験なわけだ……。」

「66%以上……ね……。面白そうじゃん。やりがいがあるってもんよ。」

“むしろ楽しみだ”と言わんばかりの二人を見て、ナルトはポツと頬を染めて笑顔になった。

「へへーんだ！！そんなことだろー！と思ってたぜ！！そんなの、このうずまきナルトにかかりゃ〜！！そんな演習、朝飯前だってばよ！！！！」

天に拳を突き上げて元気よく言うナルトに優しい眼差しを向けるサクラ。

嘘つけ……。と内心突っ込みを入れたサスケの口角も上がっている。

が、すぐに元のクールな表情に戻るとサクラを見た。

「サクラ、お前……そんなこと言ってるんのか……？卒業試験であんなにビビってたくせによ。」

「試験と演習は別なの……！」

「フン。どーだかな。」

「なにおう！！サスケ！今すぐ足を出せ！！思いっきり踏んでやる……！」

「……そう言われて足を出すバカがどこに居んだよ、バカ。」

「あ……。」

「サクラちゃん！！オレの足使ってくれていいってばよ……！」

（ああ……ここに居たな……。そんな“バカ”が……。）

ナルトを白い目で見ながら、やはりサクラはいつものサクラだ……
…とサスケは心の中で安堵した。

「あゝ、ハイハイ。そこまで〜！」

空気になりかけていたカカシは、パンパンと手を叩いて3人の意識を戻す。

「まあ、とにかくだ。明日は演習上でお前らの合否を判断する。忍び道具一式持って来い。

あ！それと、朝飯は抜いて来い。……………吐くぞ。」

最後に威圧感を含ませ、3人を鋭い視線で射抜く。

「詳しいことはプリントに書いといたから、明日遅れて来ないよーにー！」

自分が遅れたことは柵に上げて惚けた物言いでプリントを渡すと、カカシはその場から消えた。

「ねえねえ、二人とも。今日の夕食何がいい〜??？」

カカシが消え、そのまま座っている隣の二人を見る。

「え???今日サクラちゃん一緒に食べれんのオ!?!??」

「うん。バイトは元々、昨日までだったからね。」

サクラが言い終わる前に、「やったああーっってばよオ!?!」と飛び跳ねて喜ぶナルト。

「おい…………オレがいつお前らと食べると言った。」

「え?だって今日は記念すべき第七班結成の日でしょ?」

当然でしょ?と首を傾げてサスケを見る。

「それに、明日はカカシ先生とバトルするから…………豚カツにしよつか!?!」

「おお!それイ〜〜〜!!賛成賛成!!サスケと一緒になのは嫌だけど!」

「……………フン!誰がお前なんかと。俺はかえ!」「やっぱ、記念日だし、ここは腕を奮って…………ミネストローネもつけちゃおっかな。」

「

「……………」

「え？じゃあさじゃあさ！！明日はトマトスパゲティだな！！！」

「そうなるね」

ミネストローネを食べた次の日は、残りをアレンジして次の日は必ずトマトスパゲティだ。

ナルトもそうだが、サスケは特にこの2品がかなりの大好物だった。

ピタリと立ち止まったサスケの背中を見てキラリと目を光らせ、悲しい表情を浮かべる。

「ああ…………でも、サスケが来たくないって言うなら仕方ないよね…………」。ナルト。二人でいっぱい、トマトたっぷりミネストローネとスパゲティ、食べよっか??？」

「おおお！！！サクラちゃんと二人きりでえ！？」

「そうなるね??いい??」

「……………もっつつちろん！！オレはぜんっぜんオツケーだってば

「よお……!」

「それじゃあ……ついでに、今から買い出しに行くから、付いて来てくれる?」

「オウ! レッツッゴ……!」

「……待て……。」

クルリと背を向けて歩き出す二人に声がかかる。

「……オレも行く。」

迷いはしたがやはり誘惑には勝てなかったのだろう。妙に長い間があったが、顔を赤くしながらも口から言葉を押し出した。

(……可愛いな……オイ……。)

「エエ……!?! お前は来んなってばよお……!」

「な……！テメエ……！」

「まあまあ、ナルト、今日は3人居ないと　ホラ、二人ともいつつくよ……！」

「あ……！サクラちゃん待ってくれればよ……！」

（また俺が行くこと前提で話を進めてやがる……。）

ナルトはサクラの元へ駆けて行き、夕食を食べに行くつもりで「行く」と言ったサスケも顔をしかめつつ同じ方向へ歩き出した。

+++++

「オツチャン……！セロリとジャガイモとしいたけ……！それとキャベツ……！」

「はいよ！毎度あり！！今日はジャガイモ半額だよ！！」

「オオ！！さすがオツチャン！！おっつとこまえ！！」

「お！！分かってるじゃねーか！ボウズ！！よおし！椎茸も半額だあ！！！！」

オオオ！！と熱い声を上げるナルトと八百屋の店主。

「…………ナルトってああいうトコすごいよね？……………
つて…アレ？？サスケ？？」

隣から返事が無いのを不自然に思って見ると、隣に居たハズのサスケが居なくなっていた。

辺りを見回すと、並べられたトマトを手にとって顔をしかめている。

「……………。」

声を掛けようか…………とも思ったが、近寄りがたい何かがある。

しばらく眺めていると、顔をしかめたままトマトを持ってこちらへ歩いて来た。

「おい。お前が前にアレ作った時に使ってたトマトはこれか？」

「アレって…ミネストローネのこと？」

「ああ。」

「違うよ？あの時は私が育てたヤツ。」

節約のために、自分で栽培している物を何回か使ったことがあった。

「今日も同じのを使うのか？」

「今日は買ったヤツ使おうかなって思ってるよ？」

「……………そうか。」

そう言つと、あのクールなサスケにしては珍しく、少しシユンとした顔になった。

コテンと首を傾げて考える。

サクラが異空間で栽培しているのは、自分に合った物にしようとして、通常のよりかなり栄養価を高くした物だ。

味は普通の野菜と何ら変わり無いと本人は思っていたのだが、どうやらこの少年は違ったらしい。

「……………もしかして、アレが気に入ったの？」

「いや……………少し……………気になっただけだ。」

「それならそうとさえいいのに。」

未だに素直にならないサスケをスルーして、トマトを元の場所へ戻す。

「おい！俺は別に……………！！！」

「男ならハッキリしようぜ??言いたいことはトコトンぶつけるべきだー!!……………って言っても、サスケのそういうトコ、好きだよ?」

「……………。」

「あ！オジちゃん！これもお願いしま〜す！！」

何故か前へ手を伸ばした状態で固まるサスケを放って、サッサと店主の元へと駆けて行った。

(！！なんで……………アイツは……………ああなるんだよ！！)

我に帰って、頭に手を当てて顔を隠す。

顔が熱い。

(チィ……………意味わかんねー…。)

サクラの見せた笑顔が目に焼き付いて離れない。
胸の動悸が早くなつて、さらに顔をしかめる。

「おい！コラア！！サスケエ！！テメエそんなところでポケツと突っ立ってんじゃねエってばよお！！お前も荷物持てエ！！」

「次はお肉屋さんだよー！！！！」

「.....」

香気に手を振る二人組を睨み付け、ポケットに手を突っ込んで歩き出した。

+++++

「うん！いい1日だった！！」

ゴロンとベッドへ寝ころがる。

3人で食べた後、何故か二人が片付けを手伝うと言って、なんだかんだで3人でワイワイやりながら片付けた。

一人になった家は、さっきまでの騒がしさが嘘のようにシんとしているが、充実感に溢れて、サクラの胸は暖かい。

「……………明日からとうとう『始まる』のかあ。」

深い緑の瞳が月明かりを弄ぶかのように夜の冷たい光を反射している。

が、しばらくしてパッと目を見開いた。

「あ！まだプリント見てなかった！」

何とも間の抜けたことを言い、カカシからもらったプリントに目を通す。

目がある一点に釘付けになった。

一旦視線を外して、深呼吸する。

もう一度プリントを見た。

「……………おかしいな。私、物凄く目がいいハズなんだけど。今日はちょっと疲れてるのかな？」

第七班【其の四】（後書き）

）作者の《今だから言える話》

結局書くんかい！！と自分にツッコミながら書きます。

作者がこのサイトを見つけて、入ってちょうど一年くらいが経ちました。

使い勝手や小説の作り勝手やら判らず、この話を書いた時はとにかく書いて予約投稿しまくってました。

ああ何てアホなことを……………（-”-；）

でも他の小説を読み漁ってナルトも読みまくって、“今までの内容書き換えられないのかなあ”。いや、他の作者も書き換えたって書いてるしきつと出来るハズなんだけど…………”と思いつつ、新しい話（侵入者1〜4）を先月頃投稿。（間が空きすぎだろ！！！）

もう一度マニュアルをよく読み返して、やっとやり方が分かって書き直したり割り込ませたり出来るようになりました。

いや、初めての時も読んでたんですけどね……………（T-T）

でも先月、『質問板』というのがないと書かれているのに気付き、今月やっと見つけました。

これからは分からない事があつたら見に行こう。うん。

機械音痴でアホな作者ですが、これからも見守って頂けると幸いです。

白い牙と花びら

サクラが絶叫を上げた頃。

同じくベッドの上にマスクをしたまま寝ころんだカカシはじっと青白い月を眺めていた。

「あれから7年……だったかなあ。」

しみじみと言いながら、教室で手首からぶら下げた少女の姿を思い出して目を細めた。

＋＋＋＋＋

暗部の任務が終わり、火影室に報告に来た時だった。

部屋にノックが響く。

特に急がなくてはならない理由も無いのでそのまま部屋の隅へ下が

った。

「火影様。族の件の報告書です。」

入って来たのは拷問・尋問部隊隊長の『森乃イビキ』。

だが、少し……いや、かなり様子がおかしい。

「……………うむ。ご苦労。」

三代目もそれに気づき、原因が分かっているのか苦笑いを浮かべながら、イビキの手から書類を受け取る。

「やて、どつしたものが。」

それは族のことなのか、それとも目の前の“それ”のことなのか……。

三人の意識がイビキの左足に集中する中、イビキの長いコートですっぽり隠れているのがそんなに嬉しいのか、時折「えへへ」とか「ギューッ」とか「歩いて！歩いて！」とか小さな声が聞こえる。

“被害”に遭っているイビキはというと、こつこつのは苦手なのか、“どうすればいいのか分からない”という顔をして、三代目に視線で助けを求めている。

「うむ……。今日はまだサクラは来て居ないのわ。寂しくて
適わんわい。」

楽しそうに笑いながら言うと、ピンク色のボールが転がり出た。

「おじいちゃん！サクラ来たよ！！」

「お〜！これは驚いた。」

跳ねるように駆け寄って来るそれを膝へ抱き上げる。

「サクラは今日も元気じゃのう。」

「うん！サクラ、元気だよ！！」

（ああ…………アレが噂の『木の葉の小さな台風』…ね。）

膝の上で撫でられながら、アホみたいな笑顔でキヤツキヤと騒ぐ幼い少女を観察する。

「あのねあのね！今日ね！コツソリ入ろうとしたの！それでね！ちよつと怖そうなお兄ちゃんが来てね！でも、優しいんだよ！！サクラ足に乗せてくれたんだよ！それでね！ここに来るまでずっと隠れてたんだよ！ニンジャみたいでしょ！！ね！お兄ちゃん！！………
…アレ？お兄ちゃんが居ない！！」

（逃げたな……。こりゃあ、珍しいもんを見た。）

イビキはサクラが離れるとすぐ、《瞬身の術》で姿を消した（逃げた）。

余程我慢出来ない“何か”があったのだろう。

………簡単に想像出来て少し納得した。

それにしても、あのイカツイ顔のドSなイビキに懐くだけでなく、

（ある意味）逆に精神的に追い込むとは。

幼いながらかなりの“大物”かもしれない。

………別な意味で。

「お兄ちゃん………どこ行ったのかなあ？」

「イビキは忙しいからのう。」

「また会える？」

「おお。会えるとも。」

それを聞いてキラキラと目を輝かせる。

(ああ……………アイツも苦勞してんな……………)

イビキに心の中で合掌し、また出直すか……………と気配を消したまま立ち去ろう(逃げよう)としたのがいけなかったのか。

グイッと服を引っ張られた。

下を見ると、周りに花が飛び交っていきそうなほど嬉しそうに笑う顔がある。

三代目を見ると、申し訳なさそうに笑っていた。

いや、いくら子供でも扱いが甘すぎないか？

「ワンワン！抱っこ抱っこ！遊ぼう！ねえ！遊ぼう！！」

「悪いが忙しい。他を当たってくれ。」

暗部の面が犬をかたどっているためか呼び名が『ワンワン』になっているが、気にすることなく、ポンツと低い位置にある頭に手を置いて穏やかに言った。

が、そのクリクリした緑の瞳に涙が浮かぶ。

「ワンワン、サクラ、キライ??」

「ああ……いや、そうじゃなくてだな……。」

「う〜」。と涙目で見上げながらも服を握りしめるサクラ。

………何となく周りが甘い理由が分かった気がした。

今思えば他にも言いようがあったらろうに、言葉が出てこなくて、イビキ同様に三代目を見た。

「……その件は後で構わん。……すまんが、しばらく相手をしてや
つてくれんか。」

「……………」

「ムムム……！」

サクラは何故か腕に必死でしがみついている。

通りすぎる人々の視線が痛い。

時折、「ああ、今日のはあの人か。」とか「サクラは相変わらずねえ
」。という声が入ってくる。

見てないで助けて欲しい………という切実な思いも虚しく、皆サク
ラに笑顔で挨拶はするものの、微笑ましく笑って去っていく。

「ワンワン、抱っこ、して??？」

腕にしがみついていて少し疲れたのか、腕から降りて抱っこをせが
む。

さっきイビキが居なくなっただためか、腕は握りしめたままだ。

「む！お前、まだそんな格好をしているのか！！早く着替える！」

（暗部の格好してる時に本人の名前呼ぶなよ……………。）

ビシッと指を突き付ける『馬鹿』にもはや呆れて言葉も出て来ない。

「む？貴様！その子は何だ！！まさか……………隠し子か！？」

やっとサクラに気付く『馬鹿』。

ちゃんと名前はがあるが、今は『馬鹿』で充分だ。

「18歳にして隠し子とは……………！！！！見損なつたぞ！カカシ
イ！！！！」

勝手に勘違いして、勝手に雷に打たれたかのようにショックを受ける『馬鹿』に背を向けて歩き出す。

「待てい！！逃げるのか！！！！」

「お前といったらキリがないでしょうが。第一サクラが怯えてる。」

ギョツと小さな手で服を握りしめ、プルプルと震えるサクラの目には涙が溜まっている。

まあ、あんな顔で大声で叫びながらいきなり登場されたら、小さな子がこうなるのは当たり前だろう。

まだ何か声が聞こえていた気もするが、サクラを撫でてその場を後にした。

「ワンワン！肩車！して??」

「サクラ。『ワンワン』じゃなくて『カカシ』でしょーが。」

しゃがんで視線を合わせ、頭に手を置く。

あれから一週間。俺もかなり懐かれました上、どっかの濃い誰かさんのおかげで、俺が『ワンワン』だということもバレてしまった。

サクラも良くは理解していないし、三代目も問題視していないので気にしていないが、今ではどちらの格好でいても、視界に入ろうも

のなら絡まれるようになってしまった。

イビキも細心の注意を払ってサクラと鉢合わせしないようにしているが、この間も会ってしまったようで里で噂になっている。多分これからも会う度に噂が広がるのだろう。

「カカシお兄ちゃん！」

「ヨシ！良く出来ました。」

ニッコニッコ顔の頭を優しく撫でてヒョイと肩に乗せてやる。

「うわあい！キラキラ〜！サラサラ〜！！」と俺の髪の毛を堪能するサクラ。

これが最近の彼女のブームらしい。

好きなようにさせたまま、任務を受けに歩き出した。

「そういうことで、だな、サクラ。俺は今から任務に行かなきゃならん。」

周りの視線は全く気にせずに堂々と入って任務の紙を受け取り、三代目から2、3説明を受けた。護衛任務。既に任務に就いている班と合流してサポートに当たれとのことだった。

その間、ずっと髪の毛と戯れていたサクラが聞いていたかは定かでないが、何時までもこうしているわけにもいかないので、そう切り出した。

「サクラも一緒に行っちゃダメなの??」

「そ！コレばかりはダメ！」

「ちゃんとケガしないで帰って来る??」

ダダをこねると思っていたが、サクラは予想に反してそんなことを言った。

「サクラが良い子して待ってくれたら、ケガしないで帰ってくるよ。」

暫し呆気に取られたが、ニッコリ笑ってそう返した。

「分かった！！サクラ良い子して待ってる！！」

言つなり、ヨイシヨヨイシヨと体から降りると、三代目や任務受け付けの者達がいる机の下に潜り込んで、三代目の膝の上によじ登った。

「カカシお兄ちゃん！行ってらっしゃーい！！」

フリフリと小さな両手を動かし、可愛らしい声を出すサクラ。

うん。これは……………かなり恥ずかしい。
顔をマスクで隠しておいて良かった。

「ハハハハ……………。んじゃ、行ってくるヨ……………」

頭をポリポリ掻きながら任務へ向かった。

そんな感じで過ごしていたが、サクラは5歳になったある日から、パツタリ来なくなった。

それからというものの、カカシはサクラと会っていない。

それが何を意味するのか……………。

里では相変わらずサクラの噂が絶えなかったため、少し成長したのかとも思ったが、

着物のような上着とズボンを履いて、何とも髪の毛とのバランスが悪い服を着ていたし、教室でピコハンマーなんて使っていたので、その辺りはかなり怪しい。

と、いうより甘えん坊でなかっただけで、根本的にはあまり変わっていない気がする。

だが……………

『夢は……………夢を見つけること……………かもしれないね??』

あの時に見せた表情は、子供らしさが欠片もなく、何を考えているのか解らなかった。

今まで多くの人間を見て来たが、それらの表情と照らし合わせても一致するものは無い。

憎しみでも嘲りでもない。かと言って暖かさも彼女らしい明るさもなかった。

一つ確かなことは、アイツにあんな顔は似合わない………ということ。

「ま！何はともあれ、明日、だな……。」

呑気に言いながらマスクを外し、脱衣所へ向かった。

漆黒の冷たき『流れ』はねじ曲げられ小さき炎は熱く紅く染まる。

『流れ』はその激しさを増し黒き『闇』へと堕ちていく。

白い牙と花びら（後書き）

はい、今回はカカシ先生の回想でした。

サクラ、何てことを……………（-”-;）

他の作品でも、原作の流れが書かれていますので、原作と同じ所を書くかどうかは迷いましたが、やっぱり書きます。

原作を読んでいない方のため、というのもありますが、小説としての流れを崩さないため、というのが主な理由です（<―>）。

しつこいというか、まどろっこしい部分もあると思いますが、その辺りはご理解頂けると幸いですm（―）m

H23・11・1：サクラとカカシの接触していた時期を修正。

下忍認定試験【其の壱】

「ふああ〜」。昨日ちょっとやり過ぎたつてばよ〜……………」。

大きな欠伸をしながら、まだ薄暗い道を歩く。

ナルトは昨日、家で「カカシ人形」とのイメージトレーニングを念入りにしていた。

動かない人形相手にそんなことをして意味があるのかは疑問だが、やらないよりはマシなのかもしれない。

もう一つ大きな欠伸をして、目をこすった。

演習場へ着くと、あの柔らかいピンク色が目に入って来た。

ニコツと笑って駆け出そうとしたが、すぐ立ち止まる。

その視線の先には彼のライバル、サスケが居た。

集合場所の丸太の所へ行こうとせず、ボンヤリと木に寄りかかっているサスケを観察する。

その視線は先の自分と同じ方へ向けられていたが、表情があのか

ルな表情じゃない。

自分と同じで眠気がまだ覚めてないのか？とも思ったが、じい……
…とサクラを見つめているその顔は見ててムカついてくる物がある。

(……………そお〜だ！いいこと思いついた！！！)

サクラと二人きりになるのが気まずくて、木の影から眺めていた。

昨日から何かがおかしい。

月明かりに照らし出されたどこか妖艶とも言える姿。柔らかい感触。
温もり。

そして昨日見せたフワツとした暖かい笑顔。

(サクラ……………)。

悶々と考えていたのがいけなかったのか、上から縄が落ちて来たのに反応が遅れた。

そのまま縄が体に絡み付く。

「デメエ!!!ナルト!!!!!!」

「クソツ!!!大人しくしやがれ!!!!!!」

十十十十十

太い丸太が三本立てられているそこへ背中を預け、眠気と格闘しているサクラの元へ、黒髪の少年が歩み寄って来た。

「よお。サクラ」

「んあ。おはよう。サスケ。」

(……………しまった!!!こっからどう切り出すか考えてなかったあ
——!!!)

何も考えずに、思い付きで実行に移してしまったサスケ(?)は内

心焦った。

「サクラ…………お前に一つ聞いときたいことがある。」

とりあえずサクラの隣の丸太の前に腰を下ろして、そのまま本題に移ることにした。

「ナルト…………どう思っ？」

「んん？…………そおだなあ…………。」

サクラは少し考えるように、空を見上げた。

「明るくてあったかいな。鈍感で子供っぽくて負けず嫌いで、でもそこが弟みたいに可愛い。」

（お…弟…………。）

サクラの言葉に少し凹むサスケ（？）。

「でも…………。」

「ものすごく純粋で。努力家で。どこまでもまっすぐで……。」

「絶対“曲がらない”。強い奴だと思う。」

フワリと微笑んだサクラの髪が風に揺れ、しばし目が奪われる。

「もし……。」

「もしもナルトが……“化け物”だったら……サクラはどうする?」

少し震える声を絞り出すように口から吐き出す。

彼女が自分が“化け物”だと知ったら……ずっと彼女は自分のそばに居てくれた。

それでも不安は拭いきれなかった。

だから直接聞きたかった。

じっと彼女の深い緑の瞳を見つめる。
心臓が口から飛び出そうだった。

「……………？何言ってるの？ナルトはナルトでしょ。何も変わらないよ。みんなね。」

瞳にはいつもと同じ光がキラキラと輝いていた。

「そう、か。」

サスケに化けた自分の手の平をじっと見てギョツと握り拳を作った。

（サクラちゃん……………ありがとう。）

スツと立ち上がって歩き出す。

「どこいくの？」

「その辺を歩いて来る。」

その頃……………。

縄でグルグル巻きになっていたサスケが、やっとのことで縄から抜け出した所だった。

(チィ！油断した！ナルトの奴、俺に化けて一体何を……………。)

心ここに在らずだったせいか、いつもの彼なら決してしないような失敗をしてしまった。

見ると、既に目的は果たしたのか、ナルトが変化を解いてサクラの元へ歩いて行く所だった。

頭に血が登っていたせいで、体が先に動いた。

「オイ！コラ！テメエナルトオ！！俺に化けて何をした！！」

「ウワツ！サスケ！？べ、別にちょっと面白そうだからやってみただけだってばよ！！」

「ウソつけ！このウストラトンカチが！」

「ちょっとサクラちゃんと話を……………ア……………」

ナルトにとってもサスケにとっても、サクラには見られたくない場

面だ。

二人の居る所は、丸太の所からはよく見える位置………というよりサクラの目の前。

ピタリと動きを止めた二人は、ギギギッと首を回してサクラを見る。

「………って！！思いつきり寝てるー！！！！？？」

「ZZZZ………」

「………」

十十十十

「まだ来ないねえ………」

15分程して目を覚ましたサクラがダルそうに呟いた。

「もう1時間だつてばよ…。」

「……………」

「時間もちょうどいいし、朝ご飯食べよっか。」

言うなりリュックを漁りだすサクラ。

「え？え？でもさでもさ、カカシ先生は“食うな”って……………」

「ゼリーだから、吐いても大丈夫！！それに、胃液だけよりもマシでしょ。（カカシ先生来るのももつと後だし。）」

「オオ！！さすがサクラちゃん！！」

（何が“大丈夫”なんだよ……………」

内心ツツコミを入れながらも、ナルトに釣られるようにサスケも食べ始めた。

「聞いてばよ！サクラちゃん、コレ何入れたの？」

「フルーツたつぷり。」

ウマウマと食べるナルトから視線をずらし、無言で食べるサスケを見る。

「あ、納豆嫌いなサスケのために、サスケのだけ納豆入りだけどネ。」

「ゲホッツゴホー!! テメ!! 何して!! ゴホ! ゴホ!」

「冗談だよ。」

サクラの言葉で途端に咽せるサスケに、シレッと言いながら爽やかな笑顔を向けた。

「ギャハハハ!..ざまあねーってばよ!..!」

「テメエ.....よくも.....。」

「いひゃいひゃいひゃい!..!」

サクラの頬をムギユツと引っ張りながら、やはりさっきまでのモヤモヤは、ただの気のせいだったと結論付けた。

「ひゃっひゃひえひえほひゃほひえ!!!（やっぱりサスケはムカつく!!!）」

「フン。何て言ってるかわかんねーな。」

「いい加減離せよ！サスケエ!!!」

下忍認定試験【其の貳】

あれから既に3時間。

予定の集合時間からは4時間半が経過している。

が、『遅れないよーに!』と言った無責任な大人は未だ姿を見せない。

「ああ〜〜もおお〜〜!!昨日といい今日といい、何なんだってばよお!〜!」

すっかり目が覚めたナルトが痺れを切らして、だいぶ高くなった太陽に向かって叫んだ。

(後40分か……………。)

サクラはボンヤリ空を見上げていたが、何か思いついたのかニヤリと笑った。

「ナルト。こんな時は、アレしかない。」

「アレって??」

「あの太陽に向かって今の気持ちを叫ぶんだ!!!」

ビシツと太陽を指差して威勢よく言うサクラに、ナルトは「オオ!!!」と意気込んだ。

サクラの突拍子の無さとアイディアのアホらしさはいつものことだ。サスケは一瞬チラリと横目で見てすぐ視線を外すと、相手にするこ
となく無言で……………

「カカシ先生のおたんこナス————!!!」

「カカシ先生のノロマー————!!!」

「マスクで顔隠してかっこつけんな————!!!」

「サクラちゃんどんな関係なんだってばよ————!!!」

「小さい頃、ちょっと世話になっただけだ————!!!よくは覚えてないけどお————!!!」

「それ充分関係あるってばよ————!!!んじゃ、カカシ先

生とあんなことやこんなことしたっていつの……!?!?」

「あんなことやこんなことってどんなことだぁ……!?!?!」

「………うるせえ!?!?! 叫ぶのか会話するのかわつちかにしやがれ
「!?!?!」

………いることが出来ずにとつとつツッコミを入れた。

「サスケもその調子で叫べ……!?!?!」

「やらねーよ!?!?!このウストラトンカチ!?!」

「何だかんだで叫んでんじゃねーかよ……!?!?!」

「てめえら………いいかげんに………。」

「モテるからっていい気になるな……!?!?!」

「いつつもサクラちゃんのほっぺ引っ張ってんじゃね……!?!?!」

「納豆嫌いなクセにクールぶるなーーーー！」

「サスケのバツキャローーーーー！！！」

(……………さっきから一体何やってんだアイツら……………。)

丸太の向こう側の石碑の前で、何かを噛み締めるような表情で物思いに耽っていたカカシは沈んで行く思考が中断され、何とも言えない表情を浮かべた。

木々に隔てられた向こう側では、サスケの堪忍袋の緒が切れ、また3人がてんやわんやしている。

ふと足元を見ると、だいぶ影が短くなっていた。時間でいうと、ちよūdō11時をまわったところ……………か。

(ハア……………。やれやれ……………。)

もう一度石碑を振り返ってしばし眺める。

周りの木が影となり、暖かい光がスポットライトのように石碑を照らし出していた。

(さてっと……………。んじゃ、そろそろ行くとしますかね……………)。

石碑に背を向けて歩き出したその瞳にも明るい光が射し込んでいた。

+++++

「や〜。諸君。おはよう!」

陽気に手を挙げて挨拶するカカシ。

「まじっ!」人にちは『だってばよ!』

「……………5時間10分か…。」

「……………。」

「いやあ、今日は目覚まし時計の調子が悪くてな??」

「そんなレベルじゃねーってばよ!!!」

ナルトのツツコミと二人の批判的な視線を華麗にスルーして、丸太の上に目覚まし時計を置いて12時にセット。

そして赤い紐に結ばれた二つの鈴を取り出し、リンツと鳴らした。

「ここに鈴が2つある。12時までこれを俺から奪い取るのが課題だ。もし時間までに俺から鈴を奪えなかった奴は昼飯抜き!!!
あの丸太に縛り付けて目の前で俺が弁当食うから。」

それを聞いた途端、サスケとナルトのお腹が鳴った。サクラ特製のゼリーを食べたとはいえ、所詮ゼリー。しかももうすぐでお昼時だ。成長期でもあるので、腹が減るのも仕方ない。
だが確信犯であるカカシはそれにも留めずに眠そうな目で説明を続ける。

「鈴は一人一つだ。
鈴は2つだから、必然的に一人は丸太行きになる。……で！鈴を取れなかった奴は“任務失敗”ってことで失格！
つまり、この中で最低でも一人は学校へ戻ってもらうことになるわけだ。」

二人に緊張が走る。
だが、サクラが不意に手を挙げた。

「ん？どうした？サクラ。」

「カカシ先生。さっきから気になってたんだけど、その時計、ちゃんと鳴るの??」

「ああ……。それか?……………来る途中で直して来たから大丈夫だ。」

「そうなんだ。」

思考がズレてる上に明らかかな嘘を信じるサクラに、サスケはため息をついた。

「ま！そういうわけだ。忍具でも何でも使ってもいいぞ。俺を殺す

「気で来ないと取れないからな。」

「確かに縄ほどいてたけど強そうに見えねーってばよ!!武器なんか使っちゃうってーのかあ〜??」

相変わらず気の抜けた顔でどこか頼りないせいか、ナルトは胡散臭そうにカカシを見た。

「世間じゃさあ………実力の無い奴に限ってホエたがる。ま………」
『ドベ』はほっといて、『よいスタート』の合図で………。」

言い終わる前に、『ドベ』に反応したナルトが咄嗟にクナイを取り出して投げる動作に入る。

……が、次の瞬間カカシはナルトの背後に立ち、その手を持って後頭部にクナイを突き付けていた。

「そう慌てんなよ。まだ『スタート』は言っていないだろ?」

全く見切れなかったその動きに、サスケとナルトは武者震いし、サクラはめんどくさそうに顔を歪めた。

「ま！俺を殺るつもりで来る気にはなったようだな。………んじや、始めるぞ。よ～～～い……………」

若干一名、やる気になったのか怪しいのがいたが、カカシの声に三人共腰を落とす。

「スタート!!」

（……………サクラの奴、ナルトに釣られて出てこねーだろーな……………。）

眼下でのナルトとカカシのやり取りに、木の枝の影に隠れたサスケは不安から辺りに目を走らせた。

「サクラちゃんの悪口言う奴はオレが許さねーってばよ！！そりゃあちよつとは水着姿とか浴衣姿とかスカート履いて欲しいとか思うけど！！！！」

ナルトは無意識のうちに本音を漏らしながらカカシに向かって駆け出した。

カカシは自分のことは棚に上げて、そんなナルトを白い目で見つつウエストポーチを探る。

ナルトの動きが止まり、咄嗟にカカシと距離を置いた。
忍は基本、忍具や巻物をこのポーチに入れておくからだ。

「ま……………何はともあれ……………お前には『忍戦術の心得其の壱』……………
『体術』を教えてやる。」

(体術つて……忍者組み手のことだよな……？なのに……武器を使
うつもりか？)

ナルトが息を呑んで見つめる中、カカシが取り出した物は武器……
……ではなく本だった。

『イチヤイチャパラダイス』という、「どんなパラダイスだ」とツ
ッコミを入れたくなるような題名のその本の裏表紙には18禁のマ
ークがある。

余談ではあるが、この本はカカシが18歳の誕生日から読んでいる
彼の愛読書で、この世界でも密かな人気を誇っている。上中下巻と
出ており、さらに『イチヤイチャバイオレンス』という続編も出て
いる。愛読者の間では『イチヤパラ』で親しまれており、上巻は最
近完全映画化までされ、人気はさらに急上昇しているとか。閑話休
題。

「どうした？早くかかって来いって。」

「いや、でも……あのさ？あのさ？？何で本なんかだしてんの？」

「何でつて……本の続きが気になってたからだよ。別に気にすんな。
お前らとじゃ本読んでても関係ないから。」

「……！！ボッコボコにしてやる！！！！」

しばらく間があったが、言葉の意味が分かったのか逆切れして飛びかかる。

だが、カカシは彼の攻撃を本から視線を外すことなくあしらっていく。攻撃が全てかわされ、さらにヤツキになるナルト。

がむしゃらにパンチやキックをしているとカカシの姿が消えた。

「・・・アリ??」

「忍者が何度も後ろ取られんな。バカ。」

拳を前に突き出したままポカンと口を開けた時、背後から声が掛かる。

咄嗟に振り返ろうとするが「遅い」という言葉が耳に入った。

刹那。

「木の葉隠れ秘伝体術奥義！！『千年殺し』————！！！！！！」

尻に鋭い痛みが走り、綺麗な放物線を描いて近くの川へ落っこちた。

「……………俺の周りは何で“ああいう”ヤツらばっかりなんだ……………」

奥義とか言いながらただの“ものすごい浣腸”をお見舞いする教師と飛んでいくナルトを見て、サスケは頭痛そうに呟いた。彼がこの頭痛から解放されるのはもう少し先のこともかもしれない。

(ん)。サクラはドコほつつき歩いてるのやら……………。

一仕事終えたカカシはまた読書をしながら、サクラの匂いを探した。試験が開始してからサクラだけ完全に匂いが消えているのだ。

カカシは三代目の言葉通り、犬並みの嗅覚を持つ。

いつもの状態なら位置の特定は難しいものの、近くに居るか居ないかくらいは分かる。

が、その頃、サクラはカカシの予想の斜め上の場所で身を隠していた。

「ツツプフフ！！！」

ナルトとカカシのコントを見て吹き出していると、光がはじけてナルトが現れた。

だが彼は目の前に人が居るのに気付くことなく、水を押しやり手裏剣を投げた。

手裏剣はユラユラと光の射し込む天井に波紋を広げ、揺れるカカシへと飛んでいく。

そう。サクラはそもそも地面の上ではなく川の水の中にいた。

サクラは肉体と精神の融合の結果から得た桁外れな身体能力を生かし、一気にここまでジャンプし、波紋を立てることなく静かに中へ身を隠したのだ。

匂いで追えるわけがない。

チャクラの5属性全てを合わせること可能なため、周りの光を操作して姿を見せなくすることも、お手のものだ。

息はしなくても問題ないし、水に濡れるという心配も無いが、チャクラで水を操作して、直接触れないようにしている。

腐っても根は日本人。やはり水に揺られながら待つというのは色々と抵抗があるのだろう。

少し離れた所では、カカシが本を読んだままナルトの手裏剣を指でクルクル回していた。

「ブゴアーーー！」

悔しそうに声を上げるナルト。水の中なのでゴボゴボという音にしかなくなっていない。

だが次の瞬間目つきを変えると、指を十字に交差させて印を組んだ。

「ホラ、どうした？昼までに鈴取らないと1人だけ昼飯抜きになるぞ〜。」

ザバツと川から上がって来たナルトを挑発するカカシ。

「ンなの分かってるってばよー！」

「火影越すって言ってたわりに元気ないね。お前。」

「くっそお！！腹が減っても戦は出来るぞ！！さっきはちと油断しただけだってばよお！！本番はこっからだあー！！！！」

強がってはいるものの、空腹を訴える腹の虫のせいで説得力が0になっている。

「世間じゃ油断大敵って言うんだよね。」

クルリとナルトに背を向け、歩きながらまた読書に耽る。

(今だ！！！！)

ナルトがギロリと目の色を変えて立ち上がると、背後の川から7人のナルトが飛び出してきた。

「へへーん！！お得意の《多重影分身の術》だ！

油断大敵！！！！今度は1人じゃないってばよオ！！！！」

(実体化した分身だと……………?)

術の1つもまともに使えなかったあのナルトが使った術に、サスケ

は驚きを隠せなかった。

「ま！お前の実力からしてその術、1分が限界つてところだろ。」

刹那。影分身という上忍レベルの術に顔色一つ変えなかったカカシは背中に軽い衝撃を感じた。
本を読んでいたため反応が遅れ、そのまま後ろからしがみつかれる。

「へへ！忍者つてのは後ろ取られちゃダメなんだろ…！カカシ先生つてばよオ！！」

「1人だけ川下からコツソリ上がって、裏手に回り込んだんだつてばよ！！」

「さっきケツやられたぶん！キッチリ返してやるつてばよ！！」

ナルトが拳を振り上げる様をカカシは何とも言えない目で見ていたが、ナルトはそのままパンチを繰り出した。

しかし次の瞬間ドカツと殴られたのは“ナルト”。
カカシの姿はどこにもない。

「いつてえ!」「お前つてばカカシ先生だな!変化の術で化けてんだろ!?!」「お前こそ!」「いや、お前だろ!?!」「俺じゃないつてばよ!」

「お前カカシ先生と同じオヤジの臭いすつぞ!?!!」「するかあ!?!」

カカシが自分に化けたと勘違いして揉み合いになる。

若干コントのようなやり取りになっているが、本人(?)達は至って真面目だ。

しばらくして互いの顔がボコボコになってから、術を解けばいいということに漸く気が付いた彼らは1人ずつ煙となって姿を消していく。

煙が晴れたそこにあったのは、腫れ上がった顔で乾いた風に吹かれる1人の金髪少年の姿だった。

(今のは《変わり身の術》だ。バカ。)

《変わり身の術》。動物や植物と己の身を素早く入れ替え、相手に攻撃を受けたかのように錯覚させ、その隙を突く術であり、アカデミーで習う基本中の基本忍術だ。

(教師のヤロー……………ナルトの分身体一匹と入れ替わって、ナルト

の攻撃自体を利用しやがった……………。

眼下では、落ちていた鈴に元氣を取り戻したナルトが畏に掛かって逆さ吊りになっていた。

そこへカカシが現れて呑気に説教をしだす。

ナルトとやりあっている間も見せなかつた隙を見せるカカシにサスケは眉を潜めた。

（フン……………。ワザと隙を見せてこつちの居場所を特定しようってか……………。そんな手に乗るかよ。ナルトじゃあるまいし。）

昨日の教室での奇襲の時や今日見せた動きから推測しても、カカシはかなりの実力者と見ていい。そんな人物がたかが説教で隙が出来るとは考えにくい。つまり、これは畏だ。

サスケは静かに姿を消した。

（とりあえず、大方の戦法は把握した……………。

……………。サクラの奴ちゃんも鈴取りに行く気あんだらうな……………。まあ、時間はまだ有る。とにかく早いとこ鈴取って探すか……………。まずは下準備からだな……………。）

意外と心配性なサスケがそんなことを考えながら、ちょうどいい場所を探している頃。

当の本人はというと……………

（ああ。キラキラ光ってて綺麗だなあ……………。ところで、カカシ先生の『オヤジの匂い』ってどんな匂いなんだろ……………。気になる……………。
ああ、でも取りに行くのめんどくさいなあ……………。いつそのことずっとここに居ようか……………。
癒やされるし……………。）

水の中の景色に見とれつつ、若干の引きこもりと化していた。

下忍認定試験【其の参】（後書き）

今回も読んでくださった読者様、本当にありがとうございます）！

コメディイ好きな作者にとって、ナルトのこの場面は外せませんでした。（＜―＞）
すみません（―∴）

この小説の題名……あまり小説の中身としっくり来ないので、い
いのが思いついたら変えるつもりです。

ご意見、感想お待ちしておりますm（―）（―）m

下忍認定試験【其の四】（前書き）

題名変えました。

それなりに納得いくものにしたつもりです。（^―^・:）

ま…まあ、何はともあれ鈴取り合戦の続きです）、、ゞー！！

一気に三話投稿させて頂きます。

べしづぞぞ E（―） E

下忍認定試験【其の四】

「今までドコほっつき歩いてたの。」

「ちゃんとその辺に居たよ？カカシ先生。」

少し狭い空き地でカカシとサクラが対峙していた。

サスケやナルトが居た位置からもそう遠く離れていない位置だ。

いきなり匂いが現れた事についても聞きたかったが、今は時間も迫っているし、それよりも引かかることがあった。

「ん〜……。 “先生” ってのはなんかしつくり来ないから、今までのように呼んでくれていーいよ。」

そう、サクラの呼び方だ。

今までのことがあるので、今“先生” と呼ばれるのは何か落ち着かないものがある。

「……………わかった。カカシお……………お……………お……………お……………う……………あ……………アニキ……………。」

二人の間に乾いた風が吹き抜ける。

(あゝ…………こりゃあ…………ちょっと時間かかりそうだな……………)

久しぶりに会ったからなのだろうが、口から咄嗟に出た言葉はサラには恐ろしいほど似合っていなかった。

「ん……………やっぱ今は『先生』でも構わんよ……………。今はな。」

ここは妥協することにして、様子を見ながら直させていくことにした。

「え？アニキじゃダメなの……………??」

「却下。」

「何で？カツコイイのに……………」

(お前のその可笑しなセンスは一体どこから来たんだ……………。額宛ての位置と髪型は似合ってるのに……………)。

カカシは頭痛を覚えながら「却下。」とバツサリ切り捨てた。

余談だが、サクラは額宛てを原作同様、カチューシャのように頭に着けている。

「……………ムウ。わかったよ。……………ところで、カカシ先生。ナルトとサスケは？」

「ああ、サスケはさっき埋めてきた。ナルトは今頃また罫に掛かっている頃だろ。」

「……………サスケを埋めたの？」

「ああ、大丈夫だ。ちゃんと頭は出てるから。」

「じゃ、頭より下が埋まってるってこと??？」

「そゆこと。」

カカシの罫にはハマらなかったものの、やはり相手は里で『現役最強』と唄われる上忍。

いくら天才とはいえ、アカデミーを卒業したばかりの下忍が1人で

向かったところで、相手になどなるはずがない。

「待ちなさいヨ。ドコ行ってんの。」

いつぞやのハンマーを持って歩き出したサクラの肩を掴んで止める。

「離せ！カカシ先生！私は行かなくちゃいけないんだ！！埋まったサスケをコレで叩いて、埋まってるトコを写真に撮っていつもの仕返しを……………！！！！」

「それより他にやることがあるでしょーが……………。鈴は取らなくていいの？」

「あー！」と我に帰るサクラに肩を落とした。

＋＋＋＋＋

「まあ、サスケだってアカデミー出たばっかだもんね。“1人”で行って上忍に勝てるわけないよ。」

気を取り直して改めて対峙すると、サクラがそんなことを口にした。

「んじゃ、お前はどーすんの？」

「もちろん、私も1人でいくよ。

……だって二人には合格しなきゃいけない“理由”があるからね。

「

一体何が言いたいのか……。カカシは探るような視線を送った。

「この試験の目的は『下忍を選抜する』こと。つまり私たちにとっては、忍になれるかどうかの試験。」

1人は夢のために、1人は目的のために、絶対に合格しなければならぬ『義務』があった。『使命』があった。

だからこそ、この試験の“合格条件”を達成するために1人で立ち向かった。

いや、1人で行かざるを得なかった。

己の力で成し得なければ、彼らにとってそれは本当の意味で“忍になれた”ことにはならないからだ。

「…………でも、この試験の“合格条件”は鈴を取ることじゃない……そうでしょ？カカシ先生。」

親指をガリツと噛んで左手の甲に血を付けた。

刹那。サクラの姿が消える。

咄嗟に腕を交際させて頭上から振り下ろされる蹴りを受け止める。

(…!!速い……!!)

しかも重い。彼女の体重からは到底考えられない威力だ。

クルリと回転して着地するとピンクの髪がキラキラと舞い上がる。

「“忍者は裏の裏を読み”…………。そもそも、基本的に任務は複数で行う。」

淡々と話す間も攻撃は止まない。

「…………他のメンバーと如何に上手く連携出来るか…………それが

任務の達成を大きく左右する。……………つまり……………」

繰り返される拳を受け止めようとすると、サクラの姿がブレた。

「……………」

咄嗟に横に飛ぶと、立っていた場所を中心に「ドゴォッ」と地面が割れ、めくれ上がった。

(……………なんつゝ馬鹿力だ……………)。

「『チームワーク』。それを見るのが目的だよな？
鈴が二つしか無いのは、自分の利害に関係なく、目的を達成するためにチームワークを優先出来るかどうかを見るため。」

「……………正解。」

地面に腕を突き刺したまま、楽しそうに笑うサクラに少し冷や汗を流しながら答えた。

「いつから気づいてたんだ？」

「始めからだよ。“これから3人で一緒にやってく”ってイルカ先生が言ってたもん。だとすれば……………この試験が本当に先生の言う通りの合格条件なら、スリーマンセルを組んできて、1人だけ落とすなんて回りくどい真似しないでしょ。アカデミーの卒業試験のレベルを高くして、選ばれた精鋭でチームを組めばいい。でも、そうしなかった。

だから、この試験は個人技能の見るものじゃない。だったら、アカデミー卒業したての下忍達相手に見るものといったら『チームプレー』以外に無いよね。」

「試験官の立場で考えればすぐに分かることだしね。」と当たり前のように言い切るサクラ。

「そこまでわかってて、何で二人に話さないんだ？」

「だって、先生の“目的”は違うでしょ??」

キョトンとこちらを見つめるサクラの口から発せられた言葉にカカシは目を見開いた。

「先生も、こんな条件下で二人が協力するなんて思ってたでしょ?」

ゆっくりと立ち上がると、左手からパラパラと破片が落ちる。

「だから先生の“目的”は私たちの戦闘スタイルとタイプを分析すること。」

「……でも、チームワークも外せないよね？ということは、この後、改めてチームワークを見るってことになるのかなあ……。」

笑顔で話しているが、隙が無い。

「でも、先生が“見たい”のはタダのチームワークじゃないよね。きっと。先生にとっての“チームワーク”。」

じっと見つめるその瞳は、己の全てが包み込まれてしまいそうな程に深い色を帯びている。

「……………何でそう思うんだ……………？」

「だって、先生、優しいから。」フワリと笑いながら差し出した右手の拳を少し開くと、チリンツと澄んだ音が楽しそうに響いた。

下忍認定試験【其の五】

「よっしゃあ！ーんじゃさっそくサスケの所……………にいい??？」

「待て。サクラ。色々と聞きたいことがある。」

再びハンマーを取り出して勇んで歩き出すサクラの腕をつかむと今度はこちらの力が強かったのが、サクラがバランスを崩して寄りかかる形になった。

「あ！そっか！忘れてた。はい！鈴！」

“早く行きたい”という気持ちで頭がいっぱいなサクラは上を見上げて視線を合わせると、的外れなことを言っただけ鈴を差し出す。

「いや、違うから。それよりお前、誰かに教わったのか？」

『木の葉一の親バカ』と言われる父のナズナは、蛇の目型の家紋に象徴される幻術使いの『春野一族』。母のスミレは研究班に所属しており、薬や薬草を始めとして様々な研究に着手している頭脳明晰なくノ一。

二人とも確かに上忍であるし、木の葉の中でも優秀な部類に入るが、

「さて、と、この演習についてだが……………」

「オイ……………。それよりテメエ……………サクラに何をした。」

「そうだそうだ！！一体ナニしたんだってばよ！？このマスクスケベ……………」

終了時間から10分後。

丸太の場所には、漸く這い出たもののタイムリミットになってしまったサスケ。

石碑の上の弁当を見つけ、先に隠れて食べようとした所を見つかつて丸太に縛られたナルト。

そして物凄く上機嫌なカカシの姿があった。

問題はカカシの頭の少し上の位置。

既に言葉を発する気力を失っているのか、二人が現れた後も沈黙したままだ。

だが、その息は上がり、顔を赤く染めて悩ましげな表情を浮かべる目は濡れ、時折小さなしゃっくりが漏れている。

ナルトが見つかって縛られている時からカカシに肩車されていたが、サスケが現れてからもずっとこの状態が続いている。

勘違いするなと言う方が無理だ。

「まさか！もしかしてサクラちゃんとキスとかキスとかキスとかしちまったのかよお！！！？？？」

「同じこと何回も言うんじゃないよ！このウスラトンカチが！！テメーの頭にはそれしかねえのか！！」

ナルトの頭脳の8割は覗きのタイミングと場所のポイントとお色気の術について。後の2割は影分身と、影分身の術とお色気の術を併用した《ハーレムの術》のみ。

アカデミーで習った知識はもちろん、“大人な”知識なんて物は無い。

「あゝハイハイ。静かに。とりあえず、お前らが思ってるような

「ことはやってないから。」

「嘘つけ!!!!」

「.....おろして.....」

二人の声に漸く我に帰ったサクラがジメジメとしたオーラを纏って
いたため素直に下ろしてやる。

「サクラちゃん！ナニされたんだってばよ！やっぱりキスされたのか
あ!?!」

「んなわけないデショ.....ダイジョウブ.....ちょっと心が折
れたダケダカラ.....」

「それ全然大丈夫じゃねーってばよ!!!!」

「.....」

（ん〜.....ちとやりすぎたか。）

座った後もどこか遠くを見つめるサクラに一瞬そんな思いが頭をよぎったが、カカシはそれを涼しい顔で水に流して口を開いた。

「ま！とにかくだ。お前らはアカデミーに戻る必要も無いな。」

何とも言えない空気が漂う中、カカシの言葉に二人の顔色が変わる。サクラも気を取り直したのかカカシに視線を移した。

「じゃあさ！じゃあさ！ってことは3人とも……………！？」

「……………そう。……………“二人”とも……………忍者を“止める

”……………」

下忍認定試験【其の六】

「昼飯にわしを誘って何が知りたい。」

カカシが重い判決を下したのと同じ頃。

詰め所の一角で三代目とイルカが向かい合って食事をしていた。

「ナルト達第七班の上忍……どんな先生なんです……？ 厳しい方なんでしょうか？」

目の前の人物の言葉に少し申し訳なさを滲ませながら問うイルカ。

「……………カカシのことが……………。ホレ。」

カカシの今まで担当した下忍の合否リストが差し出され、それを開いた彼は目を見開いて言葉を失った。

(……………そ……………そんな馬鹿な……………！！ 全くの……………ゼロだと……！！???)

「忍者止めるってどーゆーことだよお!!??」

重い空気を押しつけるようにナルトが声を上げた。

「そりゃさ！確かに鈴とれなかつたけど！！何で“止める”ってま
で言われなきゃなんねェんだよ!!??」

「お前ら二人とも、忍者になる資格もねえガキだつてことだよ。」

「“二人”つてのはどういうことだ。」

フツフツと湧いてくる怒りを抑えて問いたです。

「……………サクラはお前らと違って、この試験の“答え”に気づ
いてたし、それを踏まえた上でお前らの行動も予測済みだった。鈴
もちゃんと取つたしな。」

……………ま！お前らよりはよっぽど忍には向いてるってことだ。……………

…とは言っても、色々と直さなきゃならん下口もあるがな。」

「!?!」

「サクラちゃんが鈴を!?!」

二人の視線に、サクラは何でもないような顔でチリンツと鈴を鳴らした。

(1人でカカシから鈴を取っただと……!!?)

全てにおいて既に追い越したと思っていた相手が“また”自分の目の前に立って居ることにサスケはギリツと歯を食いしばった。

「んじゃ、サクラ。この試験の目的を二人に説明してやってちょー
ーだい。」

サクラは言われた通り、必要な部分だけをナルトにも分かるように噛み砕いて話した。

「え?え?じゃあさ!じゃあさ!鈴が無くても合格出来たってこと
!?!」

「そつだ。」

頷くカカシにサスケは顔をしかめ、ナルトはガツクリと肩を落としました。

「チームワークを乱す個人プレイは仲間を危機に落とし入れ“殺す”ことになる。……………例えばだ。」

不意にカカシの姿が消え、次の瞬間うつ伏せに倒されたサスケにクナイが突き付けられる。

「サクラ！ナルトを殺せ！さもないとサスケが死ぬぞ！！」

「え？え？」と混乱するナルトをサクラは困ったような顔で見つめるしかなく。

「と……………。こうなる。人質を取られた拳げ句、無理な2択を迫られ殺される。お前らはこれから、そんな世界に入ろうとしてるんだ。」

そう言って立ち上がると木々を通り抜け、その先にある石碑の横で

立ち止まった。

「これを見る。この石に刻んである無数の名前……これは全て、里で『英雄』と呼ばれている忍者達だ。」

「……それイイー……！俺もソコに名を刻むってこと今決めた！
……！！！」

「……が、ただの英雄じゃない。」と付け足すカカシに、ナルトはコテリと首を傾げる。

「……じゃあどんな英雄なんだってばよ？」

「任務中、殉職した英雄達だ。」

衝撃的な事実にもナルトは息を詰まらせた。

「これは慰霊碑。この中には俺の親友の名も刻まれている。」

重い沈黙が降りる中。4人の視線の先にある石碑は、相変わらず春の陽気に包まれて眩しい光を反射させていた。

十十十十十

「最後にもう一度だけチャンスをやろ……。ただし、昼からはもつと過酷になる!!」

振り向くと鋭い眼光を帯びて3人を射抜く。

「挑戦したい奴だけ弁当を食え。ただしナルトには食べさせるな。」

「エエツ!？」

「ルール破って1人食おうとした罰だ。もし食べたりしたら、そいつをその時点で失格にする。……………ここでは俺が“ルール”だ……………。分かったな。」

最後に少し殺気をぶつけてカカシはその場を後にした。

弁当を食べ始めると、隣から腹が虫が聞こえてきた。

「へへーん！オレってば別にメシなんか食わなかつてへーきだつてばよー！」

空元気もむなしくナルトのお腹は大きな音で鳴く。

「ホラよ。」

目の前に、少し食べかけの弁当がスツと差し出された。

「！！」

「サスケ？」

「大丈夫だ。カカシの気配は無い。……………昼からは3人で鈴を取りに行く。お前もやれ、サクラ。」

「これからは3人で1つ」。これはさっきサクラ自身が言ったことだ。なら、任務をやっていくチームとして、3人でいかないと意味が無い。

サスケはそういう思いで言ったのだが、彼の考えは甘かった。

「いや、サスケ。そうじゃなくてさ。ホラ。」

見るとサクラはナルトの縄を指差している。

「これじゃ自分で食べられないでしょ。」

「……………」

「私がやるうと思ってたけど……………サスケがそんなにナルトにご飯食べさせてあげたいなら私はこのまま見てるよ……………」

「オイ……………てめえ…ケンカ売ってんのか……………」

「え？だって二人は未来を誓い合った仲だし……………??？」

「サクラちゃん！それ誤解だつてばよ！！！！」

「テメーはまずはその意味不明な脳みそをどうにかして来い。」

「いひゃひひゃい！……！」

しばらくまた何時ものごとくもみ合いになったが、結局サクラがナルトにご飯をあげることになった。

「まあ、そういう訳でナルト。ちょっと我慢してね？はい、口開けて。」

まだ勘違いしているのかサクラは少し申し訳なさそうにご飯を差し出していたが、ナルトはそんなことは全く気にせず嬉しそうに口を開け、時折「うへへ」とだらしない顔で笑っている。

ナルトの『サクラバカ病』はかなり進行しているようだ。いや、もはや末期なのかもしれない。

ナルトが煮つ転がしをパクリと食べた時、3人の前に白い煙が立ち上り、中からカカシがものすごい形相で現れた。

「お前らああああ……！！！」

「……！！！」

「うわああああー!!」

「はい、何でしょう????」

反射的に臨戦態勢を取るサスケ。

怖いモノが苦手と思わず叫び声を上げるナルト。

むしろ居直って弁当を持ったまま爽やかな笑顔で振り向くサクラ。

「じーっかつく!!」

三者三様のリアクションを見せる3人にカカシはニッコリ笑った。

「お前らが初めてだ。今までの奴らは“素直”に俺の“言うことをきくだけ”のボンクラ共ばかりだった。」

呆気にとられる3人にカカシは更に言葉を続ける。

「……………“忍者は裏の裏を読むべし”。忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる……………」

……………けどな……………。仲間を大切にしない奴は、それ以上の『クズ』だ。」

春の柔らかい風が、その銀色の髪をサラサラと撫でていく。

(……………。なんか……………なんか……………カッコイイ……………。)

「フン……………」

(……………マスクで隠してるクセにカッコイイじゃねーかコノヤロウ。ちくしょー……………私もマスクしようかな……………。)

「これにて演習終わり！全員『合格』！！！！第7班は明日より任務開始だあ！！！！」

「イエ〜〜〜イ！！！！やったああってはよお！！！！オレ忍者！忍者！！！！忍者！！！！」

「帰るぞ。」

「フン……………」

「……………あれ？みんなどこ行くんだったよ？」

赤黒い液体を噴水のように撒き散らせながらゴトリゴトリと鈍い音と共に何かが薄暗い床へ転げ落ちた。

その後を追うようにゆっくりと倒れた数体の肉体には首から上が欠けており、流れ出る液体が辺り一面を赤く染め上げる。

「ん~~~~~………こんなに手間取ったって大丈夫なんかいな。まあ、使つとる術はちよつち変わつとったかもしれないけどな………」

誰も居なかったはずの扉の前にかひっそりと佇んでいた人物は、呑気な声で独り言を口にしたが、闇と溶け合っているかのように存在感が無い。

死体の中から奪われていた巻物を取り出すと手をかざす。

すると巻物に付着していた血が跡形もなく消えた。

そのまま手を離すと、落ちていく巻物がフツと消える。

【……コクか。もう終わったのか？】

膝に重みを感じたのか、三代目の声が頭に響いた。

【まーなー。とりあえず、後始末するから。】

【相変わらず早いのか……。5分も経っておらぬというのに……
……。そう仕事が多いと逆にわしの仕事が増えるわい……。】

【そりゃあ俺を雇ったのが運の尽きだったな。お疲れさん。つじつま合わせんのガンバって……。】

【誰のせいじゃ……。人事だと思ってる……。】

【そんな苦労性なじーちゃんに朗報。関節痛に良く効くわい特製の『ビックリシャキン！アタタの腰痛もこれ一本』を贈呈しよう。】

【……………いらん。】

【え？何でや？良く効くねんで？？】

【余計なお世話だ。だいたい何じゃ。そのふざけた名前は……………。
長すぎじゃわい。】

【分かった。じゃあ『シャッキン』でどや？飲みたくなったやろ。】

【……ますます飲む気が失せるわ……。】

【そうか？そない言われたらしゃーないな。そんならコッソリお茶にでも……。】【断る。】

【……………チッ。】

ふざけながらももう二、三話して念話を切ると、手を横へ滑らせた。

黒い霧が現れ全てを包んだかと思うとすぐ消える。

霧が晴れた部屋はまるで何事もなかったかのように元通りになっていた。

「さて……………と。あの第七班もやっところさ埋まったか。」

首を曲げて肩をゴキッと鳴らす。

「『三忍』。『四代目火影』。『うちはオビト』。『はたけカカシ』……………」

肩をほぐしながらめんどくさそうに幾つかの名前を挙げていく。

それらは全て、かつて第七班だった面々だ。

「彼らから“第七班”を引き継いだ3人はこれからどんな未来を描いていくのか……………ってか??」

どこか嘲りを含んだ声が響いた部屋には既に何者の姿もなかった。

下忍認定試験【其の六】（後書き）

原作よりサスケくんは少し大人ですね。まあ、主人公がアレなんで、そうならざるを得なかったのかもかもしれませんが……。早くサスケくんは過去を語って欲しいですが次は波の国……。もう少し後になりそうですね……………（-”-;）

サクラの両親について。

作者が原作を読んで考えた結果です（<|>）

第七班の設定について。

作者は運命的な繋がりというのが好きなので、勝手にやりました。すみません（<|>）

波の国【其の巻】（前書き）

2011年11月1日の夜11時頃、お気に入りが『111』件を突破しました！！

『1』が綺麗に揃いました！！素晴らしい！！（ノ T）
ユニークアクセスは2万超え。

PVも早くも14万を突破しております。

いつもご愛読頂いている皆様に心から感謝申し上げますm（）（）
m！！

これからも頑張っていきます！！

ではびびぞー！m（）（）m

H23・11・5。終わり部分を修正。

波の国【其のき】

「ふんぬううううう！うわっ！！」

一生懸命引っ張っていたイモの茎がプチッと切れ、オレンジ色のボールがコロコロと転がった。

「ナルト！イモは引っ張るんじゃないでまず掘ってくの！！」

青空の下に広がる広い畑でサクラ達第七班は今日も任務をこなしていた。

第七班が本格的に活動し始めてから2週間。

彼らに任される任務はどれもこれも“任務”というより“お手伝い”といったほうがしっくりくるような簡単なものばかりだったが、期間付きの物や数日かかったものもあつたため、今までこなしてきた数は全部でまだ4つ程度。

少ないように感じるがこれがごく普通のペースだ。

サクラの言葉に「そうか！ヨオ〜シイ！」と更に気合いを入れ、今度は凄まじい勢いで掘り出した。

土が高く飛び、ナルトの周りに山を作っていく。

「ナルト……………それじゃ『ここ掘れワンワン』だ……………」

呟いた声は届かず、遠い目をした視線の先では、掘り出したイモを笑顔で持って行こうとして土に足を滑らせ、少年が自分の掘った深い穴にハマっていた。

「……………何してんだ。このウストラトンカチ。」

白い目で見ながらもサスケが穴から引つ張り出す。

「いちいち手間かけさせんな。馬鹿。」

「つつんだとー！ー！！？？」

「ああ……………今日も仲良いね。カカシ先生もそう思うでしょ？」

「ん。まーそう言われればそうだな。世間じゃケンカするほど何とやらって言うしな。」

「」「どこがだ！ー！」

「！！オイコラ！真似すんなってばよ！」

「誰がお前なんかの真似するか！このウストラトンカチが！！」

「……………まさに一心同体……………いや、むしろ相思相愛……………？いひ
やひいひやひ……………」

「毎回毎回……………テメーもいいかげんにしやがれ！！」

「ああ！！テメー！コラッ離せってばよ……………」

「オ……………イ。うるさいぞ……………お前ら！ちゃんと任務に集中し
る……………」

「「そういうアンタこそ一人だけ本読んでサボってんじゃね……………
……………よ……………ってばよ……………」」

「さて……………カカシ隊第七班の次の任務は……………老中様のぼっちゃんの子守りに隣街までのおつかい、大名様の妻のペットの捜索か……………」

ある者は服を泥だらけにし、またある者は頬をヒリヒリと赤くさせながらも、今日も無事に（？）任務を終えた第七班に、次の任務の候補を挙げていく三代目。

「ダメー………ッ！！そんなのノーサンキューー！！オレっ
てば、もっとこうスツツゲエー！任務がやりてーの！他のにしてエ
……………」

ナルトは体の前に大きなバツテンを作った。

（……………。一理ある……………。）

（ん？ペット捜索……………？ついこないだやったよね？もう逃げたの……………？てかナルト。それ可愛い。もっとやって。）

（ハ……………そろそろダダこねる頃だと思った……………。）

自分も簡単過ぎる任務には飽きていたため、珍しくナルトの言い分に共感するサスケ。
相変わらず思考がズレているサクラ。

後でどやされんな……………俺……………。と、ナルトのワガママに心の内でため息を吐くカカシ。

「バカヤローー！！お前はまだペーパーの新米だろーが！誰でも初めは簡単な任務から場数を踏んでくり上がってくんだ！！」

イルカがガタツと立ち上がってアカデミー時代同様に喝を入れる。

任務の記録係りも中忍の仕事の一つなのだ。

「だってだって！！この前からずっとシヨボイ任務ばっかじゃん！！！！」

「ナルト……………お前には任務がどういうものか説明しておく必要があるな。」

まだダダをこねるナルトに三代目がこの里の任務のシステムについて説明しだした。

里には毎日、子守りから暗殺まで様々な依頼が舞い込んで来る。依頼は難易度の高い順にA・B・C・D・Sとランク分けされており、火影を始めとする里の上層部がそれを達成するにふさわしい忍者に“任務”として振り分けている。

大まかな目安としては、C・Dは下忍。B・Cは中忍。Aランクは上忍。Sランクは暗部または上忍が請け負うことになっている。

ただし、Sランクについては任務内容が国家レベルの機密事項に関わるものであるため、任務を任せる段階になるまでその存在が明らかされることは無い。

「……………で、任務を成功させれば依頼主から報酬金が入ってくるというわけじゃ。……………とは言ってもお前たちはまだ下忍になったばかり。Dランクがせいぜいいいところじゃ。」

「ねえねえ。サクラちゃん。今日のご飯なにイ??」

「ん……………。何がいい?」

「きけエエエイ!!!!」

気付けばナルトは長々と話す三代目に背中を向けて座り込み、ナルトに話しかけられたサクラも向かい合うように座り込んでいた。

「あーあ！そうやってじいちゃんはいつも説教ばかりだ。けど、オレってばもう、いつまでもじいちゃんが思ってるような“イタズラ小僧”じゃねえんだぞー！」

フンツ！と怒ったようにまた背中を向け、頬を膨らませてうでを組むナルトを“微笑ましい”といわんばかりに見つめるサクラ。

カカシは冷や汗を流していたが、三代目とイルカもその小さな背中を見て口角を上げた。

イタズラでしか自分を表現出来なかった少年の目に、強い光が宿っていたからだ。

「分かった……。お前がそこまで言うのなら……。Cランクの任務をやらせてもらう。……。ある人物の護衛任務だ。」

ならば、今回はその背中を押してやることにしよう……。三代目はちょうど急ぎの任務があったため、それを任せることにした。

（それに……。サクラのことをハッキリさせるきつかけになるやもしれんしな……。）

「だれ！？だれ！？」

「そう慌てるな。今から紹介する。……………入って来てもらえますかな……………?」

依頼人の待合室から出て来たのは頭に捻り八チマキをした大柄な男だった。

片手には酒瓶を持っている。

「なんだア?超ガキばつかじゃねえか!

特にその一番ちっこい超アホ面!お前、それ本当に忍者かあ!?
お前エ!」

入ってくるなり酒をあおりながら、吐き捨てるように言う依頼人。

「アハハハ。誰だ?一番ちっこいアホ面って?ってアレ?サクラちゃんは?」

辺りを見回すと、部屋の隅の壁に手を付いて負のオーラを垂れ流しにしているサクラが居た。

「いいんだ……………。別に……………。少しくらい背が低くたって……………。要は中身じゃないか……………。そうだよ。大切なのは中身……………。少しくらい低くたってそれが『モテない』理由じゃないはずだ……………。」

……。いや、モテなくなっただっていいじゃないか……。？むしろそれだって個性……。そう、個性だろう？」

（コイツは一体“何”にモテたいんだ……。）

サスケは頭痛そうに眉間にシワを寄せるつつも、無理やり引っ張って連れ戻す。

3人並んでやつと自分が低いことに気づき、タズナに突っかかるうとしてカカシに止められるナルト。

その横では、相変わらずブツブツと独りの世界に入っていたのを覚醒させられたサクラが反撃して、片方は頬を引っ張られながら相手の頬を引っ張ろうとし、片方は相手の頬を引っ張りつつそれを阻止するというレベルの低い闘いを繰り返していた。

護衛される側にとって、これほど不安な護衛は他に無いだろう。

「オイ……！本当に大丈夫なんだろうな……！？」

「ハハハ……。まあそう言わずに……。そこの上忍はかなりの手練れ。その3人も忍。いざという時は命に変えてもお守りしますゆえ。そう心配することもありますまい。」

まだ不安は拭いきれないものの、火影にそう言われ仕方なく3人を見る。

「オイ！お前達もそのくらいにしとけ。」

「フン……………」

「くう……………」

二人はカカシに言われて渋々離れるも、一人は悔しげな視線を投げ、もう一人はそれを涼しげな顔で受け流している。

すっかり空気と化していたため「オイ！」と声を上げると、ようやく今の状況を思い出したのか、やっと全員がこちらを見た。

「わしは橋作りの超名人、『タズナ』というもんじゃわい。わしが国に帰って橋を完成させるまでの間、命をかけて超護衛してもらうぞ！」

波の国【其の壱】（後書き）

変な所がありましたら、お手数ですがメッセージを頂けると幸いです。 m (| |) m

ご意見感想もお待ちしております。 m (| |) m

任務について

NARUTOの『兵の書』を参考に、作者の独自解釈を混ぜました。

幼い頃、サクラとカカシが会っていた時期を5才までに修正しました。

波の国【其の貳】

5人が出て言った扉を見て三代目は目を細めた。

「あいつら……………大丈夫でしょうか……………」

ナルトの成長を嬉しく思いながらもやはり心配なのだろう。隣に座るイルカがつぶやいた。

「カカシがついておる。まずは心配いらんじやろつ。」

「……………そうですね。」と少しホッと息を吐くイルカに目をやりつつ、三代目は別のことを考えていた。

＋＋＋＋＋

「カカシか……………。その様子だと、ようやく第七班が埋まったようじゃな？」

試験を終えたのだろう。

班結成の用紙を持って現れたカカシに声をかけた。

「はい。ま……………忙しくなりそうですケドね。」

いかにも面倒くさいといわんばかりの表情を浮かべるカカシに苦笑する。

「じゃが、あの3人なら今までにない絆を持つチームになる。」

カカシも同じことを考えているだろう。

そう思ってた言葉だったが、それを聞いた彼は表情を変えた。

「火影様。それについて、少しお話があります。」

十十十十

あの時、カカシの口からもたらされた事実は衝撃的なものだった。

あのサクラがカカシから体術のみで鈴を奪ったというのだ。

一体何故力を隠していたのか。いや、その辺りの理由は予想がつかないわけではない。

問題は、何故彼女がそんな力を持っているのか。

そもそも彼女はアカデミーに入ってから、両親とは離れて暮らしていた。

バイトをして里を歩き回っていたため時間的にも余裕は無いはず。

それに、彼女はよくサスケやナルトと競い合うように練習していた場面も幾度か目にしている。その時の彼女はむしろ本気でやっていた。

カカシも直接聞いたものの、「忍者って秘密があったほうがカッコいいでしょ？」とか言っていて結局明かさなかったという。

カカシは何も告げなかったが、彼が気になっている点は他にもありそう。

今までずっと彼女を見ていた限りでは、サクラはただ明るく、幸せそうに笑う、ドジで甘えん坊な女の子。

里でも親しまれており、「ドジ」なところでさえ彼女の長所と言われるほど、“負”の面など欠けらも感じさせない、そんな子供だった。

それは今でも変わっていない。

だが以前、一つ引っかかりを感じたことが自身にもあった。

初めてサクラがここへ忍び込んで来て、彼女が自分の机の下で絵を書いた時のことだ。

可愛いらしい笑顔で見せた絵に、違和感を感じた。

そこには彼女の両親と自分が上手に描かれていた。

そして、3人とも幸せそうに笑っていた。

だが、そこに彼女自身の姿がなかった。

何故描かないのかと聞くと、彼女は“3人が描きたかったから”と答えた。

ただの子供の気まぐれだったのかもしれない。

キラキラ輝く目を見てその時は結局褒めたが、何故かその絵を少し寂しく感じた。

彼女に何か足りないのか……それとも何かの感情の現れなのか……それはわからない。

(この任務が何らかの糸口になればよいのだが……。
一歩間違えれば、サクラが利用される結果を招きかねん……。や
はり少しばかり手を打っておくか……。)

十十十十十

「あれ？今日は早いね？先生。まだ集合時間から30分しか経って
ないってのに。」

「遅れてることに変わりないだろうが……。」

「いや。今日は旅の支度に時間がかかってな？」

『あ』『ん』と書かれた大きな門の前に現れたカカシは呑気にそんなことを言ったが、彼のリュックは他のメンバーのに比べて幾分か軽そうに見える。

「しゅっつぱああー……っ……!!」

いつもならここでナルトがツッコミを入れるのだが、今日は初めて里の外へ出られるとあってかウズウズしながら叫んだ。

「オイ！本当にこんなガキで大丈夫なのかア！？」

「ハハ…………上忍の私がついてます。そう心配要りませんよ…………。」

「コラじじい！あんまり忍者をなめんじゃねエーぜ！オレってばスゲーんだからなあ！！」

相変わらずガキとしか見ていないタズナにビシッと指を突き立てる。

「いずれ火影の名を語る超エリート忍者！！…………名を『うずまきナルト』という！！覚えとけ！！！！」

タズナはそれに別段驚きもせず、興味無さそうにナルトに目をやる。

「火影っていやあ、里一番の超忍者だろ？お前みたいのがなれるとは思えんが…………。」

「だ〜！うっさい！！火影になるためにオレってばどんな努力も

する覚悟だつてーの！オレが火影になったらオツサンだつてオレのこと認めざるをえねエー！ーんだぞ！！」

「……………認めやしねーよ。ガキ。火影になれたとしてもな。」

冷たい目でそう言うとグビリと酒をあおった。

そのいけ好かない態度が頭にきたナルトがまたカカシに止められていたが、サクラはただタズナの横顔を静かに見つめていた。

＋＋＋＋＋

「タズナさんの国って『波の国』だつたよね？」

「そつだ。」

ふと口を開いたサクラに4人の視線が集まる。

「その国も忍者っていんの？」

カカシに聞いた本人は全て答えを知っていたが、火影を目指している少年のために敢えて質問した。

「いや、波の国に忍者はいない。……が、たいていの他の国には文化や風習こそ違うが、隠れ里が存在し忍者が居る。」

そう言うと、カカシの分かりやすい解説が始まった。

この世界に存在する『国』は、基本的に自国の軍事力として『隠れ里』を持っている。

『国』は『隠れ里』に対して金銭・物資等の援助を行い、『隠れ里』は“長”を頂点として独立した行政を施行しながらも、所属する『国』の軍事力としての役割を果たしている。

『里』の“力”はそのまま国同士の関係や立場を左右するがゆえ、『国』は『里』を必要とし、安定した居住地の確保のため『里』は『国』に頼らざるを得ない。

両者の関係は一見して対等に保たれているように見えるが、『国』から見れば『里』の屈強な忍達は“軍事力”であると同時に“脅威”でもある。

いくら自分たちが援助をしているとはいえ、彼らが手を翻して支配しようものなら、その力を前にして対抗する手段など自分たちには皆無であるからだ。

ゆえに、『国』の大名達の中で彼らを信用していない者達は『里』

が力を持ち過ぎないように“調整”を行いつつ援助している。

それは木の葉とて例外ではなく、今の“平穩”も、薄い氷の上で危うく保たれていると言っても過言ではない。

もちろんアカデミーで習うのは基本的な仕組みだけで、この事を知る者は中忍以上でもそう多くない。

「……ま！かと言って波の国みたいに他国の干渉を受けにくい小さな島国なんかでは忍の里が必要でない場合もある。」

「「へエー。」」

「……お前ら……。アカデミーで習っただろうが……。」

「いや、なんかこう……社会的なモノは脳が拒絶しちゃって……」

「そーそー。授業なんて眠いだけだつてばよ。」

「お前らな……。」とため息をつくサスケに少し同情しつつもカカシは説明を続けた。

忍の里の中でも、『雷』『水』『土』『風』そして『火』の五か国の忍の里は特に強大であり、これを有する国々は『忍五大国』と称されている。

『雷の国』には『雲隠れの里』。『水の国』には『霧隠れの里』。
『土の国』には『岩隠れの里』。『風の国』には『砂隠れの里』。
そして『火の国』には『木の葉隠れの里』がある。

そして里の“長”が『影』の名を語れるのもこの五か国だけであり、その火影・水影・雷影・風影・土影は『五影』と呼ばれ、全世界各国何万の忍者の頂点に君臨する者たちなのだ。

「じゃあ、他の忍との接触は無さそうだね？」

「ま！そういうことだ。安心しろ。Cランクの任務で忍者対決なんてしやしないよ。」

その言葉にピクリと体を震わせたタズナにチラッと目をやりつつ、ポンとサクラの頭に手を乗せる。

すると何やらスイッチが入ったのか、サクラが嬉しそうに笑った。撫でれば撫でるほどかつてのように「エヘヘ」と笑うサクラで遊びながら、辺りの気配を探って歩くカカシ。

サスケも違和感を感じてタズナを見ていたが、相変わらず単純なサ

クラに顔をしかめた。

＋＋＋＋＋

しばらく行くと乾いた道に水溜まりがあった。

明らかに不自然なそれに目をやり、頭を撫でるのを止めて最後尾になるようにゆっくりと歩く。

サスケもそれに気づいたのかサクラの斜め後ろを歩き出した。

タズナもちゃんと守備範囲内に入っている。

395

（でもやっぱりサクラなのね……。ま！俺がいるからだろーけど。）

とその後ろ姿を見ながらカカシが水溜まりを通り過ぎる。

5秒後。背後の水溜まりから音もなく2つの人影がスーッと伸びた。

刹那。手裏剣を連ねた鎖がカカシの体に巻き付く。

「一匹目。」

周りの動揺を余所に、感情のこもっていない機械的な声が重なると同時にカカシの肉体が引き裂かれた。

「か……………カカシ先生!!??」

ポトポトと落ちていくそれにナルトが思わず声を上げる。

だがサクラはすぐさまクナイを構えてタズナの前へ出た。

「タズナさん、下がって。」

落ち着きはらったその目は敵を淀みなく捕らえている。タズナがサクラを少し見直した瞬間だった。

「一匹目。」

フツと姿が消え、次に声が聞こえたのはナルトの背後。

初めて感じる“殺意”。

咄嗟に反応しようとするも、筋肉が引きつったように体が動かない。

互いの片手を繋ぐ鎖がナルトを捕らえようと波打った次の瞬間。

手裏剣が木にそれを討ち込み、クナイがその手裏剣を突き立てた。

サスケだ。

(……………！抜けぬ！！)

反射的に前に出た体が引き戻される。

二重に止められたそれは抜けず、逆に自分たちを捕らえる“鎖”と化した。

サスケはヒラリと空で体制を変え、敵の腕に乗る。

そのまま流れるような動作で相手の頭を蹴り飛ばした。

ナルトはその鮮やかな動きに目が奪われる。

敵は低く唸り声を上げると、手に付けられた大きな忍具から瞬時に鎖を外し二手に別れた。

一人はナルトに、一人はタズナに向かって襲いかかる。

「うわぁー!!」

呆気に取られていたナルトは反応が遅れ、迫り来る大きな爪に声を上げる。

一方のサクラは目の前の敵の忍具を真剣なまなざしで見つめ……何を思ったのかクナイをしまうと腕まくりをして声を上げた。

「“漢”ならぁー!!…拳と拳でえ!!…ひひゃひひゃうひゃうひふー
ー……!!……」

「テメー……は!!……!!何でこんな時まで“そんな”ノリなんだよ!!
……!!……」

気づけばサクラの前にはサスケが移動していて、サクラのリアクシヨンに拍子抜けした忍と共に、ナルトに襲いかかった忍もカカシに捕らえられていた。

カカシが先ほどいた場所には木がバラバラに落ちている。

(カカシ先生……………《変わり身》使ってたのか……………。)

「ナルト……………すぐに助けてやらなくて悪かったな。ケガさせちまった。……………お前がここまで動けないとは思ってなかったからな……………」

カカシの言葉にナルトが悔しそうに顔を歪めたが、少し離れた場所ではいつものやり取りが始まっていた。

「オイ……………てめえ自分が何したのかわかってんだろな？」

「ひひゃ、ひゃっひえひゅひゃひゅひえーひゃひーひえひよ？ひゃひよふ？(いや、だってクナイより素手の方がいいでしょ？あの場合?)」

「そついつ寝言は寝てから言え。」

「ひいつひひよひよゃひよあひふひ？(引っ張ってんのに言葉わかるの?)」

「フン……………テメーがその足りない脳みそで考えそうなことくらい

分かる。」

「ひゅーひぁひよっひょーひゃひひえひよ？」（っーかいつもより痛いんだけど？）

「当然だ。痛くしてんだからな。」

「ひゃひゃひえー！ー！ー！ー！（離せー！ー！ー！ー！）

「自業自得だ。しばらく反省してろ。」

（……とりあえず助かったが……。コイツもあまり頼りになりそうにないのう……。）

波の国【其の参】

「これでよし……………と……………。オイ！お前らあゝ。いい加減その辺にしとけ。」

二人の忍を木に縛り終えた力カシがのんびりと声をかける。

いつまでもこうしていたら話が進まない。

サスケは仕方なく頬を離してやりながらも、まだ気が済まないのかサクラに厳しい視線を送っている。

（なんでそんな怒ってるの！？いや、だってアレは素手の方がいいでしょ！？？間違ってるないよね？？あのノリだって相手怯んだし！！！！）

サクラは頬を押さえつつ、いまだにサスケが怒った理由が分からないでいた。

「ま！よくやったな。

サスケ。ん……………サクラは……………。まあサクラだからなあ……………。」

誉めているのか何なのかよく分からないセリフを言いながらサクラ

の頭に手を乗せる。

また綻ぶ顔を見てサスケは再びため息をついた。

(俺ってば……………何も出来なかった……………なのにサスケは……………。それにサクラちゃんも……………。)

「ナルト、こいつらの爪には毒が塗ってある。あまり動くな。毒が回る。」

二人の姿を見つめていたナルトはカカシの言葉に我に返って手を見た。

手の甲にはいつの間に来たのか二本の切り傷があったが、傷はそんなに深くはない。

……………が、見つめれば見つめるほどズキズキと痛んだ。

「タズナさん。」

「な……………何じゃ!!」

いきなり自分に話が振られて慌てるタズナ。

だが、「少しお話があります。」と告げたカカシの目は鋭い光を帯びていた。

「こいつらは額宛てからして霧隠れの中忍……。霧隠れと言えば、いかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍だ……。」

縛られた二人に視線が集まる。

防毒霧用のマスクをつけた二人の額宛てには、霧を作り出す小さな水滴の流れを模した四本の波模様が刻まれている。

「……………何故我々の動きを見切れた。」

「フン……。数日雨の降っていない晴れの日に水溜まりがあるわけがないだろうが……………」

「バカが……。」「といわんばかりに見下すサスケに言葉を詰まらせる。

「くそそう……。かつこつけてえ……………」

サスケのクールっぷりが頭にきたのか、「このやろーう!」「とつかみかかるサクラ。

「てめえはどつちの味方なんだ!!」

「ええい!! 大人しく身長3センチよこせえい!!」

「話が違つたろーが!!」

「いいじゃん。ちょっとくらい。減るもんじゃないし。」

「思いつきり減るだろ!!」

横でまたもや始まったコントはスルーし、カカシは「まーそういうことだ。」と二人に軽く言った。

「あんた、それ知つて何でガキにやらせた?」

「私その気になればこいつくらい瞬殺できます。………が、私には知る必要があったのですよ。この敵のターゲットが“誰”であるのかを………」

「どういうことだ?」と顔に疑問符を浮かべるタズナに、更に言葉を続けた。

「つまり狙われているのはあなたなのか……それとも我々忍のうち誰かなのか……ということですよ。」

「ねえねえ、お兄さん達、タズナさん狙ってきたの??」

「……………」

何とも場違いな声のした方を見ると、サスケとやり合っていたハズのサクラが忍の前にしゃがみ込んでいた。聞かれている側もどう反応したらいいのか分からずに何とも言えない空気を醸し出している。

「せっかく捕まっちゃったんだから吐いちゃいなよ カツ井ないけど、欲しかったら作ってあげるよ??」

「ハイハイ、サクラはこっちで良い子にしような。」

あやすように言いつつ、これ以上何か仕出かす前にヒョイと肩に乗せる。

「ぬああ！下ろしてえ〜！せつかく尋問してたのにイーイー！！！」
という頭上の声を華麗にスルーして改めてタズナに視線を向ける。

「我々はあなたが忍に狙われているなんて話は聞いていない。

依頼内容はギャングや盗賊などのただの武装集団からの護衛だったはず……………。

これだとBランク以上の任務だ……………。

依頼は『橋を作るまでの支援護衛』という名目だったはずです。

敵が“忍者”であるならば、迷わず高額なBランク任務に設定されていたはず。」

「イーもんね。別に相手にされなくたってイーもんね。」と頭の上ではスネて銀髪の髪と戯れだしていたがカカシはこれもスルーした。

(コイツの精神年齢は一体どうなってやがる……………。)

「何か訳ありのようですが、依頼で嘘つかれると困ります。これだと我々の任務外ってことになりますね……………。」

カカシの言葉に、サクラを見ていたサスケもタズナに視線を移した。

視界に入るモノのせいで迫力が半減していたものの、カカシの鋭い目はそれなりに効果があったのか、タズナは視線を逸らして黙り込む。

「ナルトの治療ついでに里へ戻るしかないな……………」

その言葉にピタリと動きを止めるサクラ。

ナルトはギリリと歯を食いしばり、痛む手を握りしめた。

刹那。

ナルトが傷ついた己の手の甲に自らクナイを突き刺した。

足元の乾いた土にポタポタと赤い斑点が広がる。

(ちくしょう……………。)

悔しかった。何もかもが。

(ちくしょう……………。)

任務をこなしつつ毎日術の練習をしているにもかかわらず、動けなかつたうえ助けられた。

いや、いつも助けられてばかりだった。

強くなると決めたはずなのに……

俺ってばもう、二度と助けられるような真似はしねえ……。怖じ気づいたり逃げ腰にもならねえ……。この左手の痛みに誓ってやる……！！！！

空色の瞳に力強い光が宿る。

「オレがこのクナイで……オッサンを守る！！任務続行だ！！！」

+++++

「失敗したじゃとお！？」

敵を阻むかのように真つ直ぐに生えた巨木に囲まれたツリー状の建物に、初老の男の声が響いた。

「お前たちが元腕利きの忍者だというから、高い金で雇ったんじゃぞー！」

どう責任を取るつもりじゃー！」

ヒュツと風を切る音がした次の瞬間、鼻先に巨大な刃物が突き付けられる。

「……………グチグチうるせーよ……………。今度は俺様がこの『首切り包丁』で……………そいつを殺してやるよ。」

刃物は己の背丈ほどありそうな大きさが、冷たい声の主は己の手足のように使い慣れているのか、片手で突きつけているその刃先はピクリとも動かない。

「……………ほっ……………本当に大丈夫なんだろーな……………！敵もかなりの忍を雇ったようじゃし……………その上『鬼兄弟』の暗殺失敗で警戒を強めているとなると……………。」

その者は殺気を出していないにもかかわらず、その放つ“気”に威圧されて声が震える。

「この俺様を誰だと思っている……。霧隠れの“鬼人”と呼ばれたこの『桃地再不斬』をな……………！」

建物内でそんなやり取りがされている頃、その屋根には一人の人物が寝そべっていた。

「任務……………ねえ??」

気だるそうに呟くその声は誰に聞かれるでもなく少し霧掛かった大気へ溶けていく。

「ターゲットの動きを妨害せずに周りに情報が漏れないようにしろ”ってそれなんて無理ゲー?……………いや、この場合無理ニンか???”

その訳の分からないセリフに突っ込む者は残念ながらここには居ない。

「なんか最近じーちゃんの扱いが荒くなってきた気がすんやけど……………気のせいか???まあ……………なんとかするけどもさ。」

黒い面を外してスツと目を細める。

そして「ヨッコイショ」とジジ臭く言いながら立ち上がると、静かに姿を消した。

波の国【其の四】

『守ってやる！』と宣言したナルトは傷口から血を流しながら笑っていた。

だが、やはり痛いのを我慢しているのか冷や汗が頬を伝い、心なしか顔も青くなっている。

「ナルト。景気よく毒血を抜くのはいいが……………」。

それ以上は……………出血多量でマジ死ぬぞお……………」

カカシがしばし続いていた沈黙を破り、楽しそうにナルトに告げた。

「ぬおおお！！それダメ！！それダメ！！！！こんなんで死ぬるかっ
てばよ！！！！」

その言葉に慌てふためき、自分に助けを求めるナルトの手を爽やかな笑顔で取る。

だが、包帯を巻こうとした手がふと止まった。

先ほどの傷口が既に半分以上治っていたからだ。

（やはり九尾の力が……………。）

スツと目を細めて真顔になる力カシにナルトは内心ヒヤヒヤしていたが、不意にタズナが口を開いた。

「先生さんよ……………。ちょっと話したいことがある……………。依頼の内容についてじゃ。」

何かを決意したかのような真っ直ぐな目に視線を向ける。

「あなたの言う通り……………この仕事はあんたらの“任務外”じゃろう。」

……………実はわしは超恐ろしい男に命を狙われておる。」

「超恐ろしい男……………？……………誰です？」

ああ……………やっぱややこしいことに首を突っ込んだか……………。と内心ボヤいていたが、顔には出さずに聞き返した。

「あんたらも名前ぐらい聞いたことがあるじゃろう……………。海運会社の大富豪……………『ガトー』という男だ!!！」

予想の斜め上をいく人物の名に力カシは目を見開いた。

「ガトー……………？サクラちゃん知ってるう？？」

「さあ？でも、後ろに『シヨコラ』が付いたら、なんか美味しそうだよな？？」

首を捻り合う二人に、サスケの眉間に寄っていたシワが一本増えた。

「ガトーといえば……………『ガトーカンパニー』の社長だろうが……………」

表向きは海運会社として『ガトーカンパニー』を経営しており、世界有数の大金持ちと言われる大富豪。

しかし裏ではギャングや忍達を使い麻薬や禁制品の密売、企業や国の乗っ取りを行う、裏では“闇の世界の帝王”とまで呼ばれている人物だ。

1年程前。その男は波の国に目をつけ、財力と暴力をタテにあつたという間に島の全ての海上交通・運搬を牛耳ってしまったという。

そして、今彼が唯一恐れているのは、かねてから建設中の橋の完成ゆえにその責任者であるタズナの命を狙っているのだという。

「よし！今すぐ殴り込みに行くぞナルトオ！タズナさんも守れて一石二鳥だああ！！！」

「おおぅー！！」

「待ちなさいヨ。どこに居るのかも分かんないクセに行つてどーすんの。だいいち、行つてる間にタズナさんが殺されちゃったら意味無いでしょーが。」

勇んで歩き出す二人の首根っこをつかんで引き留める。

「あ！そつか！」と声を揃える二人に肩を落とすつつ、タズナに向き直った。

「しかし分かりませんね……。相手は忍すら使う危険な相手……。何故それを隠して依頼されたのですか？」

「波の国は超貧しい国で……。大名ですら金を持っていない……。もちろんワシらにもそんな金はない……。高額なBランク以上の依頼が出来るような……。」

木の葉の場合、任務の報酬額はDランクの場合、五千〜五万両。Cランクは三〜十万両。そしてBランクは八〜二十万両。

“両”の貨幣価値の目安は壹両=十円。

Dランクでも一般人が依頼をすることは少なく、依頼主は行商人や大名などのそれなりに裕福な者達が多いのが現状。

ただでさえ貧しい国の、たかが大工にそんな金などあるはずがない。

「……………お前達がこの任務を止めれば……………ワシは確実に殺されるじゃろう……………。が……………」

なあーに！お前達が気にすることはない！！ワシが死んでも10歳になる可愛い孫が1日中泣くだけじゃ！！」

ガハハハと豪快に笑い飛ばしながら言うタズナに、ナルトとカカシとサスケは何とも言えない表情を浮かべた。

「あ！それにワシの娘も木の葉の忍者を一生恨んで寂しく生きていだけじゃ！いや！なに！お前達のせいじゃない！！！」

ここまで言われてしまっでは何も言えない。

それに先ほどからサクラからの好奇心溢れたキラキラした視線が刺さっている。

もはやカカシに残された選択肢は1つしか無かった。

「……………ま！仕方ないですね……………。国へ帰る間だけでも護衛を続

けまじゅじゅ
「…」

「まじゅじゅ…」

「オー…」

(……………「イン」……………)

+++++

「あれ？そういえばさ、あの二人置いて来ちゃったね？」

歩き出してからだいぶ経った頃。不意にサクラが口を開いた。

「ああ、大丈夫だ。さっき鳥を飛ばしただろ？あれにちゃんと回収してもらおうように手紙持たせてあるから大丈夫。」

「何て書いたの？」

「ま！そこはホラ。“偶然襲って来たから回収してくれ”ってな。後は帰ってから俺が何とかしとくさ。」

「なるほど〜！」とのんびりと答えたカカシに笑顔を向ける。

(でも回収しに来た時には死んでるだろうな……………。)

“忍は道具”。彼らは今回、任務を失敗した時点で“価値無き物”と化してしまった。

故に“忍”として残された道は“自害”のみ。

だが彼らはそれを“苦”だと感じない……………いや、むしろ“心残り”なく自害するだろう。

“忍”としての最後を……………ずっと二人で1つだった相手と共に迎えるのだから。

「でもちゃんと、名前は覚えておくよ。」

「……………？何の名前だ？」

「そっだな……………『サスケ』とかいうどっかのスカした誰かさんの
はひゃいふへふ！！！！」

「……………もっぺん言ってみろ。このウストラトンカチが……………」

「ああ〜！！…てめえ離せつてばよあ！！！！」

「おい！！…こら！！…何してんだお前らあ〜！！…ちゃんと護衛しろ〜！！
！！！！」

波の国【其の四】（後書き）

任務について。

これも『兵の書』及び作者の独自解釈です。

作者の金銭感覚で勝手に考えました。すみません（<|>）

H23・11・9：ミス修正

二人

霧隠れに双子の兄弟がいた。

兄の名は『業頭』。弟の名は『冥頭』といった。

彼らには親が居なかった。顔も名前も知らなかった。

自分たちに残されたのは“毒”の書物と己に与えられた名前のみ。

里では騙し合いなんて日常茶飯事だった。目の前で人間が殺されることなんて当たり前だった。

だからお互いだけが唯一、心から信じ合える存在だった。

忍者学校では優秀なほうで、二人とも一目置かれていたが、誰も信じなかった。
信じられなかった。

だが、二人の心は満たされていた。

“自分は心から信じ合える存在が居る”。
それだけで十分だった。

だが、卒業試験の時、『互いに殺し合え』と言われた。

“ふざけるな……！俺たちはずっと二人で生きてきた！そんな試験なんてあつてたまるか……！！！”

憎かった。

そんなことをさせる奴らが憎かった。

だから試験官を殺して逃げた。

二人はそれから力を求めた。

業頭は右手に、冥頭は左手に大きな鉤爪のついた武器に、互いをつなぎ止めるかのように鎖を繋げた。

憎しみをぶつけて何人も何人も殺した。

そのうち頭に角を付けていたせいか、『鬼兄弟』という通り名が付いた。

ある日、いつもと同じように1人の人物を襲った。

だが、全く歯が立たなかった。

名は『桃地再不斬』。

彼もまた自分たちと同じ思想を持っていた。

だから部下になった。

信じた訳ではない。

ただそれが自分たちにとって“有利”だと判断したからだった。

彼はその時クーデターを起こした後で、追われている身だった。

だから共に里を出た。

「業頭。」

「何だ。冥頭。」

「カツ丼。欲しいって言うべきだったか……………」

「今更何ボケたこと言ってやがる……………。腹減るような時間じゃあ
るめえしよ。」

「ツクク……………それもそうだな……………」

二人は鳥の飛んでいった方向をじっと見つめていた。

二人の視線の先では、空に白い雲が2つ、悠々と浮かんでいた。

二人（後書き）

完全に作者の妄想です。その一言につきます。

でも、あまり強くない彼らが何故わざわざ危ない道を選んだのか。

原作と異なる点がありますが、それらの作者の見解はもう少し後で語らせて頂きますm（）m。

波の国【其の五】

視界が真っ白に覆われてしまうほどの濃い霧の中。5人は船渡しの漕ぐ船に揺られていた。

「凄い霧だね。前が見えないや。サスケの心もこんなあひふへほ？」

何か言う前にサスケが無言でその“減らず口”の頬を引っ張る。

「だからてめえ！いちいちサクラちゃんのほっぺ引っ張んじゃねーってばよー！」

「こ……コラ！静かにしてくれ！！この霧に隠れて船出してんだ……！エンジン切って手漕ぎでな。“ガトー”に見つかっちゃったら大変なことになる……！」

ついついものノリで突っ込んでしまったナルトは反射的に口を手で塞ぎ、サクラは「ふんはへん。」と眉を八の字にした。

「そろそろ橋が見える。その橋沿いに行くと波の国がある。」

タズナの古くからの知り合いである船渡しという言葉通り、しばらくすると、チャプチャプという水の音と木と木が擦れ合う音だけが響く中、濃い霧の中にうっすらと橋の輪郭が現れた。

下から見上げるとかなり大きい。

「おお〜。」と小声で見上げる二人の背中を、サスケとカカシは無言で見ていた。

敵からの襲撃は無かったが、念のためマングローブの街水道を通って姿を隠しつつ上陸すると、船渡しはエンジンを掛けて再び霧の中へと消えていった。

「よぉーし！家まで無事に送り届けてくれよ！」

意気揚々と言うタズナに適当に返事をしつつ、カカシは次に来る敵は上忍レベルに違いない……と長いため息を吐いた。

「そこかぁー！」

いきなり響いた大声に全員の視線が集まる。

声の主は手裏剣を投げた後のポーズをとっていたが、投げた先からは何の反応も無い。

「フツ………なんだ。ただのネズミか………」

「頼むからお前がやたらめっいたら手裏剣使っな……。マジで危ないから！」

「そうだよナルト。武器は大切に使わないと。いざって時に武器が無くなったらどーすんの？」

額宛てに手をやってクールにキメるナルトに、さすがのサクラも諭すように肩に手を乗せる。

だがやはり早く活躍したいという欲求は抑えられないのか、ずっとキョロキョロと辺りを見回している。

ふとカカシが何かを感じたのか、ある一点を鋭い目で見た。

「そこかあー！ー！！！」

ちょうどその位置に、当てずっぽうに投げたナルトの手裏剣が飛んでいく。

「コラ！いい加減にしろ！！チビー！」

「ホントに誰かがこっち見てたんだってーのー!!」

二人のやり取りを尻目に、サスケはカカシの異変に気づき、その草むらを見ていた。

カカシは草を掻き分けて行き、サクラも興味深そうにそれにくっついて行く。

戻って来ると、嬉しそうに笑うサクラの腕に白いウサギが抱えられていた。

「見て見て!!かぁ~~~~わい~~~~い!!!!」

ウサギだったのか!!とナルトは顔を真っ青にしたが、嬉しそうに頬ずりするサクラに少し心癒やされた。

だが、カカシはそのウサギを厳しい目で見ている。
サスケもそれを見て、そして“あること”に気が付いた。

(毛が白いな……………)

サクラが抱いているのはユキウサギ。

日照時間が短くなる冬に白い毛色になることからそう呼ばれている種だ。

だが今は春。この時期ならば毛色は茶色になっているはず。
なのに白い……と、いうことは、あのウサギは野生ではなく、あ
まり光の当たらない室内で飼われていたために“毛が白くなった”
……つまり《変わり身》用のウサギ。

それはすなわち

「……全員伏せる……！」

既に彼らが敵の手中に在ることを意味していた。

咄嗟にカカシはタズナを、サスケはナルトとサクラを伏せさせると、
頭上を何かが風を切って通り過ぎていく。

ザクツと音がした方を見れば、木に横向きに刺さった巨大な刃物の
上に黒い短髪の男が立っていた。

引き締まった浅黒い肌の上半身をさらけ出し、縦縞模様のズボンを
履き、霧隠れの額宛てを額上へ左斜めに付けている。

カカシはその男の風貌に見覚えがあった。

「……………これはこれは……………。霧隠れの抜け忍の『桃地再不斬』くんじゃ～ないですか。」

「……………『写輪眼』のカカシ』と見受ける……………。悪いが……………。そのジジイを渡してもらおうか。」

二人が互いに激しく視線をぶつけ合う中、なんとも場違いな声が響いた。

「うさちゃんがぁ！ーうさちゃんが逃げちゃったよぉ～～！！！」

「…………………………。」

「サクラちゃん、だいじょーぶだってばよ！！ウサギなんてその辺に一杯いるから！」

地にへたり込むサクラをナルトが励ます。

コイツが真面目になるときなんてあるのか。もしかしてこれからもずっとこんな展開になるのか？とサスケは胸中で呟いたが、「お前は下がってる……………。」という言葉に意識を戻した。

「コイツはさっきの奴らとは“ケタ”が違う。お前らは『まんじ陣の陣』でタズナさんを守れ。」

言いながらカカシは左目を隠している額宛てに手をかける。

サクラのマイペースな行動にも両者共に一歩も引くことなく相手を牽制しあう二人は、さすが上忍といえるだろう。

「お前達は闘いに加わるな。それがここでの『チームワーク』だ。」

引き上げられた額宛ての下から現れた瞳は赤。

「……………再不斬……………。まずは……………オレと戦え。」

3つの黒い巴形の印が数珠状に並び、それに取り囲まれるように中心に位置する瞳孔は、全てを見透かすかのように鋭い光を放っている。

初めて見るそれに、ナルトは背筋に悪寒が走った。

「……………ほう。噂に聞く『写輪眼』を早速見れるとは……………光栄だね。」

「さっきからシャリンガン！シャリンガン……………何だよ！？そ

れ!？」

「ナルト、分かりやすく言うとな……………つまりチートだよ。」

何の説明にもなっていない。

サスケは眉間のシワをもう一本増やしながらも説明しだした。

この世界には数種類の『瞳術』があり、それぞれ個々の特徴を持っているが、それらの瞳に秘めた洞察眼力は全ての忍術・体術・幻術のシステムを瞬時に見通し、跳ね返してしまう眼力を持っていると言われている。

『写輪眼』もその一つ。

「……………だが、写輪眼の本質はそこじゃない。」

「ククク……………。御名答。それ以上に怖いのは、その目で相手の技を見極め、コピーしてしまうことだ。」

一度目に映ったものを己のものにしてしまう“コピー能力”。
チャクラ、印、果ては体術にいたるまで、その術を生む全ての理は一瞬の内に術者に記憶され、使用を可能にしてしまう。

もちろんそれだけのチャクラ量や術に耐えうる身体能力あってこそだが。

(どういうことだ……。写輪眼は……。うちは一族の中でも一部の家系にだけ現れる特異体質だぞ……。もしかしてコイツ……)

タズナの前に立ってクナイを構えていたサスケが、じつと探るようにカカシを見ていると、サクラが不思議そうな顔で二人を交互に見た。

「サスケ。何でそんなにカカシ先生のことじつと見てるの？……
…… ツッハ！！もしかしてカカシ先生のことかす……！！」

サクラの言葉は最後まで続かず、サスケは無言でガムテープをポンポンと手の上で弾ませていた。

背中を向けた後ろからは「むーーむーー。」という声が聞こえていたが、知ったことではない。

(何だあのピンク頭は……。)

口をガムテープで塞がれ、眉をハの字にしてむーーむーー言っているガキを白い目で見たが、すぐに視線をカカシへ戻す。

「オレ様が霧隠れの暗殺部隊に居た頃の^{ヒンゴ・ブック}手配帳にお前の情報が載ってたぜ。

千以上の術をコピーした男……………」『コピー忍者のカカシ』ってな

……………」。

さて……………」おしゃべりはこれくらいにしとこーぜ。俺はそのジジイをさっさと殺さなくちゃならねエ。」

再不斬の言葉に、3人が咄嗟に陣形をとってタズナの周りを固める。

「つつてもカカシ！まずはお前を倒さなきゃならねエーようだな。」

波の国【其の六】

来る……。クナイを構えて腰を落とす。が、両者共まだ動く気配は無く、張り詰めた空気が漂う。

「サスケ。」

「……………何だ。」

まだ何かあるのか……………と、不意にまた口を開いたサクラに目を向けると、何時になく真剣な目で敵を見据えている。

いつもは手に負えないくらい意味不明な思考回路で動いているサクラだが、鈴取りの時にはその洞察力で“答え”を導き出していた。あの時、一体どうやって鈴を取ったのか。いや、そもそも本当に鈴を“取った”のか。何故試験の目的が分かっているながらそれを説明しなかったのかという幾つかの疑問はあるが……………。とにかく、今回はカカシも本気で対峙するほどの相手だ。

さすがのサクラも“本気”なのかもしれない。

もしかして何か気づいたことでもあるのか……………？

「あの格好……………絶対に風邪ひいちゃうよね??」

「……………」

短い沈黙の後。

再び聞こえてくる「むーむー」という声に、「陣形を崩すな」と釘を刺されたナルトがチラチラと視線をやる以外気にする者は居なかった。

再不斬は一瞬自分の体を見下ろしたが、木から刃物を引き抜くと宙へ舞い姿を消す。

気付くとその姿はすぐそばの泉の上にあった。目の前に居るにもかかわらずその気配は薄く、まるで体重を消したかのように静かに水面の上へ立っている。

「《霧隠れの術》。」

スツと印を結んで呟くと、その姿は急速に濃くなる霧に覆い隠された。

「まずは俺を消しに来るだろうが……。……桃地再不斬……。
コイツは霧隠れの暗部で『無音殺人術』サイレントキリングの達人として知られた男だ。
少しでも油断すれば、気づいたらあの世なんてことになりかねない。
俺も写輪眼を全て上手く使いこなせるわけじゃない……。気を抜くな
！……！」

みるみる霧が濃くなる中、その緊迫した声に4人の間にも緊張が走る。

周りの景色が完全に消え、互いの姿をかるうじて確認出来る程度しか視界が無くなった時、キリキリと体中に冷たい悪寒が走り、縛り付けられたかのように動かなくなった。

殺気。

眼球の動きひとつさえ気取られて殺されてしまう……。……。自分の命を握られてしまっている……。そんな感覚に陥ってしまう。

サスケの頬を伝う汗がポタリと落ちた。

彼は“痛み”を乗り越えて新たな目的を見いだした。
しかし、その足掛かりとなった“あの夜”が少年の心に負わせた深

い傷は癒えることなく、彼のトラウマとなって今も深く根強く残っている。

そして今、襲い来る殺気が引き金となり、そのトラウマは彼の心の臓を貫く“刃”と化していた。

胸の奥底から氷のように冷たい液体がジワジワとひろがり、体は無意識に小刻みに震え出す。

息が出来ない。

第七班の中でリーダー的存在だった彼はもうどこにも居ない。

そこに立っていたのは、ただ一人の“幼い少年”だった。

「サスケ。」

急に聞こえた声に“少年”の体がビクリと大きく揺れる。

「安心しろ。お前達は俺が死んでも守ってやる。」

目の前の広い背中に、体の震えが少し収まった。

「俺の“仲間”は……絶対殺させやしなーいよ！」

その言葉にナルトとサスケの顔付きが少し柔らかくなる。

刹那。

「終わりだ。」

3人の背後の空気が揺れた。

決して侵入出来ない筈の卍の陣のど真ん中に再不斬がいた。

刃物が霧で濡れた表面をギリリと光らせながら牙をむく。

マズい………！！咄嗟に動こうとするが、まだ筋肉が硬直しているのか動きが鈍い。

だが次の瞬間、衝撃を感じると同時に体が投げ出された。

見るとカカシが再不斬の胸にクナイを突き刺していた。

動きの反動を利用して再不斬以外を突き飛ばしたらしい。

辺りを見回すと、サクラはタズナの斜め後ろに居た。

何故そんな所に居るのかという疑問が頭を掠めるがすぐに思考から外される。

視界に入った再不斬の体から流れていたのが、血ではなく“水”だったからだ。

「先生！後ろお！！」

咄嗟にナルトが叫ぶが、遅い。

肉体だった水が地面に叩き付けられると同時に、横に振られた刃物がカカシの体を真つ二つに切り裂く。

が、全員が目を見張った時、低い声が響いた。

「“終わり”だ。」

再不斬の首にクナイが突き付けられていた。

「スッゲーー！！！！」とナルトは思わず声を上げ、サスケもそれに目を奪われる。

「ククク…………やるじゃねえーか。あの時既に、俺の《水分身の術》はコピーされてたって訳か…………。」

カカシは再不斬からコピーした水分身を使い、分身体にいかにも本物であると思わせるようなセリフをしゃべらせることで、再不斬の注意を完全にそちらへ引きつけ、本体は《霧隠れ》で隠れて動きを伺っていたのだ。

「けどな…………。」

「…………俺もそう甘かあねえーんだよ。」

不意に空気がビリリと震え、聞こえてきた声はカカシの“背後”からだった。

(…………しまっ…………!!…………)

咄嗟に振り返る。

空気を押し上げ唸りを上げる巨大な刃物がすぐそこにあっただ。

距離を取るうにも間に合わない。

地面に伏せると刃物が頭上を通り過ぎる。
が、視界が狭くなったのが仇となったのか続けざまに繰り出された
足に反応が遅れ、腹にめり込んだ。

口から息が漏れて体が横に蹴り飛ばされる。

「せんせー！ー！」というナルトの声が耳に入ったのと同時に水の中へ落ちた。

体を取り巻く水が鉛のように重く、糊のように肌にまとわりつく。

「……ただの水じゃない……。
チャクラが練り込まれているのか……！？」

「……馬鹿が……。」「と声がした途端周りの水がぐるりと体を取り囲み、自分を閉じ込めた。

「ククク……ハマったな。脱出不可能のスペシャル牢獄だ。お前が居るとやりにくいんでな。」「

一度姿を隠し、再度水分身で隙を作ろうと水の中へ逃げ込んだのが仇となった。

油断した……。まさかここまでの奴とは……。

「…………さてと…………。カカシ。お前とのケリは後回しだ。…………
まずはアイツらを片付けさせてもらっぜ。」

体を動かそうとするが、チャクラを練り込まれたその中では、指一本動かすことでさえ困難だった。

目の前の水面が人型をかたどっていく。

マズい……………！！！！

「お前ら！タズナさんを連れて逃げろお！！！」

ゆらりと目の前に立つ再不斬の水分身がギロリと目を見開く。

二人の背筋にあの悪寒が走る。

マズい……………。このままじゃ本当に……………。

カカシの頭に『全滅』という文字が浮かんだ時、再不斬の前にあのピンク色の髪がなびいた。

「……………後ろの3人をやるっていうなら……………」

「“俺”を……………殺してからにしろ……!!」

波の国【其の六】（後書き）

今回は間違いはなかった……ハズ！（。）。（オイ！（でも、間違いは無いと思います。未熟ですみません）（戦闘描写難しいです）（そして主人公の扱いがみんなヒドくなってる気が）（。

「この表現どうなの？」「もう少しこうしたほうが……。」というご意見も大歓迎です。

ご意見、ご感想お待ちしております。

今回も読んでくださった読者の皆様、本当にありがとうございました。m（-）m

波の国【其の七】

俺を殺してからにしろ

そう言つて目の前に立ちはだかった少女を上から下まで観察する。

2つに結んだ長いピンクの髪。和服のような上着に長ズボン、黒い手袋。

女のくせに男みたいな格好をしたソイツはジツとこちらを射抜くように見つめていて、その緑の目には揺るぎない『闘志』が宿っている。

今の顔なら、確実に俺のほうがマシだと思つそのチグハグな服もサマになつていないこともない。

確かにこのガキは、他の2人と違ってあの殺気の中でも全く怯むことなく立ち続けていた。

水分身が卍の陣の中に現れた時も、カカシの水分身のせいで隙が出来たつてのが大きい、タズナを引っ張つて下がらせていた。

後ろで震えているガキ共よりは少しばかり肝が据わっているのかもしれない。

………が、先ほどまでのコイツを見ているためか、黒髪のがきのほうがまだマシに見える。

「さ……………サクラちゃん!？」

「……………!!バカかテメエは!？」

「無駄死にしようってか？」

「まあ、そのこの2人よりはマシだがな……………。」と口々に止めつつも体の硬直が溶けきれないガキ共を白い目で見ながら呟くと、隣から焦ったような声があがる。

「バカ!!よせ!!」

「……………フン。俺が言うのもなんだが、そのこのサルマネヤローの言う通りだ。お前じゃあ時間稼ぎにもならねーだろうよ。」

……………が、まあ、その心意気だけは認めてやるがな。そんなに殺されたいなら……………せめて一瞬であの世へ送ってやるよ。」

こんな奴ら相手に“霧”を使うまでもねえな。とつとと終わらせてやるか……………。

晴れた視界の中で、そこに在るだけで辺りを鮮やかに彩るピンク色の髪を見ながら首切り包丁に手をかけると、ガキがニヤリと笑って挑発してきた。

「あんまり舐めてつと痛い目見るぜ？」

「テメエはバカか！？」

「……………サスケ。……………今気づいたの？」

「居直ってんじゃないやねえ！テメエは下がってる！」

「そうだってばよサクラちゃん！！そんな強い奴相手に……………！！！」

「……………だったら逃げんのか？」

こちらを見据えたまま、背後の2人の言葉に笑みを浮かべる。

「今逃げたら、確実にカカシ先生は殺されちゃうでしょ。」

それに……………と言いながら指を噛み、流れ出す血で額に一本線を引きながら更に言葉を重ねる。

「時間稼ぎくらいは出来る。とりあえず、まずはカカシにいを返し

てもらおう。サスケとナルトはタズナさんをよろしく。」

一体どこからそんな自信が出て来るのか。

先のカカシとの闘いを見ていただろくに、3人の声を余所にクナイを構え、目をスーツと細める。

黒髪のがきが腕を掴んで下がらせようとするが全く応じるつもりはないらしい。

『身の程知らず』にも程がある。いや、“バカ”だからこそ『身の程知らず』なのか。ここまでバカだと、舐められていることに怒りを感じるどころか、逆に笑いが込み上げてくる。

「ククククツ!! やっぱただのがきだな!!」

いきなり笑い出したオレに後ろの二人は一瞬ビクリと体を揺らす。やっぱ木の葉は噂通り……かなり平和ボケしてやがる。こんな奴らを忍にするなんて信じらんねーな。『不良品』もいいところだ。

「オレあよ……お前らくらいの年の頃には……もうこの手を血で紅く染めてんだよ……」
お前らと違ってな!」

ピンク頭以外の奴らが目を見開く。

すると水の中からカカシが悔しげに呟いた。

「鬼人……再不斬！」

「ほう……少しは聞いたことがあるようだな。」

「……その昔、『血霧の里』と呼ばれた霧隠れの里には忍者になるための最大の難関があった。」

フンと鼻を鳴らしてカカシを見る。

「あの卒業試験まで知ってるのか。」

「なんなんだってばよ？あの卒業試験で……？」

「生徒同士の『殺し合い』だ。」

ピンク頭の次にバカそうな金髪小僧に教えてやると啞然とした表情になった。

本当にコイツらは表情がコロコロ変わりやがる。

「ククツ……。同じ釜の飯を作った仲間同士が2人一組になり殺り合う。……もちろんどちらかの命尽きるまでだ。」

「だが10年前……その卒業試験が大変革を遂げざるをえなくなる。」と隣がご丁寧につけ足した。

「その前年、まだ忍者の資格も得ていない幼い少年が……1000人を超えるその年の受験生を喰らい尽くしたんだ。……なんのためらいもなく……な。」

3人の視線が集まる。

……さて、そろそろいいか……。

「……楽しかったなあ……“アレ”は……。」

顔に浮かぶのは“狂喜”。口元を覆う包帯の上からでも分かる程の笑みを浮かべ、弧を描く目が3人に向けられる。先の殺気とは比べものにならない冷たい空気が襲いかかり、ビリリと皮膚に静電気が走り心臓を凍り付かせる。

サスケはサクラの腕を握り締めたまま体が動かないでいた。

目の前が真っ白に染まる。
脳が敵を認知するのを拒んでいるかのように敵も、周りも視界から消えて……………。

ギインツという金属と金属がぶつかる音にハッと我に返る。

見るとサクラがクナイで再不斬の刃物を受け止めていた。

よく見るとクナイの周りを何かがまとわりついている。

(……………チャクラか?)

どこか他人事のようにそんな考えが頭をよぎる。

受け止められた側も驚いたのか、さっきはあれほど冷たかったその瞳を見開いてサクラを見つめている。

……………が、もう止める気は無いのか一端距離を取ると再び刃物を振り上げて襲いかかって来た。

「……」

咄嗟に掴んでいた腕を引き戻して前へ出ようとしたが、次の瞬間視界が反転した。

体が宙へ投げ出され、抵抗することも出来ずそのまま風が耳元を通り過ぎていく。

と同時に背中に衝撃を感じ、「ブヘエ」というなんともだらしのない声が背中から聞こえた。

「いつてえ！！何やってんだってばよサスケエ！！」

「グツ……………。うるせえ！」

「！それよりサクラちゃんは……………！？」

慌てて視線を戻すと、サクラの体が刃物の上に浮いていた。

どうやら刃物の上に片手をつき、飛び上がって攻撃をやり過ごしたらしい。

そのまま腕を軸にして刃物の上でクルリと体を回転させ回し蹴りを放つ。

素早い動きで繰り出されたそれは避けることを許さず再不斬の頭へ直撃する。

ドカツという鈍い音がした次の瞬間。

コントロールを失った水が水滴となりキラキラと光を反射させながら

ら辺りに飛び散る中、地面へ着地したアイツの髪がフワリと揺れる。

まるでそこだけ周りから切り取られたような光景に目が奪われた。

再不斬はそれを見て目を細める。

「……………なるほどな。……………どうやら口先だけじゃないようだ。ちったあやるみてーじゃねえか。なら……………これはどうだ？」

再び2本の指を立ててチャクラを練り、現れた水分身は3体。

だがそれにも顔色を変えることなくクナイを構えると、着地した時の姿勢をそのまま利用して地面を蹴り、姿を消す。

ピンク色の風が吹き抜けると同時に水分身は水へ戻り地面へ叩きつけられる。

刹那。

サクラが再不斬の頭上へ舞い降りた。

咄嗟に片手で振り下ろされる足を受け止める。
が、その重さに腕が痺れた。

なるほど。どつりで水分身が一発でやられるはずだ。

緑の目をジロリと睨む。

不意にその唇が動いた。

「……………本当にそう思ってるのか？」

……………？なんだ……………？

「本当に心から“楽しかった”と……………俺の目を見て言えるのか……………？」

着地するなり素早い動きで足払いを仕掛けて来る。

「ハッ！何ワケわかんねーこと言ってやがる！！」

軽くそれを飛んで避けながら鼻で笑ってやるとソイツの姿が消える。

(……………チツ！ガキのクセに意外と速いじゃねえか！)

素早く辺りに目を走らせるが、動かした頭の後ろに気配を感じて振り向くと、あの緑の目に自分が映っていた。

全て見透かされている……………そんな思いがよぎってすぐに振り払うが、再び唇が開く。

「なら……………何故……………、今キミは“ここに居る”？」

瞳の色が深く、濃くなる。

一瞬吸い込まれるかのような錯覚に陥るが、同時に額の血の線が意志を持っているかのように形を変え始めていた。

刹那。

あの緑の目が赤く染まり出す。

今までのソイツからは考えられないような鈍い冷たさを含んだそれはネットリとした光を反射させ、射抜くように見つめてくる。

ゾクリと悪寒が走った。

が、同時にソイツの動きも急に鈍くなる。

「うわぁ!」「ぐぁっ!」

次の瞬間。後ろで上がる叫び声に隙が生じた。

がら空きになった腹に回し蹴りを喰らわせると、体をくの字に折って飛んでいく。

そしてそのまま木に激しく背中をぶつけて口から血を吐くと、ようやく大人しくなった。

（少し油断はしたが………水分身を潜り込ませといて正解だったな。）

全員がこのピンク頭と水分身の闘いに気を取られている時に、あらかじめもう一体、水分身を作って草影に隠れさせておいたのだ。

こんなに手こずらされるとは思わなかったが、これで邪魔者は居なくなつた。

「さあて……。だいぶ待たせちまつたな……。？次は……。お前らの番だ。」

波の国【其の七】（後書き）

主人公が再不斬さんにナルトより頭が弱いとレッテル貼られちゃいましたね（-”-;）

一応、成績は主人公のほうがいいんですが……………（-”-;）
ハハハ……………。

なんかサスケくんがものすごく弱虫みたいに見えますが、原作でも大蛇丸を前にかなり凹んでたのであながち間違いでもないんじゃないのかなあ……………なんて思ってみたり……………。

あんな思いしたら、このくらいトラウマになって当然じゃないっかなあ……………？忍っていても小学校出たての男の子だし？なんて思ってみたりしているわけでした……………。

そんなこんなですが、果たして2人は再不斬に立ち向かうことが出来るのか！？

必見！！

……………なんちゃって”（ノくノ）ノ

波の国【其の八】

「サクラー!!」「サクラちゃん!!」

2人の声が重なるが、サクラの体はピクリとも動かない。

刹那。そのサクラの姿に、四角く切り取られた冷たい光の中で浮か
び上がる血に濡れた小さな体が重なり、サスケの黒い瞳が揺れる。
が、次の瞬間腹に激痛が走り意識が飛びそうになった。

口の中に鉄の味が広がっていき、薄く開いたまぶたから見える景色
がぼやけ、グニヤリと歪む。

再不斬は水分身に歯が立たず一方的にやられる2人をつぶさに観察
していた。

(……………コイツらはさっきのピンク頭みたいなことはねエみてーだ
な……………)。

この後力カシとやり合うのだ。
出来るだけ体力は温存しておくに越したことはない。

3人のうちの1人が予想以上の動きを見せたため警戒していたが、この様子なら水分身は1体でよさそうだ。あのガキが目を覚ます頃には終わる。まあ、覚ます前にトドメを刺してやるがな……………。

「サクラ」と呼ばれていた子供からまた視線を戻した先では、蹴り飛ばされた金髪の頭が地面とこすれあい土埃をたてていた。

十十十十

「フン。その程度か。まあ、ただビビって突っ立ってるしか脳がねえんだから当然か……………。

お前らみたいな女に守られるようなのは“忍者”の前に男でもねエ。

……………ただの腰抜けだ。」

頭の上から蔑むような声が降ってくる。

蹴られた頬も腹も麻痺しているのかただの肉の塊がくっ付いているだけのよう感覚が無い。

一瞬、頭の中で誰かの声が聞こえた。

もうこのまま起き上がらずにいたほうが楽なんじゃないか

薄っぺらで中身の空っぽな器にすっぽりと包まれたかのような感覚がジワジワと広がり、それと共に体が地面の重力に引きつけられる。

……なのに。

動かない少女の姿が視界の端に映るなり、胸の奥が、腹の底が、煮えたぎるかのように熱くなる。

なんだ、これは。

その熱と呼応することく心臓が激しく脈打つ。
それと共に燃えるような熱い紅い血が体中を駆け巡り、全ての細胞が雄叫びを上げた。

“ 違ふ ”

確かに全て諦めてしまえば楽かもしれない。

けど………

逃げたくない

蒼い瞳をカッと見開く。

グツと手を握り締め立ち上がろうとすると左手からズキリとした痛みが走る。
が、姿勢を崩すことなく更に左手に力を込め、ナルトは口角を上げた。

自分が付けた傷。

『決意』の象徴であるそれから伝わる痛みが、少年を支えた。

起き上がりかけた途端顎の下の柔らかい部分に足がめり込む。

体が宙に投げ出され落ちた後も地面の上を滑ってようやく止まる。

「グッ……………ゴフツツ……………」

「今更やる気になったところで、テメーに何ができる？」

薄く目を開き、声が出たほうを見ると足の下に自分の額宛てがあった。

「偉そうに額宛てまでしても忍者とは呼ばねえ。お前らはただ忍者になった“つもり”でいるだけだ。

本当の『忍者』ってのは幾つもの死線を超えた者のことを言うんだよ。

つまり……………俺のビンゴ・ブックに載る程度になって初めて『忍者』と呼べる。」

そうかもしれない。

目の前に立つ人物からすれば、今までずっとみんなと仲良くやって

きた自分なんてちっぽけな存在でしかないのだろう。

圧倒的な実力と経験の差。

自分が何かしたところで結局はただ殺されるだけなのかもしれない

「……………るっせえよ……………」

「あ？」

フワリと立ち上がる口から漏れた言葉は果たして誰に対するものなのか。

恩師からもらった額死てが眩しく光る。

視界に広がる白い光の中で、あのピンク色の髪が、フワリと揺れた気がした。

「うおおおおおー!!」

叫びながら走り出したかと思うと、ドカッという鈍い音と共に再び地面へ放り出される。

“バカか”と言おうとしたサスケの目が見開かれた。

立ち上がったナルトの左手に、額宛てが握られていたのだ。

「おい。そこの裸ヤロー……………。てめえのビンゴ・ブックに新しく載せとけ!!」

いずれ木の葉隠れの火影になる男……………。“木の葉流忍者”うずまきナルト”ってな!!!!”

強く結んだ額宛てが落とす影の中で、空色の瞳が光る。
その澄んだ蒼い輝きには一分の揺るぎさえも無かった。

チラリと斜め後ろを振り返る。

視線の先にはいまだピクリとも動かない少女が居た。

不安がよぎる。が、今動いてしまえば敵の矛先がそちらへ向いてしまいかもしれない。

本当なら先の彼女のようにカッコいいセリフを言いたいところだが、今、この窮地を脱するには、それは逆効果にしかならない。

だから

「サスケ、耳貸せ。作戦がある。」

少し悔しい。が、ここはサスケと組もう。

そう思いつつも、ナルトは何故か胸が高鳴るのを感じた。

もう一度チラリと振り返る。

あの少女と出会って、世界が変わった。

まるで今までのことが嘘だったかのように、彼女がそばにいるだけ

で、周りがピンク色に染まる……そんな気さえするほど、毎日が変わった。

一気に“友達”も増えた。

外を歩けば向けられていた数々の冷たい視線の中にも、彼女が居ない時でも、暖かい眼差しが混ざるようになった。

だからかもしれない。

会った時から、ずっと。彼女から“守られてる”……そんな気がするのは。

一緒になってサスケにちょっかい出したり、2人でとにかく術や手裏剣の修行をしたりしていた時も、そんな素振りは見せたことはないが、どこかでずっと気遣ってくれている気がした。

いつも彼女が自分に向ける目は、どこまでも暖かかった。

ずっと、見守ってくれていた。信じてくれていた。

だから

(だからサクラちゃん。……………今度は……………)

今度は、俺が守るから

波の国【其の八】（後書き）

今回はかなり手こずりました。

おかげでテストも絡んで遅くなりました（T―T）。

でも、その間もアイデアが浮かばなくて今までの部分を直したりな
んかしてました。 オイ

まあ、でもおかげでレベル3くらいだった小説がレベル5くらいに
なりました。（え？MAXはひやく（略））

だいぶ皆さんのアドバイスにも近づけたと思います。

この小説は皆様の暖かい応援をガソリンに、アドバイスと共に成り
立っています。

支えてくださっている皆様に深く感謝申し上げます。これからもど
うぞよろしく願います！m（―）―（―）m！

波の国【其の九】

作戦がある

そう言つてグイツと血をぬぐうナルトにサスケは一瞬目を見開いたが、ゆっくりと立ち上がると、同じように少し固まりかけた赤い跡をこすり取つた。

「……………フン。あのお前がチームワークとはな。」

その声色はどこか嘲りの色を含んでいる。
が……痛みで恐怖が消えたのか、その不敵な笑みを浮かべる黒い瞳にも、あの紅い炎が灯っていた。

「お前ら何やつてる！？ 逃げろつていつたる！
俺が捕まつた時点で白黒ついてる！ 俺達の任務はタズナさんを
守ることだ！ それを忘れたのか！？」

そのうわづつた声に我に返り、「おっちゃん……」と気まずそうにナルトが後ろを振り返ると、タズナは少しの間を置いてニヒルに笑つた。

「……………なあに。元はといえばワシがmaidした種……………。この期に及んで超命が惜しいなどとは言わんぞ。すまなかつたなあお前ら……………思つ存分やってくれ。」

「……………そういうわけだ。」

「覚悟はいいな？」

フンと満足げに鼻を鳴らしてタズナから再不斬へと視線を戻すサスケに続き、ナルトも挑発するかのように笑う。

473

……………面倒な奴らだ。

再不斬は再び闘志を取り戻す2人に眉間にしわを寄せた。

弱いくせにどこかしぶとい。こういう輩が敵だと、相手をしているこっちがおっくうになってくる……………。

そんな思いがよぎるが、何故だか…胸の辺りがくすぐつたい。

「いくぜー!」「ああ。」

俺が背中の中首切り包丁に手を掛けたのを合図に、金髪小僧が印を組む。

途端に周囲が金色とオレンジという、目がチカチカしそうなド派手な色で囲まれた。

「……………ほー。影分身か……………。それもかなりの数だな……………」

確か、上忍レベルの術だったか。

頭上を覆うオレンジの波を見上げながら、首切り包丁に掛けた手に力を込める。

「うらあ！！！」

まるで米俵を積むように周りを囲んだそれを一回、刃物を振り抜くだけの大きな動作で弾き飛ばす。

(やっぱり超無理じゃ……………！ あんなのに勝てるわけが……………)

「おっちゃん。」

目の前で煙となって消えていくナルトを見て冷や汗を流していると、不意に後ろから声がした。

振り向くと、ナルトがサクラを壊れ物でも扱うかのように、そっと横抱きにして立っている。

「おっちゃん。サクラちゃんのこと、頼むってばよ。」

そう言って差し出してくる青い瞳は、目の前の光景を映してもなお、光が衰えてはいなかった。

475

「サスケエ!!」

叫び声と共に放たれたモノを掴む。

（！） なるほど。そういうことが……お前にしちゃ出来だ
（！）

掴んだ途端、ナルトの意図が分かった。

クルリと起き上がると同時に、ガチャリという軽い金属音と共に4つの刃が開く。

「ただの手裏剣なんざ俺には通用せんぞ。」

(確かに効かないな。……………“アンタ”には……………な。)

ダンツと地面を蹴り宙へ舞いながら、サスケは一瞬、口角を上げた。

放たれた手裏剣は緩やかなカーブを描き水分身の再不斬へと飛び…

……………その横を素通りしていった。

「！」

「……………なるほど。本体を狙って来たって訳か……………。」

……………だが、甘い。という声と共に手裏剣が再不斬の片手に収まる。

しかし影からもう一枚の手裏剣がスルリと抜けて反転すると、素早

いスピードで迫って来た。

「なに!?!」

(これは影手裏剣の………!)

2人は目の前に現れたもう一枚の手裏剣に目を見開いた。

が、手裏剣は狙いに当たることなく、宙に浮いた再不斬の下を通り過ぎる。

「やはり甘いな。」

「ここだあ!!」

「!?!」

先の戦いを見ていてこの程度か………と目を細めた時、背後から叫び声が響いた。

咄嗟に振り向くと、煙にまみれた中にあのオレンジと黄色が見え、空中を突っ切るクナイがキラリと光る。

顔をめがけて距離を縮めてくるそれを、体が反射的に避けた。

だが、体が空中にあつたため動作が遅れ、クナイが目の下の皮膚を浅く切り、少量の血液が舞う。

頭の中が怒りで染まり、手に持ったままだった手裏剣を構えて投げようとした瞬間、手裏剣が何かに当たった。

視界の端に、たっぷりと水を含んだ銀髪の髪がポタポタと大きなしずくを滴らせ、暗い影の中から鋭い赤い瞳がこちらを射抜いているのが映る。

その赤い色が、あの少女が見せた瞳と重なって、体中にゾクリとした冷たい悪寒が駆け巡った。

「ぶはあー!!」

「……ナルト、作戦、見事だったぞ。成長したな……お前ら……」

視線を再不斬に固定したまま、ザバツと水面から顔を出したナルトに声をかけると、「へへへ……」と少し照れたような笑い声が聞こえた。

「アイツらをなめすぎだな、再不斬。だから術を解かされた。」

無言で睨む再不斬に告げると、その表情がさらに険しいものになり顔に青筋が浮かぶ。

「言うておくが、俺に2度同じ術は通用しない。さて、どうする。」

「……………フン。」

再不斬の言葉ではないぶっきらぼうな“返事”を合図に、2人は飛び上がった距離を取る。

空中で揺れる銀髪に持っていた手裏剣を投げつける。

唸りをあげて回転していたそれはクナイによって弾かれ、どこかへ飛ばされた。

水面へ降り立つと同時に手慣れた印を素早く組む。

かなりの量ではあるが、コイツ相手ならば逆にこのような術のほう
がコピーしにくいはず……………。

そう考えて印を組んでいたが、目の前の相手もほぼ同時に、ほぼ同
じスピードで、“同じ”印を組んでいく。

再不斬の目が見開かれ、その瞳に“焦り”の色が混じり始めた。

……………

「……………なるほど。“コピー忍者”の名は伊達ではないですね……………
……………」

泉から少し離れた木々の中に、1つの影が佇んでいた。

背後の木の少し上の辺りには大きめの手裏剣が深々と突き刺さって
おり、刺さった時の衝撃からなのか、木の葉が2、3枚、ハラハラ
と落ちていく。

（それにしても、あの子は、一体……………。）

少し振り返って下を見下ろすと、ピンク色の髪が視界に入る。
まだ気絶したままだが、あの時見せた動きは……………まるで……………

(……………今考えるべきことではありませんね……………。)

視線を戻した先では、2匹の水竜が透き通った頭かしらをもたげて牙をむき、その鋭い爪で互いの体を引き裂き合い、大きな波となって激しくぶつかり合っていた。

十十十十

(おかしい……………。どういうことだ……………。)

滝のように水が流れるなか、カカシと対峙していた再不斬は違和感を感じ始めていた。

俺が跳ぶと向こうも跳ぶ。俺が走れば向こうも走る。
首切り包丁で切りかかれれば同じように前へ飛び出し、確実に重さで負けてしまっはすのそれをクナイで止める。

……まるで鏡。

本当に相手が“人”であるのか分からなくなってきたそうなの……。

だが、写輪眼は術やら何やらをコピーしてしまうものであるはず……。

だがコイツは……俺の動きを完全に

「読み取ってやがる。」

「!!???」(? なんだ! ? 俺の心を先読みしやがったのか! ?)

冷たい雫が皮膚をつたう。が、目の前の赤の瞳は相変わらずこちらを淀みなく見つめて来るのみ。

その目を見る度、いちいち“あの瞳”と被る。

(くそ! コイツ……)

「むなくそ悪い目つきしやがって……か?」

「! ? クツ……だがしよせんは2番せんじ……」

「お前は俺には勝てねーよサルやるー！！！！」

2人の声が重なりあった。

「！！！？　てめーのその猿真似口…………二度と開かねエようにしてやる！」

素早く印を組み出す。が、不意にその手が止まる。

視線の先には、カカシの隣に、“自分”が立っていた。

(！？　バカな！　奴の幻術か…………！？)

そう思った次の瞬間、カカシが素早く印を組み出す。

「《水遁大瀑布の術》！！」

途端に水面がざわめき、大量の水が大きな水弾となって殴りかかって来た。

バカな……。あれは俺が先にやろうとした

襲い来る水に揉まれながら必死に頭を働かせようとしたが、背中に強い衝撃が走り、思考が中断させられる。

それと同時に足と腕にクナイが刺さり、「終わりだ」という声と共に、首にクナイの先が触れるのを感じた。

「……………何故だ。お前には未来が見えるのか……………!?!」

「ああ。お前は死ぬ。……………が、その前に1つ、聞きたいことがある。」

「再不斬、お前は……………」

刹那。カカシが言葉を言い終わるか否か……………。その瞬間に、クナイを突きつけていた首に2本の針が貫通した。

ゆっくりと傾いていく体から流れる血が、生きた痕跡を残そうとするかのように、倒れていく軌道に沿って赤い線を描いていくなか。

やや上の辺りから、どこか楽しげな、少し幼い声が聞こえて来た。

「フッフ…。本当だ。死んじゃった。」

波の国【其の九】（後書き）

ふと思ったこと。

“あれ？ 再不斬さん、脇役なのになんか視点が一番多くね？”

既にサスケやナルトよりも多いような。いや、多いですよ？

でも、なんか書きやすいんですね。彼……。

間違いなく、彼の視点はまだまだ出てきます。

逆にこの作品では殆ど出てこない主人公視点……。

でも、これからもほとんど出さないかもしれないですね。

それは何故か。

振り回されるんです。作者が……（T-T）周りなんてお構いな
しに、ロケットよりも真っ直ぐに飛んでってしまうというかなん
と
いうか……（T-T）トホホ

まあ、そんなこんなで、今までの所もまだ表現とか持て余している
部分もあつたりしますが、これからもどうぞよろしくお願いします。

ご意見、ご感想お待ちしておりますm（）（）m。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7987o/>

タイセツナモノ

2011年12月11日21時53分発行